小說 發展

岩野泡鳴著

小說 發展

岩野泡鳴著

はしがき

この著『發展』は僕の五部作の一である。事件聯絡の順序から云へば、第一は『耽溺』第二は『發展』第三は未だ發表せず、第四は『放浪』第五は『斷橋』だ。然し發表した順序は、先づ第一のが明治四十二年二月の新小說に揭載せられ、翌年の五月に單行本となつて易風社から出た。次ぎに、第四のが明治四十三年七月に東雲堂から直ちに單行せられた。それから、第五のが明治四十四年一月一日から每日電報と後の東京日々に渡つて前篇六十回まで連載せられ、その後篇四十回分が題を『寢雪』と附けられて、本年五、六、七月の新小說に載つた。いづれ單行本になる時には、『寢雪』は『斷橋』の一部になつてしまうのである。

『發展』乃ち、第二のは、昨年の十二月中旬から大阪新報に百回連載せ

られたのを、今回、野依氏の實業之世界社から單行して貰ふことになつた。新報に載つてゐる時から、これに對して諸方の有識者諸氏の批評は聽かせられてゐたが、僕自身も『耽溺』に次いで少からず會心のところがある作である。『放浪』を書いた時は、東京の郊外に於て明日のパンをどうして得ようかと云ふやうな狀態であつたから、早く書き上げて稿料にしなければならなかつた。要するに、充分な時間がなかつたのだ。だから、同時に出來上つた『斷橋』(『寢雪』を含む)を他日單行する時には、その前に所々訂正を加へようと思つてゐる。が、今回の著は先づさう云ふ必要が殆どなかつたと云つてもいいほどだ。

いづれまたしッかりした批評をして吳れる人もあるだらうと期待してゐるが、ここに一つ、田山花袋氏が文章世界（五月十五日號）に於ける評言に對して、僕の考へを陳述して置く必要があるかと思ふ。田山氏の物質的描寫に於ける缺點は既に僕が屢々指摘した。氏は暗に

それに對して『單に深く鋭くだけでは解らない。もう少し具象的に言つて貰はなければ』と措して、僕等が深く鋭い主觀を求めるのは『感傷的、』乃ち、センチメンタルであるかのやうな言を加へた。そして氏自身の所謂『徹底した自然に似た主觀』が却つて單に物質的な感傷であるを知らないやうだ。そこを僕は淺薄で、鈍くもまだ形式に捕はれてゐると云ふのである。

田山氏はただ物質的範圍にのみ見地を置いて、そこから感傷してゐるのを傍觀描寫もしくは『見た文學』だと決め込んでゐるに違ひない。然しそれは心靈的形式で見た文學でないと云ふだけで、靈型の代りに物的なのを持つて來たに過ぎない。そのどちらの型をも破壞した最も自由な立ち場（乃ち、肉靈合致的より外にない）からでも、見た文學は出來る。僕等のはそれで、それがまた『悶へた文學』にもなる所以は、主觀が田山氏の型のやうに固定しないで、幸ひにも自由に流動

融和するからである。

自由な主觀の流和を以つて直ちに無批評、好惡、感傷などと同一視するのは、僕等の見たと同時に悶えた文學を理解するには餘りに狹隘な獨斷があるからだ。田山氏並に氏に雷同して自然主義の初歩に止まる一派は、藝術品と云へば、偏狹な物質的描寫でなければならないやうに考へると同時に、物質的に無批判で、感傷してゐるのを少しも缺點と氣付いてゐない樣子が見える。そして僕等の新自然主義（或人はこれを本年の流行語に譯して、眞のネオロマンチシズムと云つたが）の描寫にばかりこの缺點があるかの如く思つてる。が、そこでもッと具象的に辯駁を重ねて置く必要があらう。

田山氏は僕の『發展』の描寫法が『家』の作者などとは『正反對』だと云つた。無論、さうだ。僕の小説に『日記のやうなところ』があつても必然的な聯絡があるに反し、藤村氏の活動寫眞的な物語りには、

ちぐはぐな日記の覺え書きを無理にさし込んだやうな跡がある。僕のに『歌のやうな處』があつても、それは公然作中人物の咏嘆であるに反し、藤村氏のには、尤もらしく押し包んだ作者その人の感傷が見えてゐる。田山氏はまた『黴』の作者とも違ふと云つた。それも無論だ。秋聲氏のには、氣の毒なほど思索的方面を缺いた主人公が描かれてゐるに反し、僕の五部作には、特に一種の哲學者を以つて任ずる人物がおもに活動してゐるのだ。

然し田山氏が『發展』には作者が『自分の感じたことが正當だといふ風に書いてある』と云ふに至つては、誣言も亦甚しい。多少そんな傾きがあつたと思ふ『放浪』にさへ、主人公の考へ若しくは感じのぐれ違ひや、無理に自己の哲理を成立させようとしたことなどが、立派に描き出してあるのではないか? 疑つて見れば、氏も多くの文學的職人肌の人々と同樣、自身に思索上の煩悶や苦心を左ほどして來た經驗

がない爲め、小說中に描かれた思索的で而も熱烈な人物の性格や心持ちを充分日本人的に呑み込めないのかとも思はれる。然らざれば、又氏の獨斷を非實際的に述べてゐるのだらう。

主人公は熱烈なのだから、その主觀が「迸出した』と見て呉れたのはありがたいが、その『一人の人物の意見で他を取扱ふこと』などは決してしてない。他の人物を主人公がどう見てゐるかと云ふことは、主人公その物を描寫するに最も必要の一つだから、屢々書き現はされてゐようが、『主人公の向ふ側に立つた（乃ち、主人公以外の）人物などは、殆ど見やうともしない位にまで冷淡に取り扱はれてゐる』ことは全くないことだ。作者たる僕自身の意見を離れて秋聲、秋江、白鳥等の諸氏の言を聽いても、主人公よりは却つてお島の方がよく現はれてゐるとあつたではないか？僕自身は主人公に最も力を盡しただけに、矢張り、義雄が最も出てゐると思ふが――『千代子を汚い姿だと云つて

それを現はさうとするのは、所謂說明の形を取つたもので』と云ふ田山氏の意味がはツきりしないが、千代子に關しても、汚いと義雄が思つたとあるのは義雄の感じであつて、渠のゐないところでもどうも男子の期待する女らしくない狀態があるので、初めて義雄の感じたことが實際だと云ふ風に具象化せられてゐる。義雄に現はれた感じを直ちに說明の形と見るのも餘り獨斷に過ぎる。

義雄もしくはその他の人物の感じは、心的生活上のことであると同時にまた物的感覺上のことであるから、精神即感覺の合致的描寫論から云へば、そのままで以つて具象的な描寫が出來ないことはない。それを田山氏は中村星湖氏等と同樣、感覺と心的生活とを空想的に區別して、感覺は描寫出來るが、心的生活は說明の外に道がないと誤解してゐる。描寫が專ら感覺的だとは、感覺が精神と合致的だと云ふ見地からでなければ、全部的命題にはならない。氏の如き半面的、唯物的描寫

論では、その描寫と見えたものは全部、乃ち、内容を直下に暗示する(それが正當な描寫だが)のでなく、單にそれを表面から『の如し』的に形容するのであるから、寧ろ説明と云つた方がいい。　小説の表現法に四階段ある。　一、説明的説明。(これは最も舊派の所有であつた。)二、説明的描寫。(藤村氏の概念的靜觀描寫がこれだ。)三、描寫的説明。(田山氏の唯物的平面描寫がこれだ。)四、描寫的描寫。(おもな短篇に於ける白鳥氏並に『黴』に於ける秋聲氏のが近い。)銳敏とか深刻とか云ふことはこの種の表現の自然的結果であつて、ことさらに感傷的に要求するのではない。　そして僕の肉靈合致的描寫はこの第四階の表現だと信じてゐる。(この四種表現論は別な場所で詳説する。)

田山氏はこの續き物を『三分の二ほど讀んだばかりだから、よくは解らないが』と遠慮してゐるが、人生は一個の特殊物に籠つてゐると同樣、内容的小説に於ける百回の内容は乃ち一回にあるものだ。　三分

の二がたッた一でも、また新聞紙上での一回分でも、それを少し忠實に讀んで呉れたら、その人が讀んだところだけで僕の作の內容全體も分るものと思ふ。進步した新聞小說は、この行き方を以つて『跡は明日のお樂しみ』的な興味を打破してしまふべきものだ、と僕は信じて憚らないのである。

明治四十五年六月五日

北攝池田の假宅にて

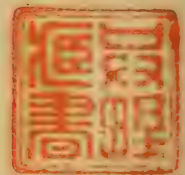
著 者 識

「發展」篇中人物

田村義雄（思索的詩人）
同　千代子（義雄の妻）
同　富美子（兩者の娘）
同　諭鶴（兩者の子）
同　知春（同）
義雄の繼母（未亡人）
田村馨（義雄の弟）
清水お鳥（義雄の愛婦）
原口清造（義雄の老友）
同　潔（清造の子）

村松十衞（辯護士）
田島秋夢（小說家）
小泉筒村（琴の師匠）
大野正則（畫家）
同　靜子（正則の妻）
加集泰助（T　K）
橋本重吉（義雄の從兄弟）
お政（原口の書生）
龍土會員大勢
其他

發展

岩野泡鳴

一

麻布の我善坊に田村と云ふ下宿屋がある。二十年來物堅いので近所の信用を得てゐた主人が近頃病死して子息義雄の代になつた。義雄は繼母の爲めに眞の父とも折合が惡いので、元から別に一家を構へてゐた。且、實行刹那主義の哲理を主張して段々文學界に名を知られて來たのであるから、面倒臭い下宿屋などの主人になるのはいやであつた。

が、渠が嫌つてゐたのは、父の家ばかりではない。自分の妻子——殆ど

十六年間に六人の子を産ませた妻と生き殘つてゐる三人の子をも嫌つてゐた。その妻子と繼母との處分を付ける爲め、渠は喜んで父の稼業を繼續することに決めたのである。然し妻にそれを專らやらせて置けば、さう後顧の憂ひはないから、自分は肩が輕くなつた氣がして、これから充分勝手次第なことが出來ると思つた。

「あの家は息子さんでは持つて行けますまいよ」と云ふ風評を耳にした妻は、ます〳〵躍起となつて、所天の名譽を恥かしめまいといふ働きをやつてゐた。が、義雄は別にそれをあり難いとも思ふのではなく、たゞ自分自身の新らしい發展が自由に出來るのを幸ひにした。

繼母は勿論妻子をも眼中に置かない渠が第一に着手しかけたのは一女優の養成である。琴の師匠をしてゐる友人から、その弟子のうちに一名の美人があつて、それが女優になりたいと云つてるが、どうかして呉れないかと云ふ相談を持ち込んで來た。

渠は既に女優志願者で失敗した經驗を一度嘗めてゐるが、兼て脚本を作つたらそれをしッかりやつて呉れるものが欲しいと考へてゐるところだから、わけも無く承諾した。

で、自分の家から芝公園を通り拔けたところにあつた音樂倶樂部の演劇研究部に、自分も會員であるの故を以つて申し込み、志願者をそこの講習生に取りあげて貰ふ相談が成り立つたので、いよ〳〵志願者を渠の家に呼び寄せた――と云ふのは、自分の家から毎日通はせるつもりであつたのである。

家族の反對はいろ〳〵あつたのはあつたが、渠はそんなことには少しも頓着しなかつた。

『來たものを鳥渡でも冷遇すれば、おれのやる事業を邪魔するも同前だぞ！』

女が赤いメリンスの風呂敷に不斷着の單衣か何かの用意をしてや

つて來た時はその姿や顏付きのいゝので、下女までも目をそば立てた。『いゝ女だらう』と云はないばかりにして義雄はそれを引き連れ、その夜、倶樂部へ引き合はせに行つた。が、その最初の引き合せに、氣の變はり易い本人は女優を斷念してしまつた。

紹介者は、倶樂部の諸會員に對して不面目を感じたよりも、自分の家族が女を連れて歸らない自分を見て冷笑する顏の方が、寧ろ自分に取つて殘念のやうに思はれた。

渠は自分の書齋兼寢室に殘して行つた女の赤い包みを見ながら、その夜も、次ぎの夜も、苦い寂しい顏をしてゐた。

その少し以前のことであるが、義雄の繼母に當てゝ紀州からハガキが來た。

『おばさん、お變りはありませんか。わたし、また賑やかな都へ出て、勉

強したいと思ひます。いづれ御厄介になりますから、よろしく。
繼母は困つた顏をして、それを義雄の妻に見せた。
『お千代さん、どうしましよう、ね、こんなハガキが來ましたよ。』
『下手な字、ね。どんな女？』
『わたしはあんまり好かないの。』
『いくつ位？』
『前にうちにゐた時が十七八だから、もう、二十一二でしようよ。』
『どこへ行つてたの？』
『矢板學校へ裁縫を習ひに。』
『まア、いゝぢやアありませんか、來させたッて？』
『お千代さんがさう受け合へば構はないやうなものゝ――でも、ねえ、お父さんの代が變つてゐるし、わたしがそんなことに口を出して、もしどんなことがあるまいものでもないから――。』

『お母さんはお父さんが亡くなられてから急に心配家になつたの、ね、何も商賣だから、かまはないぢやァありませんか？』

『でも、ね――片づいたものがまた出て來るのは、どうせいゝことではないだらうし、若し義雄さんにでも』とほゝ笑みながら、『引ッかゝりが出來たら――』

『まさか、そんなことが――』

二人は笑ひに破れてしまつたが、一方は約ましやかに取り澄ました聲であるに反し、一方はまた甲高な神經質に聽こえた。

義雄の家族がもどつて來てから、臺所の方は千代子の母が下女どもを監督して働くことになつたので、隱居同樣な繼母の居間は、離れの二間のうち、手前の一間に定まつた。その奥の一間には義雄の弟がゐる。隣の寺の庭に面した方にかけて椽がはが取りまわしてあつて、軒下一間ばかりを隔てたところに板壁があり、そこには、父の手を入れた盆栽

の棚が出來てゐる。蘭、おもと、松、棕櫚、こんな物へ弟の馨は亡き人を忍ぶつもりで毎日水をやつてゐる。

離れとおも屋の長い裏廊下の一部との間に、背の高い水洗鉢の根元まで廣がつた小さいたゝき造りの池があつて、金魚が泳いでゐる。その水を取り更へる人も他にないから、弟がその役を引き受け、同時に、裏廊下に添ふた庭のまわりにある草木へ夕がたになると涼しく水を撒くのである。

二人の談笑はその水が撒かれて馨が奥の間に引ッ込んだ時のことで、その時、丁度、義雄は小用に行つてゐたので、二人の話が聽こえた。便所と池との間に離れへ渡る廊下が付いてゐる。そこから手洗鉢の手杓を取り、手を洗ひながら、半ば冗談に、

『何を云つてやがるんだい、馬鹿！』

『おほ、ほ、ほ』と、妻は笑つて、『聽いてたのですか？――あなたの信用は

どこへ行つてもありません。』

『何だ！』かう急に聲が變つて、腦天から出たやうな叫びをあげながら、廊下を渡つて行つて、まだ水も切れない手で妻の横顔を平手打ちにした。

不意を喰らつた妻は、片手を疊に突いて、倒れるのをさゝへた。

『何です、ね、義雄さん。』繼母もびッくりした顔を向けて、『可哀さうぢやアありませんか？』

『可哀さうも何も。』と、つッ立つたまま、わざと唇を嚙んで見せ、『あつたものか？所天に對して敎訓的なことを云ふのァ無禮の極だ！』

『いゝえ、敎訓は必要です――子供に對しても、必要です？』

『まだ分らないか。』と、手をふりあげたのを、繼母に押さへられて、『いつも云ふ通り、おれは子供ぢやアない！』

妻は、その少し出ッ張つてゐる前齒の齒ぐきに所天の最初の手が當

つて、そこから血が出たのをふいてゐる。

『まア、靜かにお坐りなさいよ。』繼母は義雄の兩手を押さへて、無理にそこへ腰をおろさせた。『お客さんが見てゐるぢやアありませんか？』客どもは、また始まつたと云はないばかりに、二階のあちらこちらから顏を出してゐる。その方には簾が下りてゐるので直接には見えないが、繼母はそれを氣にして、

『見ッともないから、大きな聲を出すのはおよしなさいよ。』

『構ふものか？』あぐらをかいて、わざと二階へ聽こえるやうに、『おれは何も下宿屋に關係はない。』

『でも、主人だから、主人のやうに、ね――』

『それは違つてゐます――わたしはこの家の戸主には成つたが、下宿屋はこの表面上の妻たる千代の仕事です。わたしは矢ッ張り元の通り

詩人、小説家、評論家で、また○○商業學校の英語教師です。』

『教師なら、教師らしくおしなさい』と、妻はびくつきながらも悔しさうに。

『また教訓か？』

『お前さんは、まア』と、繼母は千代子に『默つておいでなさいよ――義雄さんの云ふのも尤もだとしても、主人がうちに居つかないやうでは、家の大黑柱が動いてるも同樣で、うちの者が賴りがないぢやアありませんか？』

『居付く値うちがないのです、こんな家には。』

『お父さんの家でも――？』

『さう、さ――お父さんの跡を繼いだのは、わたし自身のからだと精神であつて――こんな家や妻子は、自分にそぐはなければ、棄てゝもいいんだ。』

『棄てられるなら』と、妻は少し身をすさつて、『棄てゝ御覽なさい！』

『ふん、棄てるとも――もう、おれは精神的には棄てゝるんだ。』
『何とでもお云ひなさい――人を表面上の妻だなんて。』
『お前の命令などア受けないと云つてるだらう――おれの心に反感をいだかせるものは皆おれの愛を遠ざかつて行くのだ。愛のないところにやア、おれの家もない。』
『ぢやア、どうしたら』と、訴へるやうに微笑して、『あなたの愛に叶ふのです？教へて下さいと、何度も云つてるぢやアありませんか？』
『手套が投られたのだ』と、嚴格に、『もう、遅い。お前には、もう情熱がない。よしんば、あるとしても、子供を通して向ける情熱であつて、直接におれに向けるやうな若々しい、活々した、極あッたかい熱ではない。』
『そりやア、歳が歳ですもの――それに、六人も子を産ませられて、三人を育てあげた女ですもの――子に苦勞してゐるだけ子が可愛いのは當り前でしょう。』

『お前は子の爲めに夫を忘れてゐるのだ。』

『いいえ、忘れてはゐません。』

『おぼえてゐるのは、おれの昔だ。』

『さうですとも、昔はあなたも』と優しくなつて、『却々親切な人でした、わ。』

『今は。』と、相手の態度には引き込まれず、『もッと親切な人間になつたのだが、その親切をおれよりも年うへのお前に與へるのは惜くなつたのだ。』

『年うへなのは、初めから承知して連て來たのぢやアありませんか？』

『そりやア、承知の上であつた、さ。』と義雄は妻に言葉を嚙みしめさせるやうな口調になり、『然しよく考へて見ろ。二十前後の青年で、あんなにませてゐた者が――おれは實際ませてゐた――おれより年下のうわ

〳〵した娘の上ッつらな情愛に滿足してゐられようか？あの時には、お前のやうな年增が――年增と云つても、たッた三ッ上ぐらゐのが――丁度、おれの熱心に適合したのだ。然し考へて見ろ。人間は段々年を取つて行く。それは當り前のことだが、當り前と考へては困ることがある。それをお前はわきまへてゐない。』

『ぢやア、よく云つて聽かせて下さい、な。』

『いくら聽かせても、お前には分らないのだが、――敎育がないからと云ふのではない、お前は相當の敎育は受けたのだが、その道學者的敎育の性質が却つて邪魔をするのだ――。』

『いえ、わたくしは』と、言葉に力を込て、『武士の家に生れたのです。』

『そんなことは』と、冷やかに、『現代に何の名譽にも、藥にもならない――おれも武士の子だが、わざ〳〵おやぢ等の考へや命令には從はなかつた。』

『それが惡かつたのです。』
『また敎訓か』と目の色を變へかけたが、同じ調子で、『分らない奴だ、ねえ—。お前などア時代の變遷と云ふことが實際に分らない。政治上や文學上のことは別としても、敎育界に於て、だ、お前の敎育を受けたり、お前が學校を敎へたりしてゐた時代は、女子は昔通り消極的に敎へられて滿足してゐた。然し現代の若い女は積極的な敎育を受けやうとしてゐる。優しい女學校でゞも敎師、生徒間に衝突が起るのは、古い頭腦の敎師連がこの心を解しないからだ。戀の問題に於てもたゞ男から愛せられて喜んでゐたのが、自分からも愛することが出來なければ滿足しなくなつた。』
『わたしだつて、自分から愛してゐますわ。』
『ところが、その問題だ—段々年を取るに隨つて、男女の情愛は表面に見えなくなるとしても、愛してゐると云ふ言葉だけで、實際はそんな氣

色もないので困る。男は世故に長けて來ると共に段々情愛を深めて行くものだが、今の四十以上の女は皆當り前のやうに男に對する心を全く子供に向けてしまう。』
『でも、子供は所天の物でしようが――』
『いや、子供は子供で、所天その物ではない――そんな古臭い傾向の家庭では、男は、平凡な人間でない限り』と、そこに語調を強めて、『深い〳〵情愛を空しく葬つてゐなければならない。――』
『何だ、詰らない』といふやうな振りをして、馨はその座敷の前を通り、食事をせがみに行つた。
二階の方からも、空腹を訴へる手が鳴つてゐる。
『少くとも、おれはそんな寂しい墓場に同棲してゐられないのだ――』
『墓場だッて、家のことを。』繼母はあきれた樣子。
『墓場、さ、どうせ――おれは今一度若々しい愛を受けて見なければなら

ない。』

『ぢやア、勝手におしなさいよ。』妻は立ちあがつて、獨り言のやうに、『濱町とか何とかへ入りびたりになるなり、好きな女を引ッ張つて來るなり――こッちは離縁〱と云はれさへしなけりや、子供を育てゝ暮しますから。』

『その子供〱が聽き飽きたんだい。』義雄は臺所の方へ行く千代子の後に侮辱の目を投げながら、『子供と教訓とが手前の墓の装飾だ！』

二

田村のお母屋の裏廊下と云ふのは、一直線に五六間ばかりあつて、便所のあるところと反對の端から、また曲つて四五間ばかりの椽がはが付いてゐる。その鍵の手に當る四疊半が――家の代が變つた時までそこにゐた客を二階へ追ひやつて――義雄の占領するところとなつた。

角から直手前が半間の壁で、それから二枚障子がはまるやうになつてゐる。曲つた奥の側乃ち東向きの方は一面に明いて四枚障子となつてゐる。あかりを取るには不足がない筈だが、取りまはしてある庭がたツた二間幅しかないところへ持つて來て、北隣の寺の池が見える方の境が密接した生垣になつてゐて、その向かふ側には五六本の杉の木と一本の大きな櫻とが目隱しに並んでゐるし、こちらにも亦二階の家根に達するほどの梅の木が二本ある。

東の方は、義雄の室と相對する低い隣家の軒が隱れるだけの高さにそぎ竹の垣根になつてゐる。その垣根を越えて、同じ隣り家の庭から芭蕉の青い廣葉が二三葉見えてゐる外、目ざわりはないので、朝の日光もよく這入る。が、そこにも杏子の木が立つてゐて、實が赤みがゝつて來る時は、二階の客がこッそり家根へ出て、杖や棹を以つてよくそれを盜み取つた。その度毎に亞鉛張りの家根はばり〳〵と音がする。それを聽きつけると、亡父が庭へ飛び出し、うへを仰ぎ見て長い銀色の白髯を撫でながら、

『そんなことをしては困りますよ』と、おだやかに客を制した。梅も杏子も父が緣日で買つて來た植木の成長した物で、梅の實は一年中の食用になるほどの梅干を供してゐるし、杏子も近處の水菓子屋を呼んで父が賣り附けると、一二圓が物は擧げてゐる。然し今年の時期は父が病中にゐたので、その實は孰れも人の喰らふまゝ、また虫食んで落ち

るまゝになつてしまつた。

義雄の書齋が薄暗いのは、仙石屋敷の高臺から續く傾斜地――そこは泰養寺の山と云はれてゐる――の檜の木の大木や、枝のはびこつた松や、大きな椿や、江戸自慢といふ太い櫻やの影が追ひかぶさつてゐる上に、十數年を經た樹木がまた室近く繁り込んでゐる爲ばかりではない。

二階の亞鉛家根を雀が歩いても、そのぽと〳〵いふ音から、渠の胸は父の思ひ出が押し迫つて來るのである。たま〳〵用があつてこの家へやつて來た時、父が割り合におだやかな言葉だが、赤い大きな鼻を仰向けて、家根の客を叱つてゐるのを實見したこともある。が、それと同じ口調で渠も身の上を幾度叱られたか分らない。時には餘り命令に從はないので、

『貴樣のやうに親不孝な奴は世間にやァゐないぞ』とまであたまからぎろりとした目を以て睨み付られたこともある。が、そんな時でも、

渠はいつもの通り强情に、『わたしは一切親の世話にはなりません――その代り、また親の時勢に後れた御注意には全く從ふことは出來ません』といひ切つてしまつた。

渠は若い時から文學に熱中し出したのが最初の原因で父と衝突した。今の妻を迎へたので再び衝突した。繼母が來たので三たび衝突して、遂に自立することになつた。その上、妻子が意にそぐは無くなつてからは、いろんな女に關係してその度毎に父に呼び付けられたり、押し寄せられたりした。最近に吉彌といふ國府津の藝者に關係し、女優にしようとした失敗から、面目もないし、また面白くもないので、小半年ばかり父と行き來を絶つてゐた。

その間に父は瀕死の病人になつたのである。

父は病氣の初めから、今度こそはもう駄目だと思つたのだらう、珍ら

しくも氣を折つて、
『早く義雄を呼べ。義雄はまだ來ないか』と云つてたのだが、繼母は父の口から直接に田村家を弟に嗣がせると云ふ宣言を聽くまではと思つて、通知を發しなかつた。
最後に義雄が知らせを受けて行つた時は、もう出入りのへぼ醫者には見限られてゐた。病室に這入つたその時から既に感附かれたことだが、父の息が小便臭くまた、氣は確かだが、目が見えなかつた。曾て友人の病氣の場合に實驗した智識に據つて、渠は直父のも腎臓病だと分つた。『もう手後れだ！』わざと大きく叫んで、『なぜ又もツと早く知らせなかつたのだ』と、俄にみなぎる不平を漏らしたが、そばに顏色を替へて横を向いたものがあつたので、義雄はまた直にその場の意味を了解した。
『父はそれほど繼母を愛してゐたのか』と思ふと、ほとばしつて來た

親子の情愛も矢ッ張り引ッ込んでしまうやうな氣もする。が、何と云つても父に盡すのはこれが最初で最後だと思ふと、看護のひまにしッかり原稿でも書いて、診察料の埋合せをすればいゝと決心し、有名な專門醫を招いだが、二十日と立たないうちに他界の人となつた。

父が世界のどこかに生きてゐると思へば、まだそれでも何となく賴りにしてゐたのだが、いよ／＼ゐないとなると、義雄は全く孤立で、孤獨なのを感じられる。

孤立孤獨は義雄の趣味でもあり、また主張でもある。それが爲めに落ち付いて古今の書も讀破出來た。然しこの頃のやうに滅入つてゐることも少い。〇〇商業學校――そこへ、六年前に、滋賀縣の中學敎師をよして、轉ずる爲上京して來たのも、死んだ父から云ふと、百日間芝の琴平樣へお願ひした結果ださうだが――そこへ英語を敎へに行く時間に外出するだけで、あとは、自分の書齋に引ッ込んでばかりゐる。家のも

のとは話しも碌にしない。そしてたまに口を開けば、おほ聲の小言だ。子供などはぴり／＼恐れてゐて、父が外から歸つたのを見ると、直母の蔭へ隱れてしまう。

『餘り叱るから、かうなんです』と、千代子は訴へる。

『なアに、母の仕つけが惡いのだ』と、義雄は一喝してしまう。

そして渠は食事を妻子と共にせず、朝飯でも晩飯でも獨り自分の書齋で濟ませるのである。

渠は、一度自分が目を通した書物へは、赤鉛筆や紫鉛筆で所々へ線を引くのである。そしてそれが記憶を呼び起す記しになるので、なか／＼手離すことをしない。

『おれの妻子は書物と原稿だ。』渠はいつもかう云つてゐるが、通讀もしくは熟讀した書物は積り積つて、何百冊かになつてゐる。千代子が轉居の問題の起る毎に億劫がるのは、本の爲めに引ッ越し費の過半を

取られるからである。

然し行くところとして、家主から子供のいたづらが非道いからと云つては斷られたり、家賃が餘りとどこほるからと云つては追ひ出されたりすると、運び行かれる荷物は、古い簞笥一つとこざ〳〵した切れを入れた行李三つと臺所のがらくた道具との外は、すべて書物の包みだ。『おゝ、重い』と、どんな巖丈な人夫でも、それを持ち上て驚かないものはなかつた。

義雄はその重い書物の荷が行くところだから、蟲の好かない妻子がゐても、兎に角、落ち付くことが出來るのである。

一間幅の押し入れの中にも、それを入れた行李や箱が幾つも這入つてゐるが、隣室――の四疊半には、遞信省の官吏がゐる。そのまた次ぎのどん詰りの三疊には電信學校の生徒がゐて、時々發信機の練習をがち

や〱やつてゐる――との間を仕切る壁には、大きい洋書棚が二つ並んでゐて、外國詩文の書は勿論、哲學書、宗教書、科學書、和漢、英、獨、佛等の字引などが、その背皮に金文字、銀文字の光りを放つてゐる。

『こゝはおれの城だぞ。』かう云つて無暗には人を入れず、渠は一閑張の禿かゝつた机に倚つて、好きな思索に耽るのである。

暑いので障子を兩方とも明け放ち、時には、椽がはの柱と柱とにハンモクを結び付けて、その上に身體をぶら付かせることもある。

奧にゐる客は、二人とも、通行の度毎に氣苦しく感ずるので、申し合はせたやうに轉室を申し込んだが、二階に適當な明き間がないので僅かに辛抱してゐる。が、渠はそんなことには頓着なしで、『ハンモク』と云ふ鳥渡世間の注意を引いた散文詩を作つた。

熱くて堪らない日が
嚙んだ氷のやうにしみ込む頃だ、

眞夏の空に、
蟬の聲がじい／＼
僕のあたまを煑えくり返す。

廊下の柱と柱とにゆはへて
低く釣るしたハンモクの中で、
僕はたわいもないからだを
たわいもなく横たへた。

自分のからだのか、何だか分らない重みが、
左右に搖れて、
ありもしない風を待つてゐる。
と思つたら、突然、自分は百萬年以前高い木の枝に睡る猿であつたと

いふ考へが浮んだ。

きのふは既に前世界だ——
ゆふべ高いところから落ちる夢を見たのは、
夢ではなく、實際、おほ昔、
生繁つた深林の
枝から枝へ渡る時に、あやまつて
すべり落ちた記憶であらう。

今落ちないのは不思議だと、
仰向いて空を見た。
淺いひさしとそれにかぶさつてゐる
庭の松の木の間から、

熱したおほ空の廣がりが迫つて來て、
僕の呼吸が苦しくなつた。
前世界から生活に疲れて來た身體が、
ハンモクの中で、搖られてゐる樣だ。
自分の身がおもた過ぎて、
何にもする勇氣がない。

このまゝ死ぬるなら死んでもいゝが、
さりとて、又未練のあるこの人生。
いつまでも眠つてゐられるものなら、
死んで終うのとは違つて安心だらうが、さうく永遠まで
賴みの綱は朽ちないでゐなからう。
と、どこからか羽根が生へたやうに、

僕の考へは百萬年以前から
百萬年以後に飛んだ。

くだらない空想だと思つたが、
何だか醒めてゐて、襲はれる氣持だ。
夏の蒸し熱い呼吸は、
乃ち、僕の呼吸であつた。

あゝ、金が欲しい！
女が戀しい！
大事業がしたい！
いゝ句を得たい！
さまぐの考へが一時に浮んで來て、

蟬の聲に不安の和聲を添へた。

ハンモクは實に不安な住まひだ、ぶら〳〵動くたんびに、僕の胸は息詰る思ひ。

或晚のこと、義雄の室にも電燈が付いてから間もなく、『御免を被ります』と、千代子がお客帳と支出簿と十露盤とを提て、にや〳〵笑ひながら這入つて來た。渠は妻の冷笑的態度を一見しても、う、胸がむか〳〵して來たが、それを自分で私かに制して、書見を續けてゐる。

『また叱られるのでしようが、一つ、讀み合はせを願ひます。』かの女はかう云つて、所天を少し離れて坐り込み、帳面を机の方へつき付けた。

義雄はそれをうるさいと思ふのだが、收支の帳面づらのよく合はないのがいつものことであるので、客から取る金と自分が學校や雜誌から取つて注ぎ込む金とがどう云ふ風に支出されてゐるのか、充分調べて見なければ置かないのである。

『お千代さんはいつ離縁されてもいゝやうに臍繰金を拵へてゐるに相違ない、さうでなければ、義雄さんが隨分儲けて來るのに、暮しが足りない筈がない』とは義雄がはの親類同志の噂で、渠もさう注意されたこともある。然し渠は自分で浪費するのも割合に多いと思つたから、よしんば妻の臍繰があつても、大したものではないと高をくゝつてゐる。

義雄が妻を意地々々させるのは、そんなことではなかつた。かの女のあたまが不正確な爲め、つけ落しやつけ加へがあつたりして、毎度計算が合はない。度々のことであるから、渠はそれを反省させる爲め一

厘、一錢の差までもその行くゐを追究しなければ止まない。

すると、千代子はその位のことは當り前だと云ふ態度で意地を張り出し、

『わたしが何も一錢や二錢を着服するわけは御座いません』などゝ不平らしいことを云ふ。それが動機になつていつも大きな云ひ爭ひになり、

『手前の頭腦が鈍いからだ』と、所天は妻の束髮あたまに拳骨を一つ喰らはせることもある。

それが爲めに、隣の客をやかましいと怒らせたり、隣家の惡口者にいゝ噂の種を與へたりする。

千代子は內心おづ〳〵してゐるのだが、それを微笑に紛らして坐つたのである。

義雄は讀んでゐたページを或節の終りまで濟ませてから默つて帳

面を手に取つて見た。

『どうせ、家族が多いのですから』と、千代子は甲ん高い聲を無理に低め、『お客さんから受け取るだけでは足りないのは、この一二ケ月でも分りましたから――』

『そんなことア知れ切つてらア。』

義雄はやがて帳面を二つとも妻の方へ投げやり、自分は十露盤を取つた。

一錢なり、二錢なり、十錢なり、一圓なり、九圓五十錢なり、十二圓三十錢なりなどが暫く續いたが、結局、今夜は珍らしく無事に通つた。

『こんなことは初めてだから、何かおごりましようか?』

『ふん』と、義雄は横を向き、『喰ひたけりやア、よそへ行つて喰つて來らア――どうせ、おれは、おれの出す金さへ出してゐりやアいゝのだ。』

『それが――でも――滿足に拂へたことがないぢやアありませんか?』

『そりやア、然しお前の帳面が矢ッ張り合つてゐないよりやア、まだしもましだ。』

皮肉を云はれながらも、所天がいつに無く多少のうち解けを見せるのが、千代子には嬉しかつた。で、思はず長ッ尻をしてゐる。

『おッ母さん。』姉娘の富美子が弟を從へて椽がはをばた〳〵驅けて來て、『諭鶴さんが何かお呉れッて。』

『いけません、いけません！』母は持ち前の甲聲を出して、『今御膳を喰べたのぢやアありませんか？』

『おッ母さん、何か』と、諭鶴はあまへた鼻聲を出しながら、一番手前の障子の隅を少し明けた。

『いけませんてば、あッちへお行き！』

弟の窺いてゐるあたまの上から、脊の高い姉の顏も見えてゐた。

『むッ』と、母に睨付けられ、富美子の方は機敏に引ッ込んでしまつたが、諭鶴は兩手で柱と少し明けた障子の端とにつかまつて、目をたゞ左の方に反らしたのが、直ぐそのそばにある半間の淺い床の間の掛け軸、達摩の怖い顏と出會した。

この子はこの軸面を大嫌ひで――まだまだ小さかつた時のこと、父の書齋へ誰もゐないのでよち〳〵這入つて來て、二枚重なつて掛かつてゐる軸物の上の一つ――支那人の書いた杜甫の句であつた――を上て見た。すると、下のに異形な物が現はれて、大きな目を剝いてゐたので、腰を拔かして泣き出した。法橋探水齋と云ふ落欵がある畫で、達摩が小舟に乘つて支那へ渡つて來たのを表する蘆葉達摩だが、子供ながら其時のことをおぼえてゐて、今では、その顏を父の顏に聯想するやうになつた。

びッくりして、また右の方へ顏を避けた時、この子はあたまを障子の

端にぶつけて、母に泣き顔を見せた。

『いゝ氣味だ』と、母は敵の失敗でも見たやうに躍起となつた。

毛だ物のやうに子供を溺愛するといつも所天に云はれるので、さうでない證據に、こんな時、自分の嚴しい育て方を實見して貰はうとするのである。

『なんか』と、また下の知春(これと姉との名は、死んだ祖父さんが命名くしたのである)がいつのまにかやつて來て兄を押し退けて、小さい首を出した。

義雄はこれがすべて自分等の間に出來た子かと思ふと、可愛いと云ふよりも、寧ろうるさい物だと云ふ氣が先きに立つので、

『畜生の子供らが』と、さも憎々しい顏を向けて、『ぞろ／＼と何匹出て來やアがるのだ？』

『可哀さうに、ねえ』と、千代子は頬のこけた顏の筋肉をぴく／＼動か

し、目を下に伏て、暫くたより無ささうに考へ込んでゐたが、こんな殘酷なことを云ふ所天よりは、無邪氣な子供の方に肩を持つてやりたいと云ふ氣が溢れて來たので、伏せた目をその方に擧げて、寂しく笑ひながら、『もう、これッ切ですとお云ひ。』

富美子は何も分らない二人の弟の上に首を出してゐて、母に似た出ッ齒を見せて笑つてゐる。おまけに、どいつもこいつも田舍ッ兒のやうな地味な瀧縞木綿の單衣を着てゐる。義雄はそれを一見しても興ざめてしまうのである。

『うるさいから、あッちへ行け！』父の一言は皆の子を障子から離れさせた。

『おッ母さんも』と、千代子はおだやかになり、『今直に行くから、ね、そッちで待つてお出で――ぐづ〳〵してゐると、達摩さんが飛び出しますよ。』

これは何氣なく千代子の口にのぼつた子供に對するおどしだが、義雄は自分にも當てれば當る言葉だと思つて、心では吹き出したくなつた。眞面目に考へても亦さうだ、子供に對しては怖い點に於て――また、思索家として長年孤獨の情味を味つて來たのは、面壁九年の心持ちに似てゐる點に於て。

『達摩さんだ、達摩さんだ』と、騷々しく、ばた〳〵と別々に大股、小股の足音が遠ざかつて行くのを、義雄は不調和な燥音だと考へたに反し、千代子は序破急の長唄樂の終りまで聽き惚れてゐるやうな樣子で、暫く耳を澄まして聽いてゐたが、やがて所天の方に向直つた。

『諭鶴も、あんな總領息子ではは仕方がありませんね――あなたと同樣、わが儘一方で。』

『己れは親不孝であつたから、自分も子供から孝行をして貰はうとは

飽くまで思はないのだ。』

『あなたは』と、千代子は所天を横目に見て、その方に向かつて右の手の平で空を下に拂ひ、『それでいゝかも知れませんが、わたしが困ります。』

『お前の困るのアお前の心掛けが惡いからだ。』

『またそんなことを』と輕く云つては見たが、千代子は自分の育兒の苦心に對し所天が――心では知らず――おもてへ出して同情したことは少しもないのを思ひ出し、この末ともまだ長い子供の敎育時期を、自分ばかりの手では、本統にどうすることも出來ないやうな情ない氣に沈んで行つた。

所天のそばにゐられるだけ、まだしも子供と自分は末の望みがあるやうだが、若し皆が一緒に棄てられるやうなことがあると、三人の子に母を抱へて、どうなつて行くだらう？

たとへ、この家だけは子供の爲めに預つて、この商賣をつゞけて行くとしてもさうしたら、田村の方の繼母や弟までの身の上も引き受けなければならない。所天の取つて來る金を注ぎ込んでも、たださへ不足勝ちのところへ持つて來て、それが若し出なくなるとすれば、とてもやり切れるものではない——

何と云ふ因果な身になつたのだらう？——今さら、この年になつて、よし棄てられても、よそへ片付くやうなことも出來ないし

千代子は顔を所天から反むけ兩手を繩のやうになつた黑繻子と更紗の晝夜帶の間に挾み、頻りにこんなことを考へ込んでゐたが、所天が餘りに何とも思つてゐない樣子を見ると憎らしくもなるし、また馬鹿〳〵しくもなつて、何を云ふ張り合もなくなつてしまう。

『まア、行つてやりましよう、子供が待つてるだらうから。』立ちあがつて、左の手に帳面と十露盤とを持ち、右の手で藍地の浴衣の前を直す。

かの女の引ッ詰つた束髪や、色氣のない衣物が神經質の段々高まつて行く顔を剝き出しにして見せるので、義雄は少し仰向いて最も侮辱の睨みを與へた。

『その婆々アじみた面を見ろ！』

『あなたに』と、千代子は恨めしさうにして、口のあたりをぴり付かせて、早口に、『かうされたんですよ。』少しゆつくりして、『あなたのせいですから、こんな』と、顔を突き出し、『お婆アさんでも――』

『鬼子母神の面だ！』

義雄の叫びが頓狂であつたので、千代子は色を變へてからだを引いた。そして物柔かになり、

『鬼子母神でも、何でも、わたしは子供には女王のやうなものですから、ね。』

『そんな下らない興味に釣り込まれて』と、義雄は兩肱を机に突いて、見向きもせず扇子を動かしながら、『遂に婆アになつてしまうのを知らないのだ。』

『あなたも段々爺いじみて來た癖に。』

『そりやア上ッつらのことで――精神は反對に若々しくなつて來た、さ。』

『七つ下りの雨は止まないと云ふのがそこのことなら、ねえ――』

そんな警句をどこから覺えて來たと云はないばかりに、義雄は妻の方をふり向くと、千代子は立つたまゝにやりと笑つて、例の通り、出た齒の上齒ぐきの肉までも見せてゐる。

『その表情の卑しさを見ろ！』渠はまたかう叫んで、目を反らした。

『もう行け、行け！』

『行きますとも――然し、ねえ、あなた』と千代子は眞面目に返つて、また

立ち去りかね、その場にしやがんで持つてゐる物を膝の上に置いた。
『あの子もさすがあなたの子で、利口はなか／＼利口ですよ、今の驚き方と云つたら、可笑しくもありましたが、また、昔、上の掛け軸をめくッて、下のにびッくりしたことを忘れないでゐるのですよ。』
『そんなことア聽く必要がない。』
『でも』と、話しを引ッ張るつもりで、『この達摩さんも忠義です、ねえ――うちの貧乏暮を永年の間一緒にして來たのですから。』
『ほかに掛ける物もないぢやアないか！』義雄は思はずまた妻にふり向いて、『掛け物一つ買へないほど貧乏して來た、さ、然しまた面白いこともあつた、さ。』
『それはあなたばかりで――うちの者はちッとも面白いことなどさせられた覺えはありやアしないわ。』
『無い？』わざと怪訝な顔をして、『望みの竹生島も見せてやつたし、

京都、大阪、須磨や奈良へも連れてッてやつたぢやアないか？』

『わたしだッて』と、千代子は不平さうに『そんな上ッ面なことを云ふのぢやアありません。うちの者は皆――あなたと直接の關係のないわたしの母まで――あなたの貧乏と不氣嫌とにいぢめ拔かれて來たんです。』

『貧乏はおれの持ち前だ。然しおれの不氣嫌は女房の口やかましいところから來たのだ。』

『やかましく云はなけりやア』と、目をきよろつかせて口をとんがらかし、『遊んでばかりゐるぢやアありませんか？あなたの坊ちやんじみてゐた時から、この十何ヶ年と云ふもの、わたしがやかましく云ふので持つて來たのですよ。』

『馬鹿を云ふな、おれはおれでやつて來たので、非常に遊んだ跡は』と、得意な顏をして、『きッと、また非常な仕事をしてゐらア。』

『それもさうでしようけれど、わたしの爲つづけた苦勞が分つたら、この達摩もわたしの身方になるでしようよ——主人が敎師になつて行くのに、滋賀縣までも一緒に附いて行つたし、また東京へ歸つてからも、芝から下谷、本鄕から麴町、麻布から赤坂と、何度引ッ越したか分りやアしない。そのたんびに何か物は無くなるし——おしまひには吉彌でしよう。』

『母さん。おッ母さん。』子供がまた呼にやつてくる樣子だ。

『あいよ、あいよ』と、千代子はその方に浮き腰になつた。

『うるさいから、行け！』義雄はかう云ひ切つて、妻が立ちあがるのを尻目に見た。『おれの放浪生活は、もう、やめる。その代り、お前とは離緣だ。』

三

義雄の英語教師は時間給で出るのだから、その受け持ち時間だけ行つたらいゝ。それも毎日ではなく、日曜日と月曜日とは續いて休みで、跡は隔日になつてゐる。

渠は昔から勉強家だが、朝寢坊と來ては、九時や十時でなければ、また時によると午砲を聽いてからでなければ、褥を出ない。父が我善坊からせか／＼と歩いて、麻布の谷町を拔け、氷川神社のそばを通つて、赤坂の臺町へたま／＼やつて來た時、息子がやうやく起き出でゝ楊枝を使つてゐるのを見て、

『そんなことで一人前の人間に成れるものか』と怒つたこともある。

『でも夜が遲いものですから』と、千代子は所天に代つて辯護をした。

父は息子の朝寢を始終氣にして死んだが、それを却つて義雄は父の

家を占領してからも、一つの懷かしい思ひ出として、目を覺してゐながらも、褥のうちで考へ續ける朝もある。一年中仲違ひをしてゐながらも、自分が何となく便りにしてゐたものが亡くなつてしまつた。』かう考へると、自分も何時死んでしまうか分らない。これからますます自分の事業に發展しようとする前途も、まだ〳〵却々長い。親などは子に對してはあまいもので、子の十年一日の如き思索的努力がその僅かに一部を世間に認められるやうになつて、多少それが彼是云はれて來たのを知つて、內心では非常に喜んでゐた。

父の意志に從つて見せたり、物質的報酬を以て父に報いたりすることが出來なかつた渠には、切めて精神的事業の一端でも見せて、父を喜ばせたのが所謂孝行の一つであつたのか知れないとも思ふ。

苟くも生てゐる間は思索と執筆とが自分の生命だとして、晝間も薄

暗い室に立て籠ると、やがて夜になつてしまう。また、電燈が付いたかと思ふと、いつの間にかふけて行つて、夜明けの庭鳥の聲や、朝烏が寺の山の檜の木に群がり啼くのを聽く。それが殆ど毎夜のことだ。

たま／＼、夕飯を濟ませてから人を尋ね、一緒に玉突屋へでも行くと、日頃の憂鬱が調子を變へ、負ければ負けるに從ひ、勝てば勝つに連れ、知らず識らず勝負の回數を夢中で重ね行き、

『もうあかりを消しますから』と、ボーイに斷られ、初めて不興に覺めて歸宅することもある。が、直寢に就くのではなく、きッと机に向つて書き殘しの原稿を續けるのである。

渠は家にあつてはストイク學派の禁慾主義者以上の嚴格を保つてゐるので、朝寢だけには例外のづぼらがあつても、そッと構はないで置かれるのが常だ。

押し入れ並に床の間の後が二階から裏椽がはに下りるはしご段に

なつてゐて、その次の八疊がこのはしご段と玄關から裏へ一直線に通つた廊下とに挾まれて、千代子と子供との寢室になつてゐる。

　この八疊と四疊半とは、生活上、金錢的關係があるを除いては、殆ど全く無關係の世界と世界とである。四疊半の主人のまだ寢てゐるのを、八疊の主人が起しに來て、締つた障子の外から、

『もう、時間ですよ』といふすげ無い言葉を一言かけて去のは、午前の八時もしくは九時から學校の時間がある時に限つてゐる。それを聽き流しにしてゐると、姉娘かその弟かが、母の使者として、

『お父さん、お起なさいッて』と云ひ布れて來る。

『おー起き——父ちやん　お起——きッて、ね』と、また末の子が障子を明けて這入つて來て、ひよろつく腰をかがめて、父の顏をのぞき込むこともある。

『あゝ、起きるよ。』さすが無邪氣の子には強く當ることも出來ず、優しい返事をするが、すると稚い子が嬉しさうに向ふへ駈けて行つて母にその返事をいひ付けてゐるやうな樣子が聽こえる。それがまた反感を響かせて來てならない。

『あいつ等の爲めばかりに詰らない教師などをしてゐるのだ』と考へると、顏を洗ふにも食事を濟ませるにも氣が進まず、出勤の時間が後れかける程ぐづ〳〵してゐて、わざと車を呼んで三四丁のところを驅けらせることもある。

學校では、然し義雄の教授振に家で押さへてゐる活氣が溢れ出し、非道く叱りつけることもある代りに、また全級を愉快に笑はせたりする。

六年前、初めてこゝの教師になつた時は、生徒に親しみがなく、且、怒るのが目に立つので、最も不出來の生徒が一人、短劍を持つて渠を暗夜の途に要したのが評判になつた。渠はそんなことに恐れないで、相變ら

ず冷酷、熱酷な怒罵をつづけた。

『貴樣のやうな出來損ひは、兩親へ行つて產み直して貰へ。』

『手前のやうな鈍物は、舌でも喰ひ切つて死んでしまへ。』

生徒は遂に往生して、こんなことを云はれるのを最も恥辱だとして、渠の時間の學科はよく下調をして來て、上手な說明を聽きつゝ、明確な理解を得るのを樂みにするやうになつた。

『田村先生の時間！』この言葉は一部の生徒の恐怖を引き起す符牒であると同時に、一般生徒には最も待ち受けられる樂みであつた。

義雄は同じ學校の夜學にも出たことがあるが、それは失敗に終つた。出勤前に友人と酒を飮んだのが、敎壇で例の通りの快辯を振つてゐる時に發して來て、いつの間にか椅子に腰かけて、心よくテーブルの上に眠つてしまつた。ふと目を覺すと、七八十名のものがすべて手を束ねて、ぼんやりとこちらを見てゐた。

丁度その當時、渠は『デカダン論』といふ著を公にし、現今の宗教、政治、教育等の俗習見に反對したのが、學校の幹部の問題になつてゐた。その上、或晩のこと、醉ッ拂つて藝者と共に電車に乘つてゐたのを生徒の一人に見つけられた。

それやこれやの中を取る同僚があつて渠は夜學の時間を斷つてしまつたが、晝間の生徒に向つては、自分に對する心得を發表した。

『學校の門を這入つた以上は、おれも教師として神聖な者だから、飽くまでもその職權と熱心とを忘れないが、門を一歩でも出たら、もう、お前等とおれとは見ず知らずの他人も同樣だぞ——從つて、外でお前らと出會つても、おれは相手にしない、お前らも亦おれを先生などゝ云ふに及ばないし、お辭儀などは無論しなくてもいゝ。』

すると、生徒のうちから、

『煙草を飲んでゐても叱りませんか？』

『酒に醉ッ拂つてゐてもいゝんですか？』
『藝者を連てゐてもかまひませんか？』
などゝ冷かし初めた。渠は笑つてこんなことを云はせて置き、やがて、響き渡るほどのどら聲で、
『默れ！』一喝して、『こゝは神聖な敎場だ。』
かう云ふことがあつてから、渠は生徒間におそろしいが又懷しい敎師となつた。
或日の午後、渠が學校から疲れて歸つて來ると、見慣れない牡丹色の鼻緒の駒下駄が玄關の格子の中に脫いであつて、正面のはしご段のわきには大きな行李が一つころがり、八疊の間に若いおほ廂髮の女が來てゐた。
『紀州からやつて來た女に相違ない。』かう思ひながら義雄は八疊の

間をまわつて自分の室に這入つた。

胸には、何だか異様な動氣をおぼえて、紫包みの書をほうり出したまま机にもたれて、向かふの話し聲に注意が向いて行くのである。

『東京へ來ると、』なか／＼ませたやうな聲で、『田邊などは、もうお話しにならんですな。』

『どこから行くの？』これは千代子の聲だ。

『大阪から行きます。午後の十時頃に大阪を出發しますと、加太、和歌山などは夜のうちに通つて、明くる日のお晝頃着きます。』

『何かあるとこ？』

『溫泉があります。』

『ぢやア、いゝとこでしよう？』

『その邊では、まづ、よろしい都會ぢやと云ふても、大したところではないのです。』

『でも、溫泉があるなら』と笑ひ聲になり、『そんなとこで宿屋でもすりやア儲かりましよう。』

『さア、どうですか？神戶や大阪からは隨分來るやうですが――』

『ふむ、隨分來るの――ふむ、さう？』

千代子の口を結び、首を二三度固く動かして、人を子供あつかひにした目つきが義雄には見えるやうだ。

『いやな女だ――あの癖を亭主のおれにまで向けるのだ』と、渠は獨りで顏をしかめた。

『どう決りましたの』と、繼母が出て來た樣子。

『二階の西の三疊が明いてますから、ね』と、千代子は既に自分が決めさせたと云ふ調子で、『少し暑いけれど、あすこにして成るだけお金の出ないやうにしてあげたらと思ひますの。』

『そりやア、安い方があなたもいゝでしょうから、ねえ』と、低い笑ひ聲

を出し、
『ずッと安く負けてお貰ひなさいよ。』
『あの猫婆アめ、いつもの猫撫で聲を出しやアがる』と義雄は繼母の不斷を思ひ浮べた。
『これよりやア、もう負かりませんよ』と、これも笑ひ聲だが、險に響いた。
『ふ、ふ、ふ』と、をんな客の當りさわりのないやうにした笑ひも、繼母の聲と共に、何だか底意地ありさうに聽こえたが、義雄は險ある聲を最もいやに感じた。
『あなたも、正直なところをいつて、大したお金持ちやアないでしやう――』と　繼母の聲。
『はア』と、をんな客はまごついた返事だ。
『奉公口を見付けるまでといつても、あなたのはただの下女やお針で

は行けないのだし、晝間だけどこかの學校へやつて貰へるやうなところは、なか〳〵見付かりさうもないから、ねえ――』

『金を持たずに出て來たのだ、な』と、義雄は直そんな奴は妾でもするより仕樣がなからうと考へた。

『まア、明日からでも探して見ましやう――神田にも國の人が來てをりますので。』

『國の人が來てゐるのなら、大丈夫ですよ。』

『成る程、おッ母さんの考へは年寄りだけに行き屆いてるの、ねえ。』千代子は先きの向ふ意氣の強い調子が變つたやうになつて、『あなたは、全體、二三ケ月の下宿料は持つて來たの？――こんなことを聽くのも』と、調子ッ外れに笑ひながら、『をかしいやうだが――』

『はア、それは――』

『若奉公の口がない、うちの勘定も拂へないといふやうなことがある

と――』

『つけ〳〵と遠慮會釋もない女だ、なア』と、義雄は蔭で冷々した。

『そんな御心配までは掛けんつもりです。』客は如何にもむッとしたと云ふ口調だ。

『つもりでしやうが――』

『まア、いいぢやアありませんか、そんなとは。』と、相變らずの猫撫で聲が中を取るやうに、『どうでしよう、ね、お千代さん、義雄さんにも相談しなけりやアならないでしようが――』

『義雄などに相談もあつたものですか？』

『でも、ねえ、主人は主人ですもの。』

『あんな人に――主人らしくもない――相談も何も入りますものか？』

『馬鹿にしてゐやアがる』と、義雄は蔭で怒る氣にもなれない程だ。

『では、お千代さんがさう受け合へばいいとして置いて――どうでしよう、ねえ――どうせ、わたしの座敷は明いてるも同前だから、一緒に置いてあげることにしちやア？』

『むむ、それがいいです、ね』と、乘氣の甲高になつたが、直また遠慮といふことに思ひ付いたやうに聲を平調に返して、『おッ母さんさへ御承知なら、ねえ。』

『わたしは構やアしない、わ――隱居の身に話し相手も出來るのだから。――あなたも』と、客に向かつて、『さうおしなさいよ、間代だけでも省けたら、よう御座んしよう。成るべく無駄なお金の出ないやうに、ねえ。』

『ぢやア、さうしたら、どう？』

『では、さう願ひましよう。』今まで何だか氣が置けてゐた客は、初めてその場の意味が分つたかして、さえ〴〵した聲を出した。

『それがいいの、ね』と、矢ッ張り甲高な笑ひ聲で、『どうしても年寄り

がゐないと、いい考への出ないものね——おッ母さんでなけりやア——おッ母さん大明神だ。』

『何を云つてやアがる、馬鹿が』と、義雄はまた心で叫んだ。

繼母も千代子の頓狂な言葉をただ笑つて受けた、そして客の方をあしらふつもりで、

『あなたも、船や汽車でゆられて來て、疲れてゐるでしようから、早くわたしの部屋へ行つて、横にでもおなりなさい。』

『さう疲れてもをりません。』

『でも、どうせあなたのゐるところと決つたのですから——』

『左樣ですか？では——』と、まだ立ちかねて、行李のある方へ鳥渡目をやつてもぢ〳〵してゐる。

『馨！鳥渡お出でよ。』

繼母に呼ばれて、義雄の弟は離れの奥から椽がはを渡つて來て、

『何？』にこ〳〵しながら、庭の方へ明けッ放した八疊の隅の柱のそばから首を出し、久し振の客を見て鳥渡顏を赤め『いらッしやい』と右の手を柱にしたまま、圖ぬけて脊の高いからだの腰をおろす。

客も渠に一つ下の若い女だけに、多少のはにかみがあつて、直には言葉も出せず、じろりと青い目を廂髮の奥から送つただけで、手を突いてお辭儀をした。

『大きくなつたでしよう、馨は？』繼母は弟を見てから、微笑の顏をまた客に向ける。

『はア、さうですな。』これも澄ました口に笑ひを洩らす。

『兄さんよりも、大きいのですよ――からだばかり立派になつて。』

『結構です。』

『勉強をしないで困るのですよ――兄さんの方は、それでも、じ出すと、夜中でもしてゐるやうですが――』

『僕だッて』と、馨は庭の方を向いたが、『する時アしてゐる、さ。』
『でも、今から色氣づいたりして、ね。』
『お君さんでしよう？』客はためらはないで、かう突ッ込んだ。
『ええ、約束がしてあるのださうです。』
『兄さんの』と、千代子の笑ひ聲だ、『弟だから、ね。』
馨はまた顏を赤くして笑つてゐるばかりである。
『あの、清水さんの行李が、ね』と、繼母は渠に優しい命令をして、『はしご段の下にあるから、あれをわたしの部屋へ持つてッておあげ。』
『あれだ、ね』と、馨は立ちあがつて、廊下を玄關の方へ行く。
『わたし、持つて行きます。』客も脊の高いからだを立ちあがつて、角の柱から一間の壁は低い窓になつてゐるその次ぎの唐紙が一方に明けてあるところから出で、馨と二人して一つの行李を奧の離れへ運んで行

つた。

『重たさうだね』と云ひながら、繼母もその跡から附いて行くのを、千代子は椽がはに立つてじッと寂しさうに見詰ながら、末の子知春が纒ひ附いてくるのをあしらつてゐた。が、やがてうるさいと云つたやうに子の手を振り拂ひ、ばた〳〵と上草履の音をさせて、夫の室に駈け行き障子の敷居のうへに片足をかけたまま首を机の方に突き出し、聲を低めて、

『やつて來ましたよ――紀州の女が。』

『…………』洋書棚のそばで、奥の椽がはに向いた机のうへにイブセンの脚本を開いてゐた義雄は見向もしない。千代子は張り詰てゐた言葉の腰を折られたが、なほ夫に訴へるやうな調子で、左の手を壁の柱にして、からだの腰を少しかがめながら、『いやな女よ――それは意地の惡さうな目付きをして――おほでこ〳〵の廂髪で――』

『それでも』と、義雄は劍突くめいた聲で妻を返り見た、『お前の引ッ釣り髮の束髮よりやア多少の飾はある。』

『髮なんかに飾があつたッて――あなたはいつも内部的精神的でなければ行けないといつてる癖に、直ぐその口で女のうはべを賞るのですか？』

『外形にまでも――』と、顎でしやくいながら、『精神の若々しさが現れてゐりやアいいのだ。』

『なんぼ若いッたつても、あんな意地の惡さうな、のッそりした女ぢやア――』

『ぢやア、手前は何だ――鬼子母神のお化見たやうなざまをしやアがつて――おれの女房なら、女房らしくなれ！』

『あなたも亭主らしくおなりなさいよ。』

『馬鹿をいふな――貴樣のやうなとげ〳〵しい婆アに、もう誰が構つて

ゐよう？どんな見難い女でも、まだしもしとやかで、若けりやアいい。』

『だから、好きなのをお貰ひなさいと云つてるぢやアありませんか？』

『何んだ！それで濟むと思ふか？苟くもおれが貴樣達を補助してゐる以上は、おれは貴樣達の主人だ。主人が學校から歸つて來ても――』

『へえ、學校でしたの？わたしは、また、もう試驗も濟んだんだから、どこかほかへ――』

『特別な用があつたらどうする――氣の毒だから點數調の手傳ひをしてやつたのだから仕方がないのだ！學校ばかまなど穿いて、誰がほかへ行く？』

『そりやア、氣が付きませんでした。』

『何、ぢやア、貴樣達アおれが學校から歸つた時でなきやア、茶を一つ持つて來ないのか？』

『そんな因業なわけぢやアありませんわ――欲しけりやア御遠慮なく

手を叩いて下さつたらいいぢやアありませんか?』

『手を叩くのア家のものが知らない時だ——歸つたのを知つてゐながら、お歸んなさいとも、何とも云はず——』

『それは惡うございましたが——』

『惡かつたでは、もう遲いのだ——茶を持つて來い、茶を!』

『母アちやん』と云ひながら、知春は怖ろしさうに母の横手から母の足に抱付いた。

『何もこわいことではないのだよ。』千代子は子を兩手でぐッと抱あげ、『直持つて來させますから』と云ひ殘して、そこを立ち去つた。が、椽がはを行きながら、繼母の室へ聽こえるやうに『お茶が出なかつたから、お叱りですよ』といつた。

『持つて來るなら、自分で持つて來い!』かう叫びかけたが、聲には出さず、義雄のむしやくしやした心は袴をつけたまま坐わつてゐるから

だ中にみなぎつた。

『今お茶を入れてますよ』と云ふ千代子の言葉を臺所わきの食事室の方に聽き流しにして、義雄はわざとがたぴしと玄關の土間にある下駄箱の蓋を明け閉て、自分の兩削り下駄を出して足に突ッかけ、逃げ出すやうに家を出た。

玄關と向かふの醫者の裏板塀との細い露地を通り、自分の家の臺所の角から曲つて、また細い露地を三四間出ると、我善坊の通だ。こゝは仙石屋敷と八幡山との間に挾まれ、細長い而かも鬱陶しい谷のやうなところだ。が、麻布の仲の町や鳥居坂への近道であるので、隨分いゝ人人の車も通るし、近頃は、下の八幡町の山に添ふた墓地が泰養寺の手を離れて總て取り拂はれ、その跡に新しい借家が建ち續いたから、可なり奇麗な通になつた。

義雄は、自家の後の山の大檜の木や、八幡山の樹木やに反映する午後の暑い日光をスコッチの鳥打ち帽の上から浴びて、自分の室の涼しいがまた薄暗いところに坐つてゐるのよりも、却つて菅々しい氣持ちになつた。

『けふは、思ふ存分玉突きでもして遊んでやれ！』渠はかう決心して、八幡町を芝の西の久保通に出で、巴町の方へ亡父に似た歩き振でせか〳〵歩きながら、どこへ行かうかと考へた。

山王下の赤坂亭には好きな女もゐるが、玉代や飲食費が大分溜つてゐて、行くたんびにそれを催促されるのが心苦しい。あたらし橋の養精軒は、女ボーイが居眠りしながらゲームを取り、敵の點數へ渠の取り分を入れたのが原因で、そこの主人と喧嘩をしてから、まだそのほとぼりが覺めてゐない。その他で知つてゐるのは餘り感じのいい玉屋ではない。

さうかと言つて、近頃は大きな料理屋へ行つたり、濱町や蠣殼町のこッそりした家へとまつたりする勇氣も餘裕もない。

ふところの素寒貧を覺えながらも、夏のほこり風にあふられて、蚊絣の單衣の背とからだの脊中とがひッ付くほど汗のうるみを生じて、脇腹を垂れる汗のしづくが親ゆづりの博多帶――山の這入つた茶と紺との合せ帶だ――の下にとまるのが、如何にも暑苦しい。

『人並に今年は避暑旅行も出來ず――』と心では訴へながら、行く先きをどこにしようか、こゝにしようかと考へて行くうち、足はいつもの通り渠を佐久間町の友人の家に運んで行つた。

『辯護士村松十衞』と書いた大きな横表札が懸つてゐるその格子戸を明けて這入ると、書生が二階へ通知して來てから、義雄を上へあがらせた。

二階の奥座敷では、主人が二人の客と鼎座して、眞劍に花を引いてゐ

た。渠もここの主人とこの座敷でこの遊びに徹夜したこともある。が、それは酒にも飽き、玉突きにも疲れた跡で、ほんの空勝負をして自分の家へ歸りたくない夜の時間つぶしに過ぎなかつた。

今、目前に眞劍の勝負を見て、渠は今更の如く空おそろしい氣もするし、又、それをやつてゐるもの等の卑劣な熱心にさもしい根性が見え透くやうにも思はれる。然し、どうせ友人を玉屋へ誘ひ出すことが出來ないなら、自分もこゝで、一緒にやつて見たいと考へたが、一年毎に取りやりする現金が懷中にあつても少いので、皆に勸められながら、ただ見てゐるだけで、別に何等の話もなく三時間も四時間もそこで過ごしてゐた。

『梅ぢや』『牡丹だ』『菅原ぢや』『四光だ』などと、ぱちり／＼とやつてゐるのを、義雄も自然に釣り込まれて面白さうに見てゐるうち、最も勝

つた客はもう晩餐時だから歸ると云ひ出したが、最も負た主人がどうしても歸さないと止めた。が、その客はこゝらが切上げ時だと見たのだらう、振り切つて二階を降りてしまつた。

で、主人は今一人の客と同じことを續けたが、矢ッ張り恢復は出來なかつた。客は先刻から立て換へて置いた分と今勝つた分とを渡せと云ひ、主人は渡すことは出來ないといふ。それがもとで投ぐり合が始まり、客はその喧嘩に負て散々の惡口をつきながら、はしご段を降りて行つた。

『ごろ付きめ！此間立て換へてやつた分はどうするんでい！』甲州生れの氣の荒い村松は、目に角をたてゝ、かう浴びせかけてから、義雄の方に向き直り、少しきまりの惡さうな顏をして、『やア、失敬した、なア。』

『なに、面白かつたよ――僕も金を持つてゐさへすりやアやつて見たのに。』

『けふのやうに負たことは滅多にねいよ』と笑ひながら、村松は金が時計を白縮緬の兵兒帶から出して見た。『もう七時だ、なア――また肉でも喰ひに行かうか？』

『さア、行てもいい、ね。』

『夏中は相變らず不景氣で金が這入らねいで閉口だ。』

『僕などアおやぢの病死以來ぴイ〳〵してゐるのだ。』

『まア、飯を喰つてから玉突でもやる、さ。』

村松はまだ獨身者で、臺所は下女に一切まかせてある。既に夕飯は客の分も出來てゐたのだが、渠はそれを入らないと云つて、義雄と共に靴脫ぎへ降りた。

二人はそこから櫻田本鄉町の通りへ出で、とある牛肉屋へ登つて一杯を傾けたが、飯を濟ませると、直またそこを出た。

『どこへ行かう？』

『さア――』
『君ア養精軒はまだいやだらうし――』
『行たところで構やアしないが、久し振で永夢軒へ行て見ようか？。』
『それもよからう。』
かう話が決つて、二人は新橋の方へ向いて高架鐵道の下を脱け、烏森の意氣な圓い大提灯が出てゐたり、三味線の音締が聽こえたりする横町〳〵を縫つて行つた。
永夢軒では、一方の臺にプールの客が集まつてゐるし、また一方の臺では藝者が客と四つ玉を突いてゐる。プールはいつも物を掛る習慣になつてゐるので、義雄は全く好まない。村松はそれを知つてゐるし、また若い女のゐる方がいゝので、その方の椅子に二人並んで腰をおろし、女が白玉のつもりで赤を突きかけたり、突いた玉が飛ツ拍子もないところへ走つたりするのを見て、笑つてゐる。

そのうち、女はその客を引ッ張つて疊つづきの奥へ這入つた。そッちは藝者屋で、內輪は一つになつてゐるのである。

『きやつ、花を引かされるのだぞ。』義雄が村松を返り見てささやくと、村松は首をすくめて、これも低い聲で、

『負たら、それだけ現金でぼッたくられるし、勝つたところで女と例の妥協で――一睡の夢か？』

『何を笑つてるのです？』知り合ひの女ボーイがゲーム取りにやつて來て、かうからかつた。

『笑つたら、惡いのけい？』村松はわざとおこッたやうに右の肩を怒らして見せたが、肩を下ると同時に客の置いた棒を手に取つた。『早ゲームを取れ！』

『へい〳〵。』ゲーム取りは、村松の國なまりを返事に受けもじりなが

ら、大きな十呂盤の懸つてゐる下の椅子に行つた。
『お常さん』と、義雄も棒を取つて臺に向かひ、自分の白い持ち玉と赤い一とを棒の先きで引き寄せながら、『永夢軒とはよく附けた名だと云ふことさ。』
『妥協ばかりやらしやアがつて、のう』と、村松も二つの玉を――白いのは自分の方に、赤いのをその先きに――並べて義雄の玉と臺の眞ン中の縱の一線に眞ッ直に置かれたか、どうかを調べて見た。
『さア、來給へ』と、義雄に促され、村松は白玉を右の緣に添ふて赤の横線に並ぶまで出し、向かふの白の右の半面へねらひを定めて突きひねつたが、見事に當らなかつた。
『ほ、ほ』と、ゲーム取りは笑つて、『いくらでしたか、ね？』
『百に半分でいゝ』と、義雄も笑つてゐる。
『なアに、七十だ』と、村松は自分の白を拾つてもとの處へ置き直し、二

度目のねらひを定めてゐる。

『君にはまだ僕の半分しか突けないぞ。』

『どうだ、見ろ！』村松の同じやうに突いた玉が義雄の白へは當つたが、向かうの緣へ行つてはね返る時に赤の左りの二三寸さきを反れてしまつて、村松の方の左りの緣のそばへ來てとまつた。

そして、義雄の白は一旦渠の前の緣に行つて、また渠に近い右のに行き、そこを少し出たところで坐わつた。

『その腕だからね』と、義雄が今度は突きはじめた。近い赤から向かふの緣へ這入つたのが、白へ行つての二點と、それから三點とまた二點との三棒で、四棒目には失敗した。

それから互ひに突き合つた結果が村松の勝ちに歸したが、二回目には義雄が勝ちを得た。

三回、四回と試みてゐるうちに、プールの組は歸つてしまつて、その跡

へ義雄の仙臺遊學時代の後輩だが、渠よりはずッと先きに冒險小說で世間に名を賣つた男と、歌詠みから株屋の番頭に轉職した最も若い男とがやつて來た。

向かうも醉つてゐれば、こッちも丁度醉ひが出てゐるところで、互ひに知り合ひの仲とて、入りまじつて兩方の臺を占領することになつた。

義雄はかう云ふ時には非常にはしやぎ出す方で、皆を傍若無人に揶揄しながら賑やかに誰れでもの相手をした。そこの主人もボーイ連も注意は全く渠一人の面白味に釣り込まれてゐた。

然し株屋の番頭の二百點に對する義雄の百點は後者の方に少し負擔が多過ぎるので、二三回負越しになつた。その形勢を挽回しようとして、義雄が躍起になり、熱汗のでるのをもうち忘れて奮鬪したのが、力の平均をます〳〵失はせたばかりでなく、

『この野郎』とか、『畜生』とか云つて突き出す棒を、どうしたはずみ

か上へ振りあげたのが、電燈の一つに當つて電球がこな微塵になつた。
『電球は白かい、赤かい』と冷かされて、『どッちでもねいや』と、義雄は興ざめた返事をし、與へた損害は店へ拂ふことにして、村松と二人でそこを出た。

もう十二時近くで、さすがの場所も段々森閑として來た。例の美人娘がゐる琴平町の蕎麥屋へ行つて、二人でまた失つた醉ひを取もどし、そこで義雄は友人と別れて、家へ歩いて歸つた。が、戸が締つてゐるので無言で力強く二三度續けざまに叩くと、

『どなたです。』千代子の險ある聲が土間でした。

『おれだい！』

這入つてからも、千代子が洗ひざらしの模樣も禿た浴衣の寢卷姿で恨めしさうにじいッとこちらを見た。その目が飛び出たのかと思はれるほどやせてゐる顏を義雄は見ない振りでつか〳〵と靴脫ぎをあ

がつた。さッさと自分の室に通つて、押し入れから蒲團を出して敷いたが、直ぐ寢る氣にもなれない。

水を飮む風をして、臺所へ行き、食事室の柱に懸つてゐるお客帳をこッそり廣げて見ると、紀州田邊の女は『清水鳥』――二十一歳――勉强の爲め止宿と書き付けてあつた。

四

お鳥は、到着の當日、もとゐた時に知り合ひになつた駄菓子屋の娘で、今は電話交換局へ通勤してゐるものや、炭屋の娘で陸軍省の雇ひと結婚してゐるものを訪問し、何か都合のいい口を探して呉れと賴んだ。又その翌日、神田の同國人夫婦のところへ行き、身の上話しやら何かで一日一晩を過ごし、やうやく最終電車に間に合つたと云つて歸つて來た。

それから二三日と云ふものは何をするでもなく、ぐづ／＼に日を送つた。近所の友達のもとへ遊びに行つたり、時々は義雄の總領娘富美子を連れ、雨に大きな笹の模様を出した白地の縮みにメリンス友禪の帶を締め、藍地の絹張蝙蝠傘をさし翳して、芝公園の中へ散歩に行き、氷水や氷汁粉をやつて來たりした。

家にゐては義雄の弟の馨の部屋へ行き、足を投げ出していつ迄も話し込んだり、自分の室では、また、義雄の繼母がまだ記憶に新しい位牌を床の間に据ゑて蠟燭をあげたり、線香を立てたり、子供の衣物を縫つたりしてゐるそばで、からだを長く横たへて、沈み勝ちにうちわを使つてゐたりした。

茶呑み茶碗が足もとにころがつてゐても、それを直さうともしないので、田村家のもの等の噂の種にのぼつた。

最初にそれを氣が付いたのは千代子で、お鳥がどこかへ出た留守に、その部屋へ來て繼母に向かひ、

『なんて無精な女でしよう、ね、あんなだから嫁に行つても追ひ出されて來たんでしようよ。』

『まさか、追ひ出されたのでもないやうですよ。』繼母は縫ひ物を續けながら、『それにやアいろ〱込み入つたわけもあると云ふことだか

ら――』

『あんな者のいふことが信用出來ますものですか？』

『さう一概にも、ねえ――まだ若いから氣の付かないこともあり勝ちでしようよ。』

『おッ母さんも、義雄の味方になつて、たゞ若いのがいゝ方なのですか？』

『ほ、ほ、』と、それには逆らはないやうに、

『そんな譯ぢやアないけれど、ねえ――』

『もう、二十一にもなつて、茶碗のころげたのを一つ直せないやうぢやア、末がおそろしいでしようよ。』

『まア、でも、今の女の子は横着になつてゐるから――』

『うちの富美などは、あんな者にさせたくないものです。』

『そりやア、お前さんの育て方一つで、ねえ――』

『また子供のことか』と、そんな話はよせといふ勢で義雄が二人の坐

つてゐる前の椽がはへ來て、突ッ立つて、雨戸の鴨居に兩手をかけて、繼母の方を向き、自分のない腹を探られては困るがといふ風をしながら、

『お母さん、あの清水とかいふ女は全體どうすると云ふのです？』

『どうするッて』と、繼母の返事は直出かねたが、あまッたるい舌で、『まアどこかいい奉公口を探してゐるのです、わ。』

『めかけ奉公の口か？』

『いゝえ』と、微笑を吹き出しながら、『そんなことアないのでしよう。』

『然し』と、小言でもいふ口付きのむッつりした口調で、『めかけにでも行かなけりやア、金も持たずに勉強が出來るものか？』

『まア、さういやアさうです、わ。』口を少し明けて笑ひを見せ、『あの子の注文が六づケしいのだから。』

『どうです、ね、あなたが一つ』と、千代子は冷笑しながら義雄を見あげて、『あの子を引き受けてやつたら？』

『馬鹿云へ』と、聲では大きな一喝を喰らはせたが、義雄の顏には心の弱みが少し赤く染出された。

お鳥は神田から二三度夜遲く歸つて來ることがあつた。そのうちの二晩つづいたのは、確かに電車賃を、儉約し、暗い寂しい丸の內の電車道を通つて、一里餘も步いて歸つた。

その最後の夜の如きは、餘り遲くなつたので、玄關の戶を明けて貰ふことをしなかつたのは勿論再び年寄りの隱居に厄介をかけるのをも遠慮して、直馨の部屋の窓――そのそばに、泰養寺の山をしみ出る淸水の井戶がある――のもとに至り、渠を呼び起して裏口の木戶を明けて貰つた。馨が裏木戶を明けた時、かの女は釣瓶から直に水を飮んでゐた。

『どうせ用のないからだですから、電車などへ乘らんでも』と、かの女は翌朝、隱居に辯明らしいことを云つたが、宿賃は勤めさきが決つたら

拂ふことにして貰つて、取敢ず來てゐると云つたと云ふ同國人夫婦の方へその日から轉宿した。

義雄が友人なる琴の師匠から賴まれて一美人を女優に仕立てあげようと、音樂俱樂部へ熱心な交涉をしたり、その本人を呼び寄せて決心を確めたりしたのは、この頃のことであつた。それが直失敗に終つたと同時に、渠の俄に寂しく、暗くなつたやうな心に蔭ながら代りの花やかさを殘した女客も、神田の方へ行つてしまつたので、渠はます〳〵陰鬱な日を送つてゐた。

たまには、それでも麴町の詩人が來て新派小說家の創作を論じ合つたり、小石川の當時賣り出した小說家が來て、碁の勝負を爭つたり、辯護士の村松が來て、一緒に玉突きに出かけたりして、そんな時には、人一倍の元氣も出で、また快談もやつた。

『何とか世界から、あなたの寫眞を取りたいと云つて、來た人がありま

す』と、千代子の通知に接して玄關へ出て見ると、某出版會社の編輯員(これは兼ての知り合ひだ)と寫眞師とであつた。

一つは義雄を中心としての書齋、一つはその家族全體を撮影すると云ふのである。

『家族の方は僕が面白くもないからよさう』といふと、

『いろんな人のを二種宛取るので――これは雜誌の都合上だから』と賴んで聽かなかつた。

『この部屋は餘ほど光線が取りにくい』と云ひながら、友の編輯員が椽がはの外から書齋に對して機械を据ゑる位置を暫らく探してゐる間に、家のものは衣物を着かへてゐたが、子供から先づ面白がつて飛び出して來た。

『書齋』は、義雄が白地の浴衣を着たまま机に右の片肱をかけ、橫向きに洋書棚を背にして、その前の壁ぎはに、今一つの一閑張りのところどく

禿たのを置いて、上に棕櫚の盆栽をのせた場面のが寫つた。

『家族』は、椽がはの角の柱に寄つて、義雄が雨滴落ちの一線に並んだ春蘭の内がはに立ち、千代子がその右の椽に腰かけて末の子を膝にし、義雄の左に弟の馨、二人の子供、千代子の妹(これは二人の下女で足りないから手傳に來てゐる)、その後部の明き〳〵に繼母と千代子の母、などが立つてゐるのが寫つた。

家族の方は外だからまだしもよかつたが、書齋は義雄の左の半面から上へかけて眞ッ黒になると聽いて、渠は死の色を聯想したと同時に、そこへ亡父の白髯の顏を楕圓形の輪廓で出して貰ふやうに頼んだ。と云ふのは、文界に子が多少でも名を知られて來たと云つて、父は非常に喜んだのを、義雄は今思ひ出したからである。

寫眞は二三日して出來あがつて來た。その出來あがりを見ると、書

齋の如何にも暗いのが義雄の現在の心持ちそそのまま現はしてゐるやうで――渠は自分で自分の死と云ふ世界に餘り遠ざかつてゐないやうな心を返り見ながら、明け放つた部屋の外に目を放つと、庭前の梅や杏子の枝葉が如何にも繁り過ぎてゐるのに氣が附いた。

椽へ出て、はしご段の突き當りにある戸ぶくろに左りの手をかけ、そのそばに植わつてる山吹の上から、北の生垣が鍵の手に反れて板壁に換はつてゐる向の離れへ聲をかけ、

『馨！馨！馨はゐないかい？』

『はい』と、一聲進まない返事がして、馨は椽がはをまわつて來た。どこか外へ出るつもりであつたかして、慶應義塾の大學帽を被つてゐる。

『お前の座敷の横手にある梯子を持つて來ないか――如何にも鬱陶しくなつたから、こんな木の枝葉を刈つて、一つ植木屋の代理をやらうぢやアないか？』

『はい。』相變らず進まない聲で弟は離れの方へ行つた。

『それを刈るのァまだ早いのですよ』と、千代子は聽き付けて勝手の方から飛び出して來た。濡れた手を布巾を見たやうな物で拭いてゐる。

『早くッても、何でもいゝ。』義雄は忽ち險突くを喰はせて、妻を睨付た。千代子は所天の鋭い目を避けながら、『俄に思ひ出したやうなことはしないでも――わたしが植木屋を呼んで、いゝ時に刈らせますわ。』

『注意は此間もしたが、刈らさせないぢやァないか？』

『まだ時期が來ないんです。』千代子は飽まで拒絶すると云ふ心を、いら〳〵した態度に見せて。『變な時に素人が手を入れて、痛んでしまひでもしたらどうします――あの梅でも大事にして置けァ、來年も亦四升や五升の梅干が出來るんです。』

『刈り込みをするのですッて？』繼母もにこ〳〵した顏で出て來て、

『義雄さんも隨分物好き、ねえ。』

『何でも刈り込めばいいのだ。』と、義雄は誰れに云ふともなく云つて、馨が下から持つて來た梯子を先づ自分の室の北がはに當る梅の木にかけさせた。

『刈り込むにしても』と、千代子はしつッこく、『あなたの五分刈りあたまのやうに坊主にして貰つちやア困ります。』

馨が唐ばさみを取に行つてる間、義雄ははしごのそばの椽がはに腰かけて、枝葉の繁りを見てゐると、梅雨の重い雨に幾度か打たれて來た靑葉は、黑ずんで、少しも冴えた光がない。

目をつぶつて考へてゐるやうなこの枝葉の蔭で、父は毎年粒立つた木實を仰ぎ見たのだ。義雄の若い時もさうであつたし、近年も亦さうであつた――

義雄が諸方を放浪してゐる間に、父は病氣になつて、――亡くなつたと

云ふのは實際なくなつたのではなく、子の記憶となつて拔け出ただけであらう――

最後の二十日間、朝に夕に看護してゐたのは、渠の疲れた神經の一端に觸れたもぬけの土くれであつて――どうも、この薄暗い樹かげに、父は、見えないが、まだ立てゐるらしい――

然しまたそれが乃ち死の影かも知れない――など考へて、渠は思はず身の毛をそうげ立てた。

と云ふのは、義雄が多年生活に疲れ、奔走に疲れ、放浪に疲れ、生の苦しみ――それが生命であつた――を味はつて來た今、父の建てた家を譲り受けた氣持ちは、一肩おろせただけに、いよ〳〵無責任なる死の方に近づいたやうであると思へたからである。

庭の木を刈り込むなどと云ふことは、夢にも見なかつた初めての經

驗で――『不馴れだから、あぶないですよ』と注意する千代子の言葉には耳も傾けず、枝にかかつてぐら〳〵する梯子を半攀登つた時、渠はあたまがふら〳〵して目まひを感じた。

『元來、おれは机を家とする筆の人だ。』かう考へると、渠はこんな植木屋の眞似をするやうになつたのは、不斷の本分を忘れて隨分氣がゆるんで來た證據だ、なと思はれる。

實に疲れた者、倦じた者、刹那の間だけでもぐッすり一安心して眠つて見たい――然し又死人の安住は得たくない――睡いやうでも、いつも覺めてゐる自分の神經の働きが、地上を離れては、一層渠の目前にちらついて見える。

渠のふら〳〵してゐるやうなのを見て繼母は微笑しながら、

『慣れないと、目が舞ふでしやう?』

『まア、させてお置きなさいよ。』千代子も笑ひながら口を出し、『散切

りなら、さぞ結構な虎刈りが出來るでしやうよ。』

渠はそれには答へず、弟が唐ばさみを持つて來たのを受け取つて、先づ二三ケ所の途方もなく突き出た青い枝を切つた。

ふと、錆び強い金物の臭ひがして來た。渠には新しいやうな而も古くさいやうな感じが、黒ずんだ青葉から傳つて、渠の使ふはさみの音に聽こえた。

『ちよきん、ちよきん！』また、『ちよきん、ちよきん！』

それが、何だか、渠自身の身を切り縮めてゐるやうな氣がしたので、俄に梯子を降りて、弟に、

『馨！お前、一つやつて見ろ。』

『馨さんに出來ますか？』千代子はかう云つて、木を痛められるのが心配だと云ふ風だ。

『兄さんに出來るなら』と、繼母は弟の方を辯護するやうに、然し言葉

は和らかに、『馨にだッて出來ましようよ。』

『お父さんのやつてるのを見てゐたことがあるから』と、馨は恥かしい責任を背負つたかのやうに赤い顔をして、挾みを持つたが、多少は面白味に手傳はれて、梯子を登つた。

『うむ、やつてる、やつてる！』

『う、まい手つきだよ。』

　こんなことを云つて千代子や繼母が冷かしてゐたが、少し堅い枝を切る時渠は顎を明けて挾みの手ごたへを受け、じッかりと宙に齒をかみ合はせた。

『ああ』と、それを見た繼母は意外らしい聲を擧げて、『口つきまでがお父さんのするやうなことをしてゐるよ。』

『さうですか、ね』と千代子は大した意味にも思はないやうであつた。

　その木の手入れが濟んで、次ぎの隅にある梅に移つた時、義雄は弟に

代つてまた挾みを取つた。妻や繼母もまたそこに近いところまでついて來た。

かな物の臭ひと挾みの音とに父を思ひ出しながら、渠が椽ばなから仰ぎ見るものがある上で、例のちよきんちよきんをやつてゐると、堅い枝に出會した時、渠も亦思はず顎を明けて、宙に齒をかみ合せた。

『あ、義雄さんもさうだ。』繼母がかう叫んだので、渠はまたぞッとした。渠には、死人がどうしてもこの木蔭を離れてゐないやうで、その魂が今渠に乘り移つて、渠自身を刈り込ませてゐると云ふ氣が起つた。で、その梅並に次ぎの杏子の刈り込みに手を出すのがおそろしいやうな氣がして、殘りの仕事を全く弟にまかしてしまつた。

兎角、冷淡に取り扱つてゐた弟や繼母に對して、義雄は庭木の刈り込みから大分親しみを生じて來た上、清水お鳥がまた行李を持つて歸つ

て來たので、渠はそれとなく毎日のやうに繼母の部屋へ話しに出かけるやうになつた。

神田へ轉宿する前にも、お鳥と義雄とはよく椽がはで出會した。そして出會す度毎に、二人は互ひに一間ほど離れてから返り見合つた。義雄は向にいやな男だと思はれたかも知れないとも考へたが、また女のこちらを見返す目附きをどうも並ではないとも思つた。餘分に突き出た庇の下からじッとこちらを見詰めるところは、底意地が惡いのを表するのか、さうでなければ、豫想通り妾にでもなつてやらうかと云ふ意味だ。

度々夜遲く歸つて來たことがあるのを聽いても、義雄は腹で疑へばいろ〳〵の疑ひを出してゐた。

『今度歸つて來たのは、神田の方の奥さんが燒き餅を燒き出したのださうで――どうしても若いものの一人では、ねえ』と、繼母は義雄に語つた。

『まさか清水さんから手を出す筈もないでしようから、男が惡いのでしようよ。』

千代子は千代子で、義雄のところへ來て、云附け口のやうにしやべつた――『あの清水は炭屋の主人をだまさうとしたのださうですよ、自分のお友達の兄さんで、女房も子もあるものを――まア、おそろしい女ぢやア御座いませんか？』

『果してそんな考へで、上京して來たのかも知れない。』義雄はかう心に疊み込んで、仕やうのない女だとは思つたが、矢ッ張り、その部屋へとおのづから引き寄せられて行くのである。

お鳥は口入れ屋へも頼みに行つては見たが、質屋の隱居に大切にされる口があるがと相談しかけられて、眞ッ赤に怒つて歸つて來た。

義雄が直接に向かひ合つたその顏を見ると、圓ッこく太つて、色は雪のやうに白いが、平べッたい面積にどことなく締りがなく、出過ぎた廂

髪や衣物の着つけがどうしても田舎じみてゐる。底意地のありさうな目附きも、廂の奥から何か意味ありげに見つめるから、さう見えるのだと考へれば考へられないこともない。また、その白目が少し空色がかつてゐるのも義雄が見て餘りいい感じはしない。

見るのでもなく、馨から借りた義雄の詩集を隠居の机の上に廣げて、かの女はじッと考へ込んでゐることもある。

『心配してゐるからだ』と、隠居の繼母は家のものにも語つて、一番多く同情を示めしてゐる。

その部屋に寢ころんで、肱枕をしながら、隠居や馨と無駄話しをしてゐる時、義雄がさり氣なくのこ〱と出て行つて、敷居ぎはに突ッ立つと、

『この爺めが』と云はないばかりに馬鹿にして、片手を突いて半身を起しただけで、兩足は重ねて投げ出したままだ。

『どうです、仕事が見つかりましたか』と聽かれて、初めて足を引いて坐り直し、下を向いて、

『はア、まだ――』

『東京のやうに生活の急がしいところぢやア、女でも、餘ほど運動しなけりやア見つかりませんよ、仕事と云ふものは。』かう男らしくは云つたが、這入りかねて敷居の上で明いた障子を背中にしてしやがんだ。

『今』と、矢張り下を向いたまゝ、『神田の人に奔走を頼んであります。』

『それもいいでしようが――』

『そこの』と、繼母は縫ひ物の針を持つたまゝ、右の手を通りの方へ擧げて、『駄菓子屋の娘が、自分の行つてる電話の交換局へ世話をすると云つてるさうです。』

『そんな間どろッこしいことぢやア駄目ですよ。』

お鳥は默つて目を擧げたが、直またまた下に伏せて、湯衣の褄をいらいら

しくいぢくッてゐるのが、義雄にはしほらしくもあつたし、またどうしたらよからうと云つてるやうにも見えた。

『義雄さんも、どこかいいところを探してあげて下さいな』と、繼母はお鳥に代つて賴み出した。

『そりやア、探してもあげませうが』と、渠は初めて疊の方へ這入つてあぐらをかき、『全體どうしようと云ふのだ？』

『もツと裁縫を稽古したいのです。』かの女は少し笑がほになつた。

『裁縫ツて、そりやア前にゐた時、その方の學校に行つてたさうぢやアないか？』

『まだあれだけぢやア足りないのださうです』と、繼母が口を挿み、

『袴や洋服などを別にまたしツかりおそはりたいので――』

『洋服なんか、洋服屋にならなけりやア入らないことだ。それよりや

ア、もツと何かいい事がありさうなものだ、ねえ。』

『何でもよろしいのですけれど』と、また目を擧げた時、かの女の額に大きなゆるい横皺が二三本出來るのに義雄は氣が付いた。然しまたその皺は目が下に向くと同時に消ゑてしまつて、『まア、そんなことが出來ればえゝと思ふてをります。』

よく考へて見てやれば、さう疑ふべき女でもなからうと云ふ考へが義雄に起らないでもなかつた。果してその通りなら、千代子の聽いて來た炭屋の主人との話しなどは當てにも何にもならないと。

『もし下女でいいなら――下女と云つても、無論、獨身者の家だから、さう忙しいことはないが――そんなところにゐて半日でも學校に通はせて吳れるなら、今でも直ないことはないと思ふのだが――』これは義雄の胸に小石川の小說家を說いて見やうと思つてゐるのである。

『それがいゝでしよう』と、繼母はお鳥に勸めた。

『さア』と、かの女は鳥渡返事に困つたが、この場合、直ちにいやだとも云へず、『それもえゝかも知れません。』

『兎に角、向を聴いて見なけりやア、しッかりしたことは分らないが――』

『早く聴いておあげなさいよ。清水さんも、ねえ』と、繼母はお鳥の方に和らかに念を押すやうな笑ひ方をして、『さう、いつ迄も遊んで居ることは出來ないし――』

それで話しは暫く絶えた。

默つてゐた馨は、床の間の位牌の前の蠟燭が燃え盡したのを見て、新しいのにつけ換へた。

『あかりの消えたのに氣がつかなかつたのかい？』繼母は人ごとのやうに云つて位牌の方に目を向けた。

『消えるまでもなかつたのだが』と、馨はまた線香の火をも新しくしながら、『あんまり短くなつたから。』

『お父さんが』と、お鳥は少し進まない下女の話を再び聽きたくないので話題を他に轉ずるつもりで、隱居に向ひ、『亡くなられてから、もう、何日目におなりです？』

『あ、それで思ひ出したが』と、繼母は勝手に義雄に向ひ、『もう、四十九日も過ぎてゐるのだし、お位牌を向ふのお佛壇に一緒にして貰はうと思ひますが、ねえ――』

『そりやア、もう、わたしに構はず――』

『でも、相談して見なけりやア――』

『なアに、相談なんぞア、あの婆々アに云はせると』と、千代子の聲がする方へ首を動かし、お鳥が來た日に妻が繼母に語つてゐたことを當て付け、『主人にする必要がないのです。』

『そんなことを云つたッて』と、繼母はただ笑つた切りだ。

『さア、玉突きにでも行つて來ようか』と立ちあがつて、義雄はしたく

もない延びをしながらお鳥を見た時、またその額に皺のよつた顏と出會した。

五

某新聞の文藝欄に出す原稿を頼みがてら、その新聞の社員になつてゐる小石川の小說家田島秋夢がやつて來た時、義雄は既にお鳥の話をしてあつた。

『どうせ、まごついてゐりやア、妾か地獄になるのが落ちだらうが、本人はまだそこまでは自覺してゐないやうだ。』義雄は秋夢の樣子を窺ひながら、『うぶでないとしても、男とは普通の結婚であつたのだらうし――一つ、どうだ、高等下女を雇ふつもりなら、話が出來ないこともないだらうぜ。』

『ふむ』と、秋夢はむッつりした笑ひを見せただけで、その話は途切れてしまつたが、義雄は今一度女の爲に話して見やうかとも考へてゐたのである。

渠が机に向かつて、此間梅の枝葉に關して起した感想を『庭木の刈り込み』と云ふ散文詩に引き纏めてゐるところへ、繼母が珍しくも這入つて來て、

『義雄さん。』わざとだとは思はれるが、にこ〳〵した顏をして、机の端に左りの手の指さきを二三本掛け、品やかにしやがみながら、『どこか世話をしてやつて下さいな、清水さんを―いつまでゐたつて、お金はないやうだから、長くゐればゐるだけ、ねえ、うちの損にもなるだらうと思はれて―手頼つて來られたわたしが、お千代さんになり、またお前さんになり、氣の毒な思ひをしなけりやアならないから。』

『別に口もないのか？』義雄は筆を持つたままで、むッちりした返事だ。

『ええ―神田の方とかも、ただいいところがある、あると云ふだけで、そんなことを云つては向かふの男がただ女を面白半分に引き寄せてゐ

るばかりのやうだし』
『それがあの女に分らないのか？』
『さア、そこまでは――』
『女の方が却つてそんな男から何にかおびき出さうとしてゐるのぢやアないか？』
『まさか――』繼母はにツと笑つて、『そんなことアどうでもいいぢやアありませんか？うちさへ早く出て呉れりやア――』
『だから』と、義雄は頰をふくらし、繼母に突ツかかるやうな口調で、『おれが下女にでも行けと云つたのに、乘り氣にならないぢやアないか？』
『下女ぢやア、氣が進まないらしいのです、わ――でも、お前さんに強く云はれたから、その日から自分で方々の口入れ屋を尋ねてまわつたさうだが――よささうだと思つて目見えに行つて見れば、朝鮮人のうちの小間使であつたり――十圓にもなるからと聽いて見れば、お妾の口であつ

たり――若いものはまだ迷ふばかりですわ。』
『なま意氣に、下女と云やア飯炊きばかりだと思つて、人の云ふことを氣に止めないから仕やうがない、さ。』
『下女でも、何んでもいいから』と、繼母はここ切りだがと云ふ風に聲をひそめ、『押しつけておしまひなさいよ、わたしが今本人をここへよこしますから。』
『そりやアよこしてもいいが』と、義雄は言葉に冷淡をよそほつても、心には一種の恥かしみをおぼえて、繼母がいそ〳〵と出て行つた跡で紺絣の襟を正したり、博多の帶の結びを眞ッ直に直ほしたりした。
そして、机の位置がこのままでは、女が遠く坐るに決つてゐると思ひ、成るべく奥の方にかの女を取り入れる爲め、机を床の間と相對する椽がはの前で、半間の壁のそばに据ゑ換へた。

午前のことだが、日は既に南の方にまわつてゐて、餘り暑苦しいやうなことはない。東の椽がはから見える八幡山の樹木から漏れる光が、隣りの庭から突出た二三葉の芭蕉の廣葉に當つて、その葉の青い色が明るい艶を帶びてゐる。

義雄はそれが一番好きだ。如何に暑く乾燥した日でも、その葉だけは青々したしめり氣を帶びて、勢ひよくすら〳〵延びて行く。たとへ、雨風に破れよごれて切り取られてしまつても、直ぐまた跡へすら〳〵と延びて來るのである。

それを見て瞑想しながら、あッちへ行つたり、こッちへ行つたりすることもある椽がはだが、今はその方の障子を締め切つて、渠は左りの壁ぎはに移した机に向つてゐる。

『入らッしやいましたよ。』繼母はお鳥の先きへ立つてやつて來て、持つて來た蓙の坐蒲團を床の間の前に置、『さア、あなたも直によくお賴

みなさいよ』と、お鳥を置いて去つてしまつた。
『さア、お這入んなさい。』義雄はどきつく胸をこと更に押し鎮めて、麻の坐蒲團に坐つたまゝ、机を脊にしてかしこまつた。
お鳥も亦取り澄ました物々しい態度でまだ一言も云はず、下向き勝ちに、義雄の方に明いた障子の敷居を越えたが、じやがんでその障子を人に見られまいと云ふ風で締めた。それから、目をじろりと擧げて義雄を見ると同時に、ちやんと坐つてお辭儀をした。
『まア、もッとお進みなさい。』義雄は坐蒲團を取つて洋書棚近くへあげると、
『はア――』お鳥はおとなしくその方へ少し膝をにじり寄せた。
『どうです、まだいゝ口は見附かりませんか？』
『はア、まだ――どこぞよろしい處を、どうぞ――』
『いゝところッて、僕の心當りと云ふのは、此間も鳥渡お話した下女の

口ですがね。』

『そこでもよろしう御座ります。』

『いゝですか』と渠が念を押すと、女はまた容易くいゝと答へたので、これは物になるわいと思つた。獨り者のところへ若い女―それを平氣で承知するやうなら、渠自身にも占領することが出來ないものでもなからうと。

たとへ田舍じみてゐても、たとへ拙い顏でも、このふツくりと肥た色の白い女を、むざ／＼と友人の秋夢に渡してしまうのが急に惜しくなつた。

『どうです、東京の方が紀州などよりやアいゝでせう』などゝ云ふ問題外の話しを暫くやつてゐると、いつのまにか渠はからだを書棚の方へ橫たへてゐた。

女も右の手を疊に突いて、少しにじり出した膝の當たりの褄を左り

の手の指さきでむしり取るやうな眞似――これは此の間もしほらしいと見たことで、かの女の癖だと義雄は思つた――をして、多少締りがないと思はれる笑ひ方をしてゐた。

『それで然し本統にいゝですか？』義雄はまた本問題に歸つて、今度は疊の上から目をまぶしさうに女の方に向けた。

『へい、かうなつては、もう、氣儘も云ふてをられません。』

『獨り者だから』と、云ひ難いのを、さりげなく見せながら、『口說くかも知れませんよ。』

『そんなことは構ひません。』女はまた眞面目な顔になつたが、決心の色は顔に顯はれた。

『實は、僕も』と、義雄はもう大丈夫だと勘定したが、口をよどませながら一層低い聲になり、『今、誰れか一人世話して吳れるものを探してゐ

るのです。——僕はあの妻子は大嫌ひで、——この家にゐてもゐないでもおんなじことなのだから、——どこか別に家を持たうと思つてるのです。』

『はア』と、お鳥はなほ眞面目だが、どちらでもいいと云ふ心は、相變らず褄をむしつてゐる樣子に見えた。

『いッそのこと、どうです』と、義雄は女の顏を矢張りさりげなく見つめながら、然し口はよどみながら、『僕の——方へ——來て——下さつたら？』

『それでも結構です。』女も外に氣を置きながら、目を横に左りの締つた障子を見て低い聲だ。

『もう占めた』と、義雄は自分に云つてから、『矢ッ張り口說くかも知れませんよ。』

『……』女は無言で、また左りの障子の方を氣にした。

『ぢやア、ね、かうしましよう——』義雄が別なことを云ひかけた時、千代子の草履の音がばた／＼として來て、

『あなた、諭鶴が行けませんから、叱つて下さい』とおめきながら、障子をばたりと明けた。お鳥のゐるのを見て俄に荒々しい調子をやわらげて、『清水さんがゐたんですか?』

『おりやア子供のことなど知つたものか?やかましいからあッちイ行け――』義雄は横になつて左りの肱を突いてゐるまゝ、顔をあげただけだ。

『ぢやア行きますとも――』千代子はかう云つてお鳥が疊から手を放して眞ッ直ぐにかしこまつたのをじろりと一瞥し、ぴたりと障子を烈しく締めると、障子はその勢ひで一二寸跡もどりした。

『靜かに締めろ!』義雄は起きあがつて、その跡を締め直し、また元の通り横になつて、『あれだから、駄目なのです。』

『ふむ』と、お鳥もかしこまつたまゝ鼻であざ笑つた。

『然し僕のおッ母さんにでもしやべつたら行けませんよ。』

『こんなことが云へますものですか？』
『ぢやア、ね、かうしましよう――僕は直晝飯を濟ませて、新橋ステーションの二等待合室に行つてるから、あなたも成るべく早く入らッしやい。鎌倉へでも行つてゆッくり跡の相談は致しましよう。』
『では、さう致します。』
『間違つちやア困りますよ。』義雄は微笑して見せた。
『大丈夫です。』お鳥も笑ひを漏らしながら骨格のいい胸を延ばして、わざとらしい延びをしたが、義雄の燃えるやうな目を見て横を向いてそれを避けた。
勝手の方からは千代子がまた尖つた聲で子供を叱つてゐるのが聽こえて來る。
『あゝ、いやだ〳〵。』妻や子のことを思ふにつけても義雄はまだ親しみのない女に、餘りだらしない風を見せたくないので、起きあがつて

坐り直し、きのふ丸善から買つて來た外國雜誌、ロンドンのザレヸウオヴレヸウズを机の上から取つて、その中の挿畫をかの女に見せたりした。

『あれは何です』『これは何』と、二三の質問が畫に關してあつた切り、話の種が切れてしまつた。

『では、ね』と、義雄は紙入れを取り、或雜誌社から受け取つて、千代子には隱してゐる原稿料のうちから、五十錢銀貨を出し、『これは車賃に渡して置きます。』

『……』お鳥は默つてそれを受取り、周圍に氣兼しながら急いでよれかかつたメリンス友禪の帶に挾んだ。そして膝に返したその手を、義雄は、

『約束のしるしに』と云つて握つたが、かの女もそれを渠の握るがままにまかせた。

六

新橋の二等待合室のシートに腰を落して、義雄が讀み殘してあつた中央公論の政治論を讀んでゐると、ひよッくりお鳥がやつて來て默つてその隣に腰をかけた。

『丁度時間がよかつたよ。』渠は當りの人にそれと感づかれない爲め、夫婦でもあるかのやうに輕くあしらふつもりだ。

『さう』と、お鳥も案外さばけて出た。

が、それッ切り、どちらからも言葉の次ぎ端がなかつた。

女の衣物は相變らず雨に笹の白縮みだが、帶だけは換はつて、牡丹色の繻子と青みがかつた綿繻珍らしいものとの腹合はせになつて、帶あげは繻絆の袖と同じ時色のメリンスだ。餘り結構な身なりではないが、義雄の餘り構はない棒縞透綾の羽織の袖口に汗じみがあるなどに

は、却つて釣り合ひが取れてゐる。
出發前渠は思ひ出したやうに女を近所の郵便局へ遣はし、或ところへ目見えに行くから、今夜は歸らないかも知れないと云ふハガキを、女の申し譯の爲めに、我善坊へ出させた。
『もう、皆這入つてる』と云つて、女が急いで歸つて來た時は、義雄も待合室の外まで出てゐた。
誰れか知人に會ふだらうか？會つてもかまはない。却つておほびらに見せびらかしてやれ、などと義雄は考へながら一緒に改札口を這入つて、三等客車に乘つた。
實は、鎌倉よりも近いところで濟めば濟ませようとして、鶴見までの切符を買つた。そこへ降りて見ると、思つたやうなところではない。海岸はさう近くないし、鳥渡した料理屋も見當らない。
『然しこゝに引ッ込んでゐる小學敎師があるが、その父と云ふのが、麻

布の谷町に家を構へてゐて間貸しをしたいと云つてるのを思ひ出したが』と、義雄はもう女が云ふ通りになると思つた風で、歩きながらの話だ、『あすこを貸りることにしようぢやアないか？』
『ほかにも貸りてる人があるのですか？』
『なアに、まだ無いし、一つい丶部屋があるから。』
『では、結構でしよう。』
氣が付くと、女は素足に新らしい空氣草履をはいてゐる。そしてその青い絹天の鼻緒にまでほこりがたかつてゐる。
『こんなに、たゞ歩いてゐたッて仕やうがないから、どこか外へ行きましよう。』義雄はかう云つて、女を今度は電車に乗せ、神奈川でおろした。
汽船や軍艦の淀泊してゐるのが遠く見えるが、矢ッ張り、いい海岸はない。義雄は女を得た餘勢で海と海の音とが戀しくなつてゐるのである。

二年前までは、いやな家族を相州の茅ヶ崎へ家を借りて放ちやり、自分は東京での冥想や仕事に疲れ切ると、そこへ逃げて行つて、松林の中の軒下や白い砂の浪元に仰向けになつて、からだを延ばすのを例にしてゐた。

家族のそばだから、よかつたのではない。海の音を遠くまた近く聽くと、沖の浪が絶えず湧き立つやうに、自分の疲れた神經も亦若々しく生返つたからである。

義雄の第三詩集中の句、

熱き眞砂の上を撫でて
われは獨りし物を思へば、
遠き深みの浪は打ちて、
手なる下より響き來たる。

おのが小胸も爲めに振ひ、
千々の亂れは濱の小砂利。

渠は曾て自分が作つたかう云ふ浪曼的詩の而もこまやかだと思ふ心持ちを若い女と共に回復して見たいのである。この二三年來、渠は人生の殆ど素ッ裸な現實にぶつかつてゐて、もとは何となく奧ゆかしさのあつた幻想など云ふものは全く消滅してしまつた生活をしてゐると考へると、やがて四十歳に近い新時代者の自分が哀れな樣にも思はれて、迫めては若い女の熱い血に觸れて、過ぎ去つた心の海の洋々たる響きを今一度取り返して見たいのである。

お鳥はそんなことは知らず、ただ小羊のやうにおとなしく、義雄が目を鋭くして海の方へとあせつて行くのに附いて行つた。

が、人工的に切り開いた狹い長方形の入り江のやうなのがいくつもあるだけで、行つても〳〵生た浪ぎはには出られさうもなかつた。と

同時に附いて來る者の迷惑さうな顏を返り見ると、渠は段々興ざめてしまつて、今まで追ッ驅てゐたまぼろしの跡方もなくなつた。

『ぢやア、もう跡戻りをしてステーションの近所にあつた丁子屋とか、香――何――園とか云つたやうなところへ這入らうか？』

『さうしましよう。』

然しさういふ家々の門前へ立て見ると、どうも樣子が分らないのであがる氣にならない。お負にぐづ〳〵してゐるうちに、義雄に禮をして通つた青年があるので、渠が暫く考へて見ると、自分の敎る商業學校の生徒であつた。

『こんなところへ止まるくらゐなら、いッそ鎌倉まで行かう、さ。』

『そして繪ハガキでも買ひましよう。』

『もとの御亭にでも出すのか？』突然かう云れて、お鳥は、

『そんなことはしない』と、微笑して横を向いた。が、別に赤い顏もし

なかつた。
『なぜ別れたの？』
『見込みがありませんもの。』
『そりやア可哀さうぢやアないか、一旦一緒になつて置いて？』
『でも、兄が無理に別れさせましたものですから。』
『兄さんと云ふのは何をしてゐるの？』
『醫者です。』
『あ、それか、あなたが前に一緒にうちへ來てゐたのア？』
『…………』
『あなたも隨分あばれ者であつたて、ね？』
『…………』女はたゞこちらを向いて笑つた。
『男とくッ付きやアしなかつたかい？』わざと子供を取扱ふやうに見せて女の顔色を窺ふと。

『そんなこと――』といつただけで、横を向いてしまつた。これは誰れも人影の見えない神奈川ステーションの待合で汽車を待つてゐた間の話だが、そこから鎌倉へ着した時はゆふ方であつた。

急いで八幡宮を見せた序に、義雄はその近處に借家してゐると知つた友人の家を鳥渡訪ねて見ようとしたが、分らなかつた。

車を二臺雇つて大佛前の三橋へ走らせ、そこの式臺をあがる時、渠は女の草履の表が足の油とほこりとで眞ツ黒になつたのを見た。

『ひどくなつたものだ、ねえ』と、渠はお鳥を返り見たが、宿のものに導かれるままに、おもて二階へ案内された。

『くたぶれた、わ』と坐つた切り、かの女は再び笑ひもせず、義雄から話しかけられなければまた口も開かない。

宿の女が茶を運んだり、菓子を持つて來たりするたんびに、じろ〳〵とお鳥を見るのを、かの女は憎々しさうに見ては顔を反むけた。

門内の庭の樹木がよく見えて、いい靜かな部屋である。

ひぐらしがじい〱と木にしみ付くやうに鳴いてゐるのも、却つて涼しく感じられる時刻で、庭の噴水のさきが百尺竿頭一歩を進めたと云ふ悟りのやうに、白く泡立つてまた元へ返るのを見ても、義雄は早く汗と垢とを洗ひ落して、ゆツくりと、二人が間に何物をも置ずうち解けて見たい氣が切に迫つて來た。

『湯に這入らうか？』渠がかう云つて、わななく胸を押し鎭めながら、さきに立つて部屋を出ると、お鳥は無言で、而も眞面目腐つた顔をして素直に從つて來た。

義雄の目が湯のけむりに曇つたので氣が付くと、いつもになく、渠は鐵ぶちの近眼鏡をかけたままであつた。

『こりやア行かん』と、渠は眼鏡をはづしながら跡もどりする時、女が

入り口の戸を這入つて來たのに出會つた。

『ふ、ふん、』と、かの女は眞顔のまま吹き出した。それが渠にはまた『このおやぢめ』と冷笑されたやうに思はれた。

湯をあがつて來ると、もう日が暮てゐて、唐紙一重の隣室には五六名の客が集まつて酒をやつてゐる聲がする。

『あれぢやァ、面白くない、ね。』

『はァ――』

『別な部屋にして貰はうか？』

『どちらでも。』

女が親しみのない樣子をして團扇を使つてゐるに加へて、渠自身も宿に向つて部屋を換へて吳れろと云ひ出すのが何んだか自分の腹を探られるやうに思はれたので、どうしようかと考へるばかりで、二人の間に暫く言葉がなかつた。

隣へは早藝者も二三名這入つた。そして、その浮ついた言葉やお客の急にはしやぎ出した調子をこちらから靜と聽いてゐると、二人とも、今、大きな樫の木か何かの食卓に向つた間よりも、一層の隔絶を生じて來たのである。お鳥には自分も亦賤業婦風情のやつて來るこんなところへ來たのかと云ふ反省心が起つたし、義雄も亦宿のものから處女をこゝへ誘拐して來たと思はれはしないかと云ふ疑念が先きに立た。

やがて女中がやつて來て、手の指さきを持つて隣をさし、

『お氣の毒ですが、直歸られますので――ほんの、この土地の人の寄合で、前からお約束があつたものですから――』

『なアに、構やアしません』と、義雄は笑ひながら、實は大眞面目な顏を見せて、ビールを注文したが、お鳥と共に隣の賑ひの方へどうしても氣が取られてゐる。

『腹は減たし、もう暗いし、大佛はあすの朝見ることにしましよう――』

『……』女は目をあげて鳥渡こちらを見た丈けだ。

『あすは、また圓覺寺を見がてら、その寺内の庵を借りてる友人を尋ねて見ましよう。』

『…………』

『それから、ね、あなたが谷町へ引移るとしても、うちのものに知れては困るのだから、表面は——僕の友人で琴の師匠をしてゐるものがある——そこの女學僕になつて行くとして置きましよう——どうせ、あなたも琴は習つて置いてもよからうから——』

『はア——』お鳥は琴も習へるのかと嬉しいやうな口附をして見せたが、直また眞顏になつて下を向き、そんなことをさせて貰ふ所以を考へないわけには行かなかつた。

『あの——』と、かの女はじろりとした目を義雄に向け、『いつかの女の人

はどうなりました?』

『あれですか?』渠はあの女優志願者であつた女を思ひ出した。琴の師匠から聯想して、この女があの女のことを云ふのは、きッと繼母からしやべられてゐたに相違ない。それにしても、自分が殆ど全く忘れてゐたものに對し、お鳥はもう競爭氣を起したのかと思ふと、意外に吹き出したくもあつたし、また、若い女のあはれな心根も思ひやられた。と同時に、あの方は如何にも美人で、これとは丸で代物が違つてゐたと云ふ惜しみ氣も出たが、何氣なく微笑しながら、『あれは何も心配するにやア及びません。氣の變り易い奴で、もう世話もしませんし、また(と急に早口になり)僕が關係したわけぢやアないですよ。』

『……』お鳥は顏に冷かすやうな笑ひを浮べたが、心では、それが本統のことだらう、あれがある上に、また自分と暫く關係を續けようなどゝは、義雄がどんな大相な收入があるにせよ、あんな多くの家族を補助

する上は、とても出來なからうからと考へた。そして、さう考へると、まだ氣が知れない男の前でも、多少の安心を得たやうだが、それをおもてに現はすことはしたくないのである。

かの女は酒やビールは嫌ひだといつて義雄のさしたコップを一度も受け取らなかつたが、堅苦しく顫える手附きで渠のお酌はした。

『いつまでもやかましくッて、困る、ね』と、男が云ふと、

『……』女はたゞその顔を隣の方に向けた。電燈の光りに、突き出た髮の廂が大きく義雄の向つてゐる唐紙の裾の方に寫つた。

『隨分つン出た廂だ、ね。』

『でも、あんな』と顏を向け直したが、遠く義雄の妻に矢を放つて、『引き詰つたのもをかしい。』

『それも、實際、さうだが――』跡は言葉に出さなかつたが、田舍もの〻癖にい〻氣でハイカつてゐるのもをかしいよと、義雄は云つてやりたか

つた。

渠は一方に詰らないものを脊負ひ込んだやうな氣もするが、どうせ妻子と別居するとすれば、他の下宿屋生活もいやだし、また、一方には、まだよく分らないこの女の素情を究めて見たくもあつた。

さり氣なくいろんな嬉ばせを話しの途絶えかかつた時にさし挾みながら、二本のビールを飲み終つた時、渠は女と共にゆふ食に移り、それが濟んで間もなく、一つ蚊帳に這入つた。

『もう占めたものだ』と考へたから、渠はビールに興奮したあたまを枕に休め、向ふが口を開かないなら、こちらも默つてゐて見ようと云ふやうな意地を出し、暫らくただ團扇を使つてゐる。

お鳥は然し物を云ふどころではなかつた。枕に仰向いて目をつぶつても、蚊帳を通した天井には、自分が一二週間前無理にふり切つて來た所天の、一晩中泣いて別れを惜しんだ姿がちらついて見えるのであ

る。

『これほど頼んでも』と男泣きに聲をあげて、『どうしても別れて行くんか？』

『へい』と、冷淡に、『もう決心した以上は仕やうがありません。』

『お――おれが――おれが度々なぐつたりしたんで、あ――愛相をつかしたんだらう？』

『さうでもない――』

『白状するが、なア』と隣の寝床から起き直り、『實は、おれの――燒き餅からぢや。おれがお前を愛する餘りほかの人と關係――でもありやアせんかと――しン――心配したからぢや。』

『そのありがたいお心は忘れません。』

『では、おれを矢ッ張り、矢ッ張りどす、おんばうの血統ぢやと思とるの

か？』

『さうでもないけれど――兄がやかましく別れいと云ふて、聽かんものですから――』

『兄は夫婦の間柄から云へば、他人ぢや。その他人の言葉に從ふやうでは』と、殘念さうに腕と肩とをよぢつて横に仰向き、涙をぽろ〳〵と頰に傳はせながら、

『おれを實際に田舍の小學敎員と見くびつて、誰れか東京の人にでも乘り換へる魂膽があるんだらう――もう賴まぬ！　泣いたりするこのおれが馬鹿ぢや！』

『そんなに泣かんでも』と、つひ氣をゆるめて、こちらも起きあがり、笑つて別れようではないかと云つた。が、向ふが直ぐまた一緒に暮して呉といふやうなことを云ひ出したので、再び心を強く持ち直した。

全體父や兄弟の許しを得ないで、結婚したのが惡かつた。籍も移さ

ないでごたごたしてゐるうちに、父は亡くなつたし、兄は頑固に云ひ張つて斷然別れて了へと云ふ。それに職業が職業で、小學教員など夫として末の見込みもないから、自分もその氣になつて斷念して了つた。

『行くなら、行け――おれは跡で自殺するから、その時になつて後悔すな!』かういつて、充分恨を含めてこちらを見た目付は、今思ひ出しても怖ろしい。まさかとは思ふが、若しやそんなことがあれば、自分もそれまでとあきらめてその跡を追つてやるつもりで、兄の藥局からアヒサンを一服盜んでは來てゐる。あんなに恥も構はず人の前で泣いた男が今頃はどうしてゐるだらうと思ふと、再び其姿が神經の目さきにあり〳〵とちらついて來る。

自分は今少し勉强して、獨立の生活を營むとも出來るし、また、いゝ家の奧さんにもなれるか知れない。あのおんぼうかも分らない田舍教員こそ可哀さうだがと、お鳥はまた考へて見ると、今頃は迅に泣いたこ

となど忘れて、あの男のゐる學校で、自分も裁縫教員として同僚であつた靜子さんと出來合つて、二人で自分のことを笑つてゐないとも限らない。男からはそれッ切りたよりもないのに、あの女はわざ〳〵手紙をよこして、今一度歸つて來る情はないかなどと——へッ——無いと云つてやつたので、安心して二人で乳くり合つてゐるのだらう。などと考へると、お鳥は自分が馬鹿を見たやうにも思はれて來るし、また、目の前に所天がゐた時のやうに、懷かしくも且ねたましくも——

ふと、かの女が氣付くと、自分の顏のそばへ義雄の息が近づいてゐて、隣の客はいつの間にかすべてゐなくなつてゐた。怖ろしいやうな——懷かしいやうな——之を豫期して、先刻からかの女は物も云へなくなつてゐたのだ。が、今更の如く身振ひをしないわけに行かなかつた。

その夜お鳥が自分から進んで口を開いたのは、女優志願者のことを念押しした外には、たッたこれだけだ——

『本統に學校へやつて呉れる？――本統？――うそぢやアないの？』

『あゝ』『あゝ』と、義雄はたゞ眞面目腐つた微笑をして、それの返事をした。

七

『うぶだ、思つたよりもうぶだ。』かう義雄はお鳥のことを思ひ込んだが、また考へ直して見ると、どうも不審な點もあつた。

新橋の停車場へ來た時も案外平氣であつた。道寄をしながら鎌倉の宿へ着いたまでの間にも、殆ど恥しさうな樣子は見せなかつた。大佛を見てから圓覺寺の友人を尋ねた跡でも、平氣でその友人の顏つきや癖を批評してゐた。

『あの人の目はきよろ〳〵してをつて、をかしいやうだ』とか、『河童のやうに、何であんなに髮の毛を延ばしてをるんだろ』とか云ふことは、その人が義雄と同樣世界の新思潮に多少でも觸れた神經過敏の詩人で、而も昔のミルトンやバイロンを忍びつゝ、アメリカ歸りのハイカつた趣味を圓覺寺の森の中に發見するといふやうな變つた消息の全

く分らない女には、却つて無邪氣で適當な云ひ分だ。が、この何事に當つても平氣なのは、どうしても、たッた一人の男を二三年守つてゐたばかりのものの態度とは受け取れない節もある。

藝者や濱町あたりの女を連れて遠出をしても、それが年の若いのであると、義雄ぐらゐの年輩者には隨分恥かしがつたものもある。義雄はそれが可愛かつた。お鳥もそれらと同じ若さでゐながら、さういふ可愛味を見せないのが義雄の疑問なのである。

どうせ、人の所天でも何でも構はず、暫時胡魔化してゐればいいと云ふ覺悟を持つてゐるなら——そして神田の同國人や炭屋の主人を胡魔化し損ねたのが事實であつたとすれば——賤業婦の心も同然で、渠もさう正直にかの女を待遇する必要はないといふ迷ひが生じて來る。

『もう二三回おもちやにした後は、うちの下宿料をふいにしてやつて、追ッ拂つてしまはうか？』かうも渠は考へた。

が、探してゐたものが飛びこんで來たやうに、うまくわが懷ころに這入つた若い女を、渠はさう容易く棄てたくもない。まして鎌倉の夜の、他に人がゐなくなつた二階で、『本統に學校へやつて呉れる』と念を押した時のことを思ひ出すと、その優しい微笑をいつまでも續けてゐさせたいのである。

渠はかの女を信じて見たり疑つて見たりしながらも、豫定通りの手續きを踏むことにして、先づ琴の師匠といふ小泉笛村を訪問し、女優志願者の件で迷惑を掛けさせられた詫料として、渠に自分の今回の事情をすッかり承知させた。

義雄自身の家へは、すべてお鳥から事情を僞つて語らせた。ゆふべ目見えに行つたところは、妾の口だからやめにしたが、義雄の世話で笛村の學僕になつて行くと。

『ちやア、裁縫が琴に變つたんですね』と千代子は云つた。その言葉

付からして、聽く度毎に憎々しくまた毒々しく思はれて、お鳥は自分の目をあげて、鳥渡睨むのが常だが、けふは、かの女もさうは出來ない弱みを感じて、

『はア』と、ただ下を向いた。

宿車では跡で分るから行けないと云ふ義雄の注意をおぼえてゐて、お鳥は通りがかりの車に自分と行李とを乘せて、麹町の永田町へと云つて我善坊を出たが、途中から方向を轉じさせて、義雄が先きへ行つて待つてゐる筈の麻布の谷町へ行つた。

谷町にゐる義雄の知り合ひは、暫く郷里の方へ行つてゐて、その息子の中學生と、下女代りに置いてある親戚の女(お鳥と丁度同年輩)とが留守をしてゐた。

通りに面した方が格子窓になつてゐる二階の六疊を借りて、お鳥は

そこに落ち付くことになつたのである。

『蛇の穴を脱けて來たやうに氣がせいせいした、わ。』かう云つて、まだころがしたまゝの行李にもたれ、かの女は義雄と相對して坐つた。

『僕も家にゐるのは大嫌ひなのだから、これから、晩はここに止まることにするよ』と、渠も亦氣が輕くなつたやうだ。

お鳥は渠のこの言葉を先づ不審がつた。別居すると云つたのだから、あの澤山の書物を持つてちやんと引ッ越すのかと樂んだのに、晩だけ來るとはどうしたつもりだらうと。

義雄はまたかの女に手輕く答へて、やがてはさうするが、向ふへ用事の手紙が來るし、突然諸方から執筆の依賴者もあるから、今のところ、每日一度は行つてゐなければならないと云つて聽かせた。

その實、渠はまだ性質もよく分らない女と直家を構へるのも、物入が多くなる上に不安心だし、よしんば、また家を持つても、神經の高ぶつて

ゐる千代子を納得させるまでは、いつ怒鳴り込んで來るかも分らないと云ふ心配があつた。この心配のことも渠はお鳥の氣をなだめる爲めに聽かせてやつた。

『ぢやア、あたい詰らん。』かの女はすねて見せたが、義雄に促がされて、晩がたから一緒に煮燃きの道具を買ひにや、貸し蒲團を頼みに外へ出た。

　夕飯の代りに蕎麥屋へ行つていろんな物を喰つて歸つて來たが、義雄は酒臭い息を吹ながら紙入れをほうり出して、

『もう金はそこにあるだけだ――それで今月中を賄なつて呉ないと困るよ。』

『いくらあるの』と云ひながら、お鳥は電燈の下に坐つて中の物を讀んで見た。それから渠の方を見て、たよりなげに、

『十圓までないぢやないか？』

『そりやアさうだらう、さ——鎌倉行きで十五六圓も使つたから。』

『惜しいことをしたのね』と、かの女は小首を傾げて、笑ひながら、『あれで衣物でも買ふたらよかつた。』

『また買つてやる、さ。』

『本統？』

『さう、さ。』

『でも』と、無邪氣な調子を改めて、『うちへも出すのだろし、あたいも學校へやつて貰たり、間代や米代も出して貰たり、そんなに出けるわけがないぢやないか？』

『そんな心配はするなよ』と、巻煙草の煙をかの女の顔に吹きつけて、『おれはこれから一層奮發して何でも書く、さ。』

『書きさへすれば賣れるの？』

『さう、さ——それでも、お前』と云ひかけて、云ひ直し、『あなたを初めに

紹介しようと思つた秋夢君のやうな賣れッ子ではないが――』

『ぢやア、あたい損したの？』

『損と云やア損だらう、さ。』

『換へて貰をか』と、お鳥も調子に乘つて來たので、義雄も微笑しながら、

『然し、もう、僕の物ぢやアないか？』

『ふ、ふん』と、かの女は顎をしやくつて目を細くし、わざとらしく横を向いた。

『どうして別れたのよ、云つて御覽。』

その夜、義雄はかう云ふ風にお鳥を賺して、どんな動機で小學教員と一緒になり、どんな理由で別れたのかを聽かうとした。が、鎌倉の途中で鳥渡二三言口をすべらしたと同じことばかりを繰返して、詳しいこ

とは決して語らなかつた。

『死んでもそんなことは云ひたくない。』かう云つて、かの女はしまひには不興な顏をした。

何か特別なわけがあるに違ひないと考へると、ます〳〵そればツかりが聽きたいので、翌日も午砲が鳴るまで一緒に寢てゐた上に、女をあまへるまゝにまかせて、午後の時間を二人で寢ころんで無駄話で送つて、とう〳〵家へは歸らなかつた。

そのまた翌日も入りびたりであつたから、義雄の家では心配をし初めた。

『吉原へでも行つてゐつづけをしてゐるのぢやアないだらうか』と、繼母は八疊の間へ出て來て、曾て二三年前義雄が大野と云ふ畫家と三日三晩流連したので、畫家の細君が目の色を變へてこゝへ尋ねに來たことがあるのを思ひ出した。その細君は今は代つてゐるが、『兎に角、

大野さんのところへ行つて見りやア分るでしようよ。』

『そんなことをするお金はない筈ですもの』と、千代子は繼母の言葉には頓着せず、別な方向に疑ひを向けて、『わたしはあの清水があやしいと思ひます、わ。』

『まさか――』

『でも、ねえ』と、千代子は血の氣を失つたやうな地に今うす化粧を施した顔を突き出し、『此間斯うですよ――義雄の部屋で、義雄が若い女の前で年甲斐もなく横になつてるのでしよう。すると、またあの女もあの女だ――こんな風に(と、手を疊に突いて、膝を少し横ににじり出して見せ)なつて話し込んでゐるんですもの。わたしは、まア、何と云ふだらしのない女だらうと思ひました、わ。』

『そりやア、ねえ、茶碗のころがつてるのも起さない位圖々しいのだから』と、繼母はただかの女の氣嫌をそこなはないやうに調子を合はせ

た。

『おッ母さんでもさう思ふでしよう』と、千代子は一層乘り氣になり、

『それが目見えだと云つてよこした晩に、義雄もとまつて來たんでしよう。それがまたあの女の出た日からちッとも歸らないんですから、ねえ。』

『でも』と、まだ否定するやうな笑ひを見せたが、『若しさうとすりやア、小泉さんのところへ行つて聽いて見りやア――』

『だから、わたし、これから直行つて來ようと思つてるんです、わ。』と、立ちあがつて簞笥の引き出しを明けた。

『それがいいでしようよ――主人が日に一度でも歸つて來て呉れないと、ねえ、人が來たり、手紙が來たりするたんびに、こッちはどうしたらいいだらうとばかり心配で仕やうがないから――』

『そりやアさうですとも』と、口をとんがらかして語りながら、千代子

は簞笥から白地に藍の細かいうろこ形を押した浴衣を取り出した。かの女がそれに着かへて後向きに柱の鏡を見ながら、繻子の帶を締めては直し、直してはまた締めるのを、繼母は默つて見てゐた。が、少しふくれ氣味にあがつた束髮の鬢の後ろに紺の大きなリボンが刺つてゐるのに氣が付き、あんな物はよせばいいのにと、私かに顏をしがめた。

八

『今、君の細君が來て歸つたところぢや。』かう云つて笛村樂塾の主人に出迎へられ、義雄がお鳥を紹介しにその座敷に通つたのは、元大藏大臣某の屋敷の繁つた樹木から蟬の聲が涼しく聽える時刻であつた。

樂塾は三平坂の中腹に入口が附いてゐる。その坂から山王の鳥居の方にかけて、可なり一直線に見通せるので、坂上の學習院女子部も夏期休業である時節とて、人通も少く、男が若い女を連れて通るのが特に目に立ちはしなかつたかと義雄に思はれた。

義雄の先づぎツくりしたのはそれで――自分達の連れ立つて來たのを、千代子はどこかの蔭から見てゐて、直跡をつけて來はしないかと云ふ心配が渠の胸をどきつかせた。が、よく聽き糺して見ると、笛村が、

『今――歸つた』と云つたのは、實際は二時間も前、まだ日の暑い最中で

あつたのである。

『それぢやア、安心だが』と、義雄はそれとなく笛村のいつも事實を誇張する癖があるのをなじる調子であつたが、直また自分のことに歸り、

『あいつも隨分執念深い奴だから、ね——』

『さうらしい、なア』と、笛村は太つたからだの胸をあらはに突き出してあぐらをかきながら、『まア、君に頼まれた通り云ふて置いたが——』

『それでいい、さ。』

『けれど、僕も困つたよ。』

『そりやア、然し』と、義雄は笛村にさうは云はせないつもりで、『女優問題で僕に迷惑をかけたのよりやア、まだましだらう。』

『ひやア、そいつを云はれたら！』あたまへ太いぶきッちよな手をあげたが、

『けれど、なア』と、からだを一ゆすりして、右の手を右の膝にのせ、義雄

の顔からお鳥の顔に目を移しながら、『見付けたら殺すと云ふてをつたぞ――もう感づいてをるやうぢや。』

『ふん、何もわたしが』と、お鳥は笛村から義雄の方に目を轉じ、『あんな者に殺されるおぼえはない。』

『そりやア、惡かつたら、ただおれのせいだらうが』と、義雄はまた目をお鳥から笛村の方に向け、『まア、當分は僕の云つた通りにして置いて呉れ給へ。僕もどこかに鬱憤を漏らすところがなければ困るから、ねえ――』

『さうだ、君もお父さんが亡くなつてから、大分人並になつてゐたから、なア。』

『まだ丸二ケ月にもならんのに』と、お鳥ははたから口を出した。

『もう、大分奥さんらしいです、なア』と、笛村にからかはれて、

『ふ、ふん』と、かの女は鼻で笑つて、それでも恥しさうに横を向いた。

『琴をおやりなさい。琴を。』

『へい――』

『そりやア、もう、そのつもりで來てゐるのだから、あすからちやんと教へてやつて呉れ給へ。これは裁縫、裁縫と云つてるが、そんなことは田舍にゐての思ひ付きで、もし琴で一本立になれるなら、それでもいいぢやアないかと、僕も話してゐるのだ。』

『そりや、やれんことはない。』

『然し、これの天分があるか、ないか、調べて見なけりやア分らないから、そこは手ほどきを君にまかせたいのだ。』

『君の說に據れば、藝術には天分は入らん、努力ばかりぢやないか？』

『然しそこまで眞面目になれる女か、どうだか』と、義雄はお鳥と顏を見合たが、さうかの女を重んじてはゐないと云ふ目附を笛村に放ち、

『僕はまだ分らないのだ。』

九

琴の爪を買つて貰つて、お鳥は毎日稽古に出かけるやうになつた。義雄も日に一度は自宅に歸つて、來狀や訪問者の樣子を見るが、千代子と出會しても、一言の口も聽かない。向ふも亦只じッと寂しく睨むやうな目を向けるばかりで、義雄が心配してゐたやうに突ッかゝつて來る樣子もない。が、それが何だか思ふまいとしても、かの『累』の恨み死ぬ顏までを思ひ出させる。

『まア、出來るだけそッとして置け。』かう渠は考へながら、こそ〳〵と家に歸り、こそ〳〵と家を出るのである。

然し笛村がしやべりまわつてゐるので、義雄の友人間では、もう、その噂がぱッと廣まつてしまつた。

『お鳥さんはどうです』と、義雄は至るところで聽かれないことはな

い。

『ふん、ほんの一時のなぐさみさ。』　渠も輕くは答へるが、兎に角、苦勞人ではないと信ずる若い女を左右してゐるのが、自慢の種でないこともない。

『田村君は急に若返つたぞ』と注意したものもある。

村松と一緒に久し振で赤阪亭へ行つて玉を突いた時、おごるから呼べと云はれ、義雄はボーイに手紙を持たせてやつてお鳥を呼び寄せたこともある。義雄の好きな女中は敵意を挿んでじろ／＼かの女を見たし、ボーイやその家の家族はまたかの女の田舍じみたハイカラ風をコッそり冷評した。が、お鳥は二階の食堂に於ても、下の玉場に於ても、なか／＼澄ましたものであつた。

『あんな大でこ／＼のハイカラ女などよせよ』と、村松に蔭で注意された時も、義雄は心で、どんな美人でも、おのれの物にならないうちは、人

と云ふものは冷笑するものだからと思つた。
最初に谷町へ尋ねて來たのは秋夢で――自分に周旋しようかとまで義雄が云たのは、どんな女だらうと云ふ好奇心からである。お鳥もそれと推察したばかりでなく、その人物が小柄過ぎるほどで、而かも身なりが餘りよくないのを見て、勝ち誇つたやうな、また馬鹿にしたやうな態度を取つた。
主客が電氣のもとで、涼しい夜かぜを浴びながら寢ころんでうち解けた話しをしてゐると、かの女も投げ出した足を時々ばた〳〵させて、聽いてゐた。
『友人には、誰れが來ても、餘り失敬なことをして呉れるなよ。』義雄は秋夢が歸つた跡でお鳥をたしなめると、かの女は顏をふくらして、だらりと横になり、
『あんな奴に何で遠慮してやるものか？人の顏をじろ〳〵見て、さ。』

『そりやア、初めてのことだから、さ。』

『初めてだッていけ好かない！』

『然し』と、義雄は坐つたままお鳥の腹をえぐつて見るつもりで、『お前はそれでも行くつもりであつたぢやアないか？』

『そりや別な目的があつたから、さ。』かの女は案外感じの薄い笑ひを見せて、『學校へさへやつて呉れるなら、何もあいつやお前に限つたわけではない。』

『ぢやア、さうして置いて、さ』と、義雄もかの女を離れた方にからだを横たへ肱枕をして、向ふの顔を冷やかに見つめながら、『まだしもおれの方がよかつたのか？』

わざと笑ふまいとしたのだが、渠はつい微笑を漏らしてしまつた。

『知らん、知らん！』お鳥も笑ひながら鳥渡渠の視線を避けたが、直またこちらを見て、『そんなおぢイさんなどいやなこツた──まだしも、あ

いつの方が氣が利いてる。』

『約束通り裁縫學校へやつて貰ふ——やつて貰ふ。』かう云つて、お鳥は琴の稽古に行くのを好まない。若しまた琴の稽古を續けるなら、いッそのこと、もッといい師匠に就けて呉るやうにとせがんだ。

もッといい師匠と云つても、そんな人に就けるだけの價うちがあるか、どうだかまだ分らない上に、友人の笛村をさし置いての仕うちは餘り面白くないと義雄に考へられた。

『お前が全く琴に縁がないとしてしまつても』と、渠はかの女を慰めがてら、『どの學校でも、今は休暇中だらう。』

『夏期講習會が裁縫に關してもないことはない——やつて呉れ！やつて呉れ。』かの女は顏をしがめて、額の上の方から太い横皺を二三條現はし、からだを義雄に摺つけて、なか／＼承知しない。

渠には、然し、どうせお鳥に金を掛けるなら、裁縫のやうな下らない物ではなく、渠自身の好きな藝術の道の一端にたづさはらせて置きたいと云ふ慾目もないではなかつた。

『そんな下らない學校よりも、習ふものはまだ外にあるだらうよ』と、渠はかの女をなだめつつ考へたことだが、何を習はせるにしても、先きに立つ物は金だ。琴を買ふとか、書物を用意するとか――身なりにしても、その儘では可哀さうだ――

ふと思ひ付いて渠は温泉へでも出かけたくなつた。と云ふのは、渠がいつも金に窮すると、旅行さきに於て一か撥かの原稿を書き、それをあつかましいと思はれるほど無理強に友人のゐる雜誌社などへ賣り付けるのが常のやうになつてゐて、その友人等はこの手を『田村がまた背水の陣を張つた』と云つて、渠のどんな原稿が誰のところへ舞ひ込んで來るかと、冷々して待ち受けるのである。

渠はその手が餘り歡迎されないのを知らないのではないが、今回も、そんなことをして見なければ、どうも不斷通り一生懸命に執筆する氣になれないやうに感じて來た。それに、家の方を段々おろそかにするので、千代子が渠の隱れ場所を探り出して、いつ、その無言の恨みを破裂させに來るかも分らないと思ふと、暫く遠方へ氣を拔いてゐる方がいいと云ふこともあつた。

まだそればかりではない——渠は昨年の暮から今年の始めにかけて關西へ旅行した時、リーデルゴノサンを服用する必要がある病氣を受けて來た。その後熱海へ行つたり、伊香保へ行つたりして、殆んど全く氣にしないほどになつたが、まだ全快したとは信じてゐないので、村松の勸めに從ひ、その故鄕に近い鹽山へ一度入浴しに行きたいとばかり思つてゐたのである。

で、渠はお鳥の機嫌がいい時を見計らひ、

『どうだ、まだ暑いのはなか〳〵續くのだから、溫泉へでも行つて見ようか？』

『それも洒落てる、わ、ねえ』と、かの女はにこ〳〵して義雄の顏を見た。が、また少し考へ込んで、『でも、金があるの？』

『渡してあるのがあるぢやアないか？』

『これを使たら』と、また額に皺を出して、『あたいの喰べるお米が買へないだろ？』

『そんな心配にやア及ばないよ』と。ほほゑみながら、しッかりした決心を見せて、『向ふへ行つてから仕事をどッさりしてやらア、ね。』

『では、行く！行く！』と叫んで、お鳥は飛び立つやうに喜んだ。

十

もう、暮れて行く甲州の山々――富士の頂きが先づ隱れる。その手前の一列が隱れる。そのまた手前の列が隱れる。

かう云ふ横に重なつた數列の連山がみんな見えなくなつて、目前に田とつゞく眞ッ黑な森も無いほど、灰色の雨靄がかかつてしまつた。鹽山といふ山は家の後で無論見える筈がないが、左は笹子峠の山脈も薄らいで、宿の裏庭に近い笹藪ばかりが黑い。

右の後手からは甲府の方に走る山がぼうッとあたまが見えない大牛の脊のやうに横たはつて、その脊の骨ぐみだけは薄くしめッぽい輪廓が附いてゐる。

今しがたまで見えた廣い野――青い田――遠い正面の山ふところから掛けて、その麓まで昨年の水害の跡――赤禿の山腹――白光りの砂地――今

年のまたの出水――それをまだ湛へてゐて、朝日やゆふ日がきらめき映るのが、遠い地上の銀河のやうなおほ水の溜り――
かう云ふものが目界から消えて、欄干に寄つて涼しい風を呼ぶ人の心にすべて引ッ込んでしまつた頃、義雄は明け放つた部屋の釣りランプのもとで、お鳥と一緒に晩餐を初めてゐた。
海老屋と云ふ溫泉宿の裏二階で、甲州の一名物たるひどい濕ッた風に時々ランプの光を取られかけるのである。
今晩は珍らしく日本酒が一本膳にのぼつた。義雄は東京から佛蘭西の最も强い酒なるアブサントを仕込んで來て、そればかりをちびり〳〵やつてゐたのだが、ゆふべはどうした拍子か興に乘り、非常に飮み過ごした。その苦しまぎれにあばれ出し、お鳥だけでは手に餘つたので、かの女は宿の主人やおかみさんを呼んで押し込めるやうにして無理に蚊帳の中へ入れてしまつた。

『あすから病氣にでもなつて、書けなんだらどうする――宿賃も拂へやせんぢやないか？』かう言つて、お鳥は不慣れな溫泉場に於ける旅の身ぞらを心配した。が、夜が明けると、義雄はけろりとして、ここへ來てからの定め通午前六時には起きた。

それから、沸かした溫泉へ這入り、また溫泉の源水なる少しどろ〳〵して玉子の香ひがする冷の鑛泉を飲み、室に歸つて朝飯を濟ませると、いつものやうに直ぐ机に向つた。

渠は原稿を書き出すと、そばにゐてルビを打つて呉れるお鳥のことも殆ど忘れたやうになつてしまう。女中が跡へ跡へと汲んで來る冷泉を思ひ出したやうに茶の代りに喫しながら、晩飯頃まで筆を續けた。

『けふは思つたより書けた、わ、ね』と、お鳥はにこ〳〵して出來た原稿の枚數を數へながら、一杯の慰勞がないのも氣の毒だと思つて、强いアブサントを隱した代りに正宗一本だけを注文したのである。

『けふはお前にも飲ませるぞ。』

『あたい、そんなからい物などいやだ。』

『からい物か――一度期にぐいと飲めばいいのだ。』

『でも、酔ふたらどうする？』

『ふむ、どをする、、、』と、義雄はお鳥の上方口調を眞似て見て、成るほどかう佛蘭西風に發音すれば、同じ言葉でも東京の男子が英語風に用ゐる強み若しくはアクセントは消えて、如何にも女の用語になるわいと合點した。同時に、かの女の眞似る東京振はすべてそのアクセントが上方的なのを冷かすつもりで、『酔うたら、面白いぢやないか』と、優しい調子につれてわざと優しく首を振つた。かの女がいやな顔をしたのを見て、直元の聲になり、『ゆふべはおれが看護して貰つたから、今度はおれが看護してやる、さ。』

『いやなこッた。』

こんな話でもするのが、一日のうち義雄が氣を休める時間である。晩餐が濟むと、また筆を執つて夜中の十二時まで、時によると、二時か三時までも續けなければ氣が濟まない。

渠には、お鳥が何んで酒をさう嫌ふのか分らない。第一、その臭をかぐのさへいやだと云ふ。見かけによらず、神經の強い女だと云ふことは、コップに注いだ冷泉の臭ひがぷんと鼻へ來たので、それから決してそれを口にしようとしないのでも分つた。酒とは違つて、この鑛泉の水が果して人の信ずるやうな功能があるものなら、渠はかの女にも豫防的用意の爲めに飲ませて置きたいのだが、いくら勸めても飲まうとしない。

然し酒の方は、たゞ嫌ひだと云ふばかりでなく、何かそれでかの女が凝りたことがあるのではないかと云ふ疑ひが、義雄の胸にはわだかま

つてゐた。

『お前、前の人と一緒になつたのにやア』と、義雄は猪口を自分の口へ持つて行きながら、お鳥の顏を見て、『餘り好かない男であつたが、酒か何か飮ませられたあげく、無理强いに納得させられたのぢやアないか？』

『そんな阿房らしいことはない。』お鳥は下らないことをと云ふやうな顏をして、自分の膳の前にちんとかしこまつてゐる。

『阿房らしいと云やア阿房らしいが、そんな場合がないとも限らない。男が惡いことをしようと思やア、女をおだてゝ酒に醉ッ拂はせること位何でもない、さ。』

『自分ぢやアあるまいし』と、かの女は義雄をうるささうに見詰めた。自分とはかの女が義雄をさして云ふので、お前とも呼びつけに出來ず、さうかと云つて、また、あなたとは氣が引けていひ難いところから、さういひなして來た。『世の中にはそんな人ばかりゐやせん。』

『ぢやア、お前の亭主はよかつたか？』

『さう、さ。』と、わざと取り澄まして再びそのことでくど〳〵根問ひされるのを避けた。

『ふ、ふん』と、義雄も云つた切り、そのことには觸れずに、『だが、ね、お前、男が二人ゐれば、女を醉はせないでも、力づくで自由にしようと思やア、わけはないよ――一人では六ケしいかも知れないが。』

『あたいは、さうは行かん、さ。』得意さうに微笑しながら、『柔術を知つてるから。』

『へい――どこで習つた？』

『お父さんと北海道に行つてた時、さ。――小學校の往き戻りに徒らする男の子があつたから、つかまへて一間ほどほうり投げてやつたら、あたまから雪の中に突きさゝつて、をかしかつた。』

『偉い、ねえ――それに面じても一杯お飲みよ』と、義雄は猪口をさす。

『いやア』と、かの女は顔をしかめ、兩手を後に隱して、からだを振つた。その時女中が給事にやつて來たので、渠は調子に乘つて、なほ笑ひながら、

『お飲みといふに』と、立ちあがつて、猪口を持つて行つた。

『いやア、いやア』と、目をつぶつて、鼻にまで皺を集め、からだを一層振つてゐるところを、渠は女の首に左りの手をかけて、無理にその口へ酒を注ぎ込まうとした。

お鳥は怒つて、その酒をぷッと霧のやうに吹き散らした。

『僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたが、たづねて行つて見ると、いろ〳〵取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出來ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになつた。少し込

入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣が料理屋で藝者も一人抱へてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、隨分さう〳〵しかつた。然し僕は三味線の浮き〳〵した音色を嫌ひでないから、却て面白いところだと氣に入つたのだ。』

かう云ふ書き出しで、義雄は一二年前國府津で避暑してゐた家の隣の藝者吉彌と關係した實歷を、自叙傳的な小說にしてゐるのである。

日に十枚進む時もあれば、二十枚の時もある。さうかと思へば、いくらあせつても、たッた三四枚しか出來ないこともある。然し渠自身のやつたことを充分に靜觀してゐるつもりだから、思ひ切つてあつた通りを書いて行く。あつた通りと云つても、心內の現象を外形的に出た物にしたり、外形に出た感情を內心でばかり取り扱つたりする遣りくりは無論澤山あるのである。お鳥はそれを待ち遠しさうにして、そばに控へてゐて、出來る原稿を片ッ端から讀んでしまう。

そして、渠が吉彌に女優になつて呉れろと頼んだり、吉彌の母を東京から呼び寄せて、私かに跡始末の相談をしたり、あやふやな女よりも矢張り女房の方がいいと思ひ出したりするところを、かの女は現在の自分に利害關係があるかのやうに考へた。

そしてまた、あんなことを云つたの、こんなことを爲たのと一々念を押す時の目附きには、好奇心以外の或物も加はつてゐた。

『どうだ、うまいだらう』と、義雄が突き出した紙面に、吉彌が、娘を鈍い腕だとたしなめた母の前で、『あたいだッて、たましひはあらァ、ね』と反抗しながら、義雄の膝に來てその上に手枕をして、『あたいの一番好きな人』と、渠の顏を仰向けに見あげるところがあるので、

『ふん』と、お鳥は鼻であしらつて、それを受け取らなかつた。

そして、また、『僕は十四五年前に、現在の妻を貰つたのだ。僕よりも少し年上だけに不斷はしッかりしたところのある女だが、結婚の席へ

出た時の妻を思へば、一二杯の祝盃に顏が赤くなつて、その場にゐたたまらなくなつた程の可愛らしい花嫁であつた。僕は、今目の前にその昔の妻のおもかげを見てゐた』と記されたのを見た時は、お鳥は自分に對しても男がこんな反逆心を出すことがあるに決つてゐると考へ及んだので、顏色を變へて沈み込んでしまつた。

然し、また、『寛恕して頂戴よ』と云つて、身を投げて來た吉彌を義雄が突き拂つて席を立ち、さん〴〵に愛相づかしを云ふところに至つて、お鳥は、

『氣味がえい、氣味がえい』と小踊した。ところが、また、直その跡へ、『怒りはしたものの、僕は涙がこぼれた。これが少しは吉彌の心を動かすだらうと思つて、これ見よがしに、目を拭きながら座敷を出た。出てから、鳥渡ふり返つて見たが、かの女は分つたのか、分らないのか、疊に肘をついたまま下を向いてゐた』と來た。お鳥は、執筆者が却つて無關心

の狀態で微笑しながらこちらを向いた顏を、じッと睨みつけるやうに見詰め、頰には且忿怒と恥辱との色までも赤く染出して、叫んだ―
『馬鹿おやぢ！意久地なし！泣き味噌！助平！――そんな黴毒藝者なとが矢張り可愛かつたんかい！』

義雄は筆の進まない時、どう云ふ風にしようかと考へ込みながら、耳かきで耳をほじくるのが癖になつた。
『そんなにほじくるとよくないよ』と、お鳥が心配するほど頻りになつたのだが、さうしてゐるうちに考への糸口も段々明いて來る氣がするので、度々思ひ出しては、筆の代りに耳かきを執つた。それが自分ばかりのをするのでなく、氣分によれば、お鳥の耳をもいやと云ふのを無理に掃除してやることもある。
それが爲めに耳の奧を痛めたにも由るさうだが、おもには過度に神

經を疲勞させたのが原因で、一方の耳に熱を持ち、とう〳〵米嚙みのあたりまで脹れた。汽車で甲府の病院まで行つて濕布をして貰つたが、醫者は細君があるなら、それを近づけるのを暫く見合せ、何にでも神經を勞することはすべて行けないと命令した。然し義雄は筆だけは執つてゐなければならない必要を忘れられなかつた。

外出と云つては、甲府へ行つたこと位で、殆んど全く自分の室に引ッ込通しで來た。原稿の枚數はずん〳〵重なつて行つて、その小説の表題もいよ〳〵『耽溺』ときまつたほどに形を備へて來たが、お鳥のルビ附けは却々はか取らない。

かの女は先づ義雄がどんな小説を書くのかといふ好奇心を失つてしまつた。次ぎに、また一枚に付き五錢づつ貰つて帶を買ふ足しにしやうと思つたルビ附けにも飽きが來たのである。兎に角一緒になつた男に、つい一年か一年半前こんな事實があつたかと考へると、憎いや

うな、妬ましいやうな、馬鹿らしいやうな、詰らないやうな、氣が自分の胸にかはる〴〵起きるのである。

それに、どんな立派な溫泉かと思つたら、穢い穢い湯漕にどろ〳〵した厭な香の冷泉を沸かせるのであつた。また、殆ど毎日のやうに大雨やら大神鳴りで、正面に見える富士が滅多に見えないほど鬱陶しい日が續く。且、また、入浴客と云つたら、豫想の外で、殆ど田舍のおやぢや婆アさんばかりで——樂んで來た張り合ひがない。

かの女の考へでは、宿には同じ年輩の立派な娘が多く來てゐて、それらと仲よく遊んだり、話し相手になつたり、また自分のハイカラな姿をうらやませたりしたかつた。ところが、下にも二階にも、裏にも表にも、そんな相手は一人もゐなかつた。

隣の明いた室へ、たまに一晩どまりの客はあるが、工女に募集されて行く途中で、その募集者に自由にされる女であつたり、どこか近所の驛

から作男と密會しに來た者であつたりする。

たまに鳥渡十人並のが來たと思へば、どこかの裁判所出張所の書記といい仲になつてゐたのだが、向ふの親が許さないのを恨み歎いた女だ。それをその土地の坊さんが氣の毒がつて、女の故郷まで連れて行つてやるところだが、とまつた晩に、その二人は出來合つたやうであつた。

また、田舍の物持ちの細君らしい四十五六の、顏の見ッともない婦人が來た。これも亦怪しいものだと義雄等が云つてるうちに、甲府の醫者に違ひないと云はれる男がやつて來た。

『あんなお婆アさんでも氣色があるんだ、なア』と、お鳥はその夕かた、義雄と横になつて、足をもつれ合はせたりして、無駄話をしてゐる時に大きな聲を出した。無論、隣の客は湯へ行つて留守だと思つたからである。

面白いちやアないか、じツとしてゐて、いろんな種が拾へるのだから』
と、義雄は實際面白さうに答へた。
『何が面白いもんか、こんなとこ！　雨や神鳴りばかりぢや。』
『さうか、ね。』と輕く受けて、渠はかの女が二三日前『髮の自慢を仕合ふ相手もない』と歎息したのを思ひ出した。そして天井を見詰めながら、『まア、來たものは仕方がない、さ。』
『いやだ、いやだ』と、かの女も團扇を持つた手までも仰向けにだらり延ばして向ふを向き、『早う東京へ歸りたい――歸りたい！』
『君の書齋と家族の寫眞が雜誌に出たので、氣の毒にも、君の評判が女子大學で俄に下落したぞ。あんな子福者であつたのかと云ふので、さ。君の詩などから推察して、まだ二十四五までの色男だと思はれてゐたらしい。呵々。』

かう云ふハガキが或匿名の友人から舞込んで來た。如何に自分もいやな物でも、ある物があるのは事實で、何と云はれても隱すことは出來ない、また隱す必要もない。と、義雄は思つたが、自分の評判がそれが爲めに落ちたと聽いては、餘りいい氣持ちでもなかつた。それに、この頃になるに從つて、渠は自分のやがて四十歳になると云ふことが、老耄のその物が近づいたやうに考へられて、いやで〳〵溜らないこともある。

『一體、誰れがハガキなどに書いて來たんぢや』と、お鳥が眞ッ赤になつて怒つた時は、渠も鳥渡そのゝぼせ氣味に釣り込まれかけたが、かの女に別な理由があつた。『宿のものがもう見たに決つてる！決つてる！』

かう云つて、手にあつたハガキを義雄に投げつけ、泣き出しさうに顔をしがめ、疊に坐つたまゝ、兩肱を脇に縮め、からだ全體を燒けにゆすつた。

『氣狂ひ！見られたッて、いゝぢやアないか？』義雄はその理由を感

づいてゐないのではないが、今更見られたことを取り消すわけには行かないと覺悟して、わざと平氣で手摺にもたれたまゝ、椽がはに足を投げ出してゐた。

『いいことはない！』かの女は恨めしさうに義雄を見詰めながら、息のはづむを抑へ〳〵、『あたいが――目かけか――何ぞのやうに――思はれて――しまうぢやないか？』

『思ふものにやア思はせて置くさ。』

『あたいが詰らん！』

『そりやア』と、落ち付いて、『お前がまだ世間に對する浮氣心があるからで――世間のものが何て云つたッて構うものか、ね。お前を愛するおれにさへしッかり手頼つてゐりやアいい。』

『そんなうまいことばかり言ふても、口さきばかりだから、あかん。』

『何も』と、ほゝ笑みながら、『口さきばかりで胡麻化したことはない

よ。』
『ある！ある！妻子と別居すると言ふて、別居もしやせんし、あたいを學校にやつてやると云ふて、ちッともその手續きをして吳れせん。』
『そりやア、まだ夏期休暇中ぢやアないか？』
『休暇中から手をまわして置けばえゝ。』
『大丈夫――そんな心配はすな。』
『へん』と、馬鹿にしたやうな、また納得したやうな聲を出して、お鳥はあごをしやくつた。
『いやな癖だ』と、義雄は心で卑しみながら、椽を立つて來て、また机の前に坐つた。
　お鳥はそのまゝじッと考へ込んでゐたが、指さきに衣物の褄を卷つけながら、少し低い聲で、
『たゞさへ皆から旦那さんとは餘り年が違ひ過ぎると云はれてるの

に、そんなハガキを見られては、あたいの顔が立たん。』
『いゝ顔だから、ね』と、義雄が筆を持つたまゝその方に首を向けると、
『馬鹿！』と叫んで、かの女は渠の繃帶した耳のあたりをぴしやりと叩いた。
『よせ』と云つて、義雄は顔を引ッ込めて、痛い耳を押へ、また原稿に向つたが、此間から少し氣になつてゐたことを思ひ出した。『おれとお前とが餘り年が違ふと云ふのも、下の黒ん坊におだてられたのだらう？』
『違ふ！』お鳥はからだをゆすつて燒け半分に否定した。
『でも、ねえ――』
『違ふ、違ふ！』
下の黒ん坊とは、義雄がお鳥をいやがらせる爲めにわざと誇張した譬へで、實は東京の下谷から保養に來てゐる或會社の職工頭だとか云

つてる人だ。義雄も鳥渡會つて見た。色は黒いが、職工などには似合はすおだやかで、優しい言葉使ひをしてゐる。

所在なさに、雨の晴れ間をお鳥は裏庭へ出て、築山や樹木の間をよくぶらついた。脊のすらりと高いその姿を二階から見ると、顏の缺點などは見えないので、義雄もあの可愛い女が自分の物になつてゐるのかといふ風に、暫く默つてながめてゐたこともある。

四五日前も、渠は高い欄干に倚つて下へ聲をかけ、微笑しながら、『どこのお孃さんで入らッしやいますか』と云つて見た。お鳥は氣づいたが、それには答へないで、おほ眞面目の氣取つた態度で、丁度義雄の立つてゐた下に當る室に向ひ、椽に添つて流れる小川を隔てゝ、

『へい、ありがたう』と、云つた。まア、お這入りになればですとか何とか云ふ聲が流れの音にまじつて聽こえたとは義雄も思つたので、初めて下に客があるのに氣が付いた。然しお鳥はその以前から言葉を

まじへてゐたらしい。その後もかの女が宿のもの等と一緒になつて、下の座敷で夜遲くまで話し合つたり、笑つたりする聲が聞える度に、義雄は氣が引けて執筆の邪魔になつた。

『あの男のことを云ふと、なぜ、さう躍起になるのだ？』

『下らないことを云ふから、さ――燒き餅など、人が聽いたら、見ッともない。』

『ぢやア矢ッ張り、おれのいふことは聽かないで、夜おそくまでも話し込んでゐるつもりか？』

『さう、さ』と、ふくれッ面をして、『別に話し相手がないから。なにも、あたい獨りこッそり行くのではないし、女中や小僧さんも一緒になつて話してるのだから――』

『いや、獨りの時もあるやうだぜ。』

『無いッたら、無い！』

『さうか』と、わざと疑ひが晴ないやうな返事をしたが、これ以上かの女を怒らせるつもりもなかつた。かの女の白い肌につゝまれた神經がこの頃非常にいら〳〵して來たのを知つてゐるからである。

その夜、蓐に這入つてから、下の人はあさッて歸京すると云つてるが、『自分』も歸りたくはないかと、かの女は仰向いたまゝ義雄に聽いた。で、さうか、歸るのかと云つたばかりではなく、原稿はもう直きに書き終るが、それを東京に送つて金が來るまでは歸れないと、渠は答へた。

『然し折角知り合ひになつたのに』と、蚊帳を透して、天井を見つめながら、『もう歸るのでは、お名殘惜いやうだ、ね。』義雄も原稿が終ひになつて來たと云ふ氣のゆるみが出たので、且、耳の張れが濕布をしてゐても一向に直らないので、早く歸京して、知り合ひの博士に見て貰ひたいやうな心にはなつてゐた。

『あたい、あの人に連れて歸つて貰をか？』

『それもよからうよ。』渠は冷淡にあしらつてゐると、

『元の人に似てる、あの人は』と、お鳥は嬉しさうに鼠泣きのやうな聲をして、義雄をじらし出した。

『どこが、さ?』渠は急にかの女の方に寝返りした。

『どこが似てゐるの?』

『…………』

『云つて御覧、どこが、さ?』

『どこでもええ!』

『ねえ』と、すかすやうに向ふのからだをゆすりながら、『あの色の黒いところがかい?』

『そんなところなもんか?』と、延ばしたままのからだを振つた。

『ぢやア、痩ッこけたところがか?』

『そりや、少し痩てた、さ。』
『あのきよと〳〵した目玉もか？』
『違ふ！』
『ぢやア、あの高い鼻は？』
『知らん！』
『あのこけた頬は？』
『知らん！』
『それぢやア、分らねいや』と、とぼけた風で、『痩せてるのだけに惚れ込んだのかい？』
『何も、惚れてやせんぢやないか？』
『さうか？ぢやア、まア似たところが嬉しかつたと云ふだけか？』
『へん、お前の知つたことかい？』
『なるほど、ね』と、義雄は冷かして受けながら、下の座敷の様子が何か

聽こえて來るかと耳を澄ますと、雨に水嵩の增た小流れの音がちよろ〳〵としてゐるばかりだ。その流れを隔てて、お鳥があの男に氣取つた應對振りをしてゐた時のことが浮んだ。また、あの時と今とは數日しか違はないが、その間に氣候が變化して、夜になると、もう少し寒いやうな氣がするのに思ひ付いた。

『少し寒くなつたやうぢやアないか?』

『さう、さ――ぐづ〳〵してたら、甲州では直秋だと皆が云てた、さ。』

やがて、どこかの庭鳥が鳴いた。すると、また他の鳥もそれに應ずるのが、二三ケ所から聽こえた。

『もう、夜があけかける、ね。』

『それだから、いやになつちやう――おそくまでも、晝間中でも、勉强するのはええが、あたいを喜ばせて吳ようとせんのぢやもの。』

『然し可愛がつてゐるぢやアないか?』

『それが嘘としか見えん。』

『そんなことはない、さ』義雄は手の力をお鳥の背中までまわして、かの女をこちらへ向けてやつた。

『ほんとは、なア』と、かの女はほほ笑みながら、『目のきよろりとしたところはお前に似てるけれど――』

『へえ――』

『冷かすんなら、いや。』

『冷かしやアしないよ、お云ひ。』

『鼻と顔の樣子が誰かにそツくり、さ。』

『なるほど――さう云ふ男をお前は好きなのか？』

『好きでも、何でもない』と、恥しさうにからだを免れようとした。

『まア、お待ち』と、しツかり抱いたまま、『それで、なぜ別れたの？』

『燒餅燒きで、人をぶツたり、蹴ツたりするから、さ。』

『そりやア、ひどい、ね。』
『それに、どすか、おん坊の筋らしいので、兄が籍を入れることを承知しなかつた。』
『ぢやア、矢ッ張り、くッ付いたのだ、ね。』
『あたいからくッ付いたんぢやない。』
『向ふからでも、つまりおんなじこと、さ。』
『でも、あたいが兄のとこから學校へ通てた時、兄の友達だから時々遊びに來てた人ぢや。』
『然しお前と一つの學校を教へてゐたのだらう?』
『さう、さ——一度、他のものがみな留守の時に來て、寫眞帳など見せたら、あたいのを一枚拔いて持つて行つたことがある。』
『その時、出來てしまつたのだらう?』義雄のあたまには段々その男

の樣子が浮んで來た。
『違ふ！』かの女は笑つて否定しながら、『まだ父が重病でも生きてたから、よく相談して見て呉れと云ふただけ、さ。』
『分るものか――然し父は承知したのか？』
『父は承知したけれど、兄が許して呉れなんだ。』
『それで、どう〳〵待ち遠しくなつたのか？』
『でも』と、微笑してからだを離れさせようとして、『兄は頑固な人だから。』
『兄は兄としても、第一、小學校でやかましかつただらう？』
『だから、あたいが辭職して、その人と家を持つた、さ。』
『どんなところに？』
『人の二階であつたけれど、町はづれの海の見えるとこで、なか〳〵景色がよかつた。』

『そこで乳くり合つてゐたのだな──それにしても、二年間も一緒にゐて、どうして別れた。』

『兄が承知しないと云ふてるぢやないか？』

『どんなに戸主が頑固だつて、本人同志が好合つてゐたらいゝぢやアないか？』

『では、自分が田邊のやうなとこへ行つて御覽。小學教員などをして、あんなとこに一生暮す氣になるか？』

『そりやア、さうだね』と、義雄は受けて、かの女の云ふことも尤もだと見たが、この位の低い程度の女として都を憧憬して來るのはそも〳〵反逆心があり過ぎると思つたので、『然しその跡に殘つた教員が可哀さうぢやアないか？』

『そりや、泣いてたさ』と、得意さうに、『あたいが汽船で出發した日の朝まで、一晩中、おめ〳〵と聲を出して泣いてた。下の人に聽かれても、

見ッともなかつたぢやァないか？』

『それで、歸つて來いと云つては來ないか？』

『一度來た、さ。』

『いつ？』

『鎌倉から歸つて見たら――けれど、返事をやらなんだ。』かう云つて、お鳥は、疑ひ深い而もその疑ひがきッと本統だと云ふ氣持を以て語つた。その男は、もう靜子と云ふ女敎員と一緒になつてゐるに相違ない。歸れといふ手紙を先づ靜子からよこさせて、こちらの腹を探つて置いて、もう大丈夫と思つたから、男から申しわけに今一度思ひ返して吳れろと云つて來たのだと。

『あのおん坊め』と、お鳥もます〳〵神經が冴えて來た。『人を馬鹿にしてるぢやないか――自分は元からその女の機嫌など取つてをりながら、あたいが鳥渡でも他の男と話しでもしてると、直燒き餅を燒いて、二

階では下の人に聽こえるから、あたいを外へ連れ出して、何ちや乎ちや責めてた。』

『可愛かつたからだよ』と、義雄は自分もしさうなことだから、自分を辯護するやうに答へた。

『でも、あの女は、もう一生、小學教員のおかみさん、さ——あたいはこれでもどんなえゝ人の夫人になるかも知れん。』

『おれの夫人なら、いゝぢやアないか？』

『へん』と、あざ笑つて、『お前のやうな貧乏なおぢイさんには、あたいのこの顏に面じても、惜し過ぎる。』

義雄は、お鳥のにこ付いてゐるのを無邪氣と見れば無邪氣のやうだが、自惚れにも、この顏を看板に何か出世が出來るとして、實際、再び東京へ出て來たのかと思ふと、いつかもさうした心持ちになつたと同じやうに、吹き出したいほどをかしくなつた。

然し義雄は、お鳥の眞ッ白な肌のにほひに接してゐる間は、かの女の氣儘も缺點もいやなところも、すべて忘れることが出來るのである。

その夜は、どうしたものか二番鳥、三番鳥が鳴いても、二人とも寢つかれなかつた。義雄がかの女を賺して田邊の話しの殘りを云はせたり、此間からの雨でまた去年のやうな山津浪が來るかも知れないといふ評判を語つたりしてゐるうちに、夜が明けてしまつた。

便所に行つて來てから再び枕に就くと、義雄はお鳥の話しからその夫であつた人の怒つたり、泣いたりしたと云ふ人物や境遇を想像して見ながら、ぐッすり寢込んでしまつた。すると、夢に月夜の海濱でお鳥が一人の男と頻りに喧嘩をしてゐる。その男が敎員だと思つてゐると、いつの間にか、仲直りをして職工に變つてしまつて、睦じさうに散歩する二人の影が砂の上にはッきりと曳かれた。

こちらの二人が目のさめたのは晝過ぎであつた。その翌日はまたおほ雨で、ひどい稻光りと神鳴りとがまじつてゐたが、下座敷の職工がしらは出發した。

『あんな短い保養で、どんな病氣だつて癒るものか、ね？』

『でも、いのちが惜しかつたら、どうする？』

『その時アその時、さ。』かう云つたが、義雄はこのやうに雨の多い土地のことや、現在もどん／＼降つてゐて、裏の小川があふれ出したことなど思ひ及ぶと、甲州一體に於ける去年の大洪水の新聞記事や、汽車の窓から實見することが出來ると云ふ悲慘の跡を、晝間でも戸を締めて引ッ込んでゐる室内で再び考へないではゐられないのである。

鐵橋の破壞。田地、道路、家屋、人畜の流出。山麓のすべり出し。大岩石の移轉。川流沼澤の滅却、奇變――笹子トンネルの向ふへ越えたところには、その高さ十間ほどもあるおほ岩が、川でもないおほ川跡の眞ン

中に、或神社の流れ出たのともろ共に、驚くほど無造作にころがつてゐるさうだが、それは二人とも夜通つて來たので見ることは出來なかつた。

また、或郵便局長は、その山津浪だと聽いて、直その妻子のからだにその氏名を縫ひつけかけたが、そのひまさへも無く、谷を破つて溢れて來た水は、猛烈な響きと共に、その家族ばかりではなく、すべての家も田地も村も川も、またゝく間に、すべて卷込んでしまつたと云ふ。

この鹽山は無事であつたが、歸り道を斷たれた入浴客の食料までが不足になつてしまつたので、心配性の人々は汽車の不通なのにも拘らず、危險なトンネルをくゞり拔けて、途中まで歸つて見たさうだ。

『あたい早う歸りたいなア』と、お鳥はおほ稻光りのひどい屈曲が雷の直鳴りと共に雨戸を漏れて這入つたのにおびえながら、『若し去年のやうになつて、歸ることが出來んし、金も來ないと云ふことになつた

ら、どうする？』

『さう心配するなよ。』

この間にも、義雄は原稿の最後の方を書いてゐた。

やがて空はけろりと氣嫌が直つた。女中が來て戸を繰明けるに從ひ、義雄がぱッぱと吸つた卷煙草の煙のこもつたのも消えて行つて、お鳥の心配さうな顏も晴れて來た。

氣が付くと、お鳥は一枚の名刺をいぢくつてゐる。

『歸つた黑ん坊のだらうが』と、義雄は少しむかついて、奪ひ取りの手を出しかけた、『そんな物アうッちやつてしまへ。』

『でも、お前をいやになつたら』と、かの女はその名刺を取られまいとするやうにかばひながら、然しほゝ笑んで、『また尋ねてやるかも知れん。』

『そんなさもしい考へは、うそにも起すものぢやアありません。』渠は

人を敎へるやうな眞面目な態度になつた。

十一

『名産の葡萄が、もう、充分喰へるやうになりましたぜ』と云つて、宿の主人が一盆自慢さうに持つて來た日に、『耽溺』の原稿は郵便局へ渡された。

どうせ、長くなるとは豫期してゐたから、初めから雜誌を當てにせず、單行本にするつもりであつた。で、東京出發前に鳥渡その意を通じて置いた出版屋へかけ合つて貰ふやうにと云ふことを手紙に書き添へて、或友人へ送つたのである。

若これの談判が作者のゐない爲め、またその他の理由で、手間取つては困ることになると思つて、別にあひま〳〵に書いた雜誌向きの短篇も、既に東京へ郵送されてゐるが、ぐれ違ひのない爲め、なほ二三の小論文も書く〳〵つもりでゐる。でも、兎に角、義雄は一つの大きな重荷をおろ

したやうな餘裕が出來た。
『少しはあたいを連れてどこか散歩して呉れたらええちやないか』
と、お鳥に促されて、渠は一緒に宿を出た。直田圃の方へ行かうとすると、かの女は微笑しながら、低いが決心した聲で、『人のをる方へ行こ。』
その意味は義雄によく分つてゐた――かの女は東京にゐた時も同じだが、自身を人に見られて、ハイカラさんだとか、別嬪、別嬪だとか、いい奧さんだとか、いろ〳〵賞められたり、冷かされたりして見たいのである。
かの女は澄まし込んで義雄の跡から付いて來て、骨つぎやの看板を讀んで見たり、細工やのくり拔きおもちやを見たりした。橋のところでは、此間まで川ぷちを崩してせツせと新らしい鑛泉を掘拔いてゐたのが出水の爲めにさん〴〵になつた跡を、立ちどまつて、暫らく見てゐた。
鳥渡した坂の、水で掘崩れて、大きな杉や檜の木の根が現れてゐるの

を登ると、氷屋がある。葛餅屋がある。宿屋、薬屋、床屋、八百屋、時計屋などがある。葡萄ばかりの安賣り店もあるが、酸ッぱさうな野種のばかりで、まだうまひ西洋種のはなかつた。

時計屋で水晶細工を並べたところがあつたので、そこへ立ち寄つて、いろんなのを見せて貰つた。鹽山の奥から掘出して來るので、白水晶、黒水晶、紫水晶、草入り水晶などの置き物や印材がある。草入りのうちには、大抵、小さい薄の穂のやうなのが這入つてゐるのだが、『これ買うてお呉れ』と、お鳥が義雄に出した印材には何千年か以前の水が包まれてゐて、位置を換へる毎に、その水があッちへころり、こッちへころり動くのである。それは却々價が高いので買へなかつたが、紫水晶の小材にお鳥の姓清水を刻して貰ふことにして、そこを出た。腹具合が惡いと云つたお鳥は、一番大きさうな薬屋でヘルプを買つた。義雄はまた筆を買つた。

たッた一筋の通りは直に別な通りにつき當つた。それを左りに行けば直鹽山ステーションで、片側は桑畑、他の側の家並は多く飲食店で、ところどころの二階からはあやしげな女が首を出してゐた。三味線の音も聽こえた。

この通りを元來た方に曲らないで、眞ッ直に少し行くと、人家は盡きてしまう。

『どうだ、滿足したか』と、義雄はお鳥を返り見た。

『みな、あたいを見てた、わ』と、かの女は喜んでゐた。

それから、稻の間を拔けて、鐵道線路にのぼると、青い田を隔てゝ、向ふに海老屋の裏二階が見えた。

『誰かまた違たお客が來たやうだ』と叫んで、お鳥のいい目はあの二階に立つてゐるのが小僧でもない、女中でもない、宿の主人やおかみさ

んでもないと嬉しがつた。

『そんなに他のものが戀しいのか』と云つてやりたかつたが、義雄はさし控へて線路を向ふへ降りた。そして、かの女と手を引き合ひながら、また稻の間の畔道を縫つて歩いたり、筆の軸の長さほどもない小幅の流れの小さい田螺を――お鳥の毎年起きる脚氣の藥だと云ふので――拾つて見たりして、宿へ歸つて來た。鹽山から富士連山の麓まで、平野は一面の青田だ。そして、その稻穗草がどこまでも涼しい風に目ざましい綠の色を浪打たせてゐるのが、お鳥と手を連ねた義雄の心に如何にも深く若々しい感じを湛へさせた。

それを海老屋の裏二階から見渡すと、宛で瑠璃色の海だ。そのおもてへ逆しまに、南の空にそびえて無言、沈默の輪廓を畵がく富士の峰は寂しく映るが、戀の最も手ごたへある姿はなぜ出ないのだらうと義雄は考へた。お鳥が自分にまだしんみりと親しんで來ないのが、どうも

底の知れない不安のやうで、行けない。

『どうだ、お前はおれの胸に全く浸つてしまうほど可愛がられたくないのか？』かういふ風に渠はかの女の感情を誘つて見たこともある。

『やアだ』と、かの女はとぼけた顏をしたが、頰には薄紅の色を潮して見せた。渠はまたそのあどけない樣子を見ると、ただ、もう、可愛いやうな、嬉しいやうな氣になつて、自分の不安な戀を反省することもうち忘れ、新たに書き出した原稿机の前にあぐらをかいたまゝ、手を延ばしてかの女を引き寄せ、そのやはらかい頰ッぺたに接吻した。

餘り力強く押し附けたと見え、渠のおとがひ削つた濃い頰ひげの生えかけがかの女の肌をきつく刺した。

『痛い、痛い！』お鳥は思はず大きな聲を出して、渠の卷く手から免れたが、白い手を返して、『このおやぢ』と、無意氣に義雄の長く反り返つた口髯を引ッ張つた。

『痛い！』義雄も身顫ひして大きく叫んだ。

互ひに離れて睨み合つた目には、兩人ともその場の突然な怒りが燃えてゐた。

『ひどいことはすな！』

『あたいだツて、痛かつた。』

『ふ、ふん』と二人はまた笑ひ合つた。

が、その笑ひは二人の心を結び合はせたのではなく、互ひに輕蔑し合つたやうなものであつた。

渠もかの女も共にふくれツ面が直せない。で暫く互ひに顔を見ないで、默つてゐた。

すると、お鳥は突然嬉しさうな頓狂聲を出した、

『お客が附いた、お客が附いた！』

義雄がふり向くと、かの女は渠の煙管の雁首に吸つて、はたいた吸ひ

殼の殘りが、まだ煙を出して一二本の條でつる下つてゐるのを示めしてゐる。

『何んだ、馬鹿な！』渠もにツこりして、『どこでそんなことを覺えたのだ？』

かう云ひながら、渠はかの女が北海道の或町で、金貸しの父と共に、藝者屋の間に育つたのであると云ふ話を思ひ出した。

お鳥は、毎日のことが單調なのと出水があるかも知れないと云ふおそろしい評判との爲めに、東京ばかりが戀しくなつて來た。で、來さへすれば歸れるのだと思つて、原稿の金を頻りに待つてゐた。

ところが、義雄の友人から中身の這入らない手紙が屆いて、あの長篇小説は二三軒當つて見たが、どこでも受け付けない事情が分つた。出來ない前から本屋の評判になつてゐたのであつて、出せば必ず發賣禁

止だらうとあやぶまれてゐる。方々の本屋へよく出て行く小泉笛村君にも頼んであるから、なほ、いい首尾があつたら報告するが、當てにはすなと云ふことが書いてあつた。

『それ御覽！どうするつもり』と、お鳥は泣き顔になつた。

『どうもしない、もッと書くのさ。』かう云つて、義雄はおもてに元氣を見せたが、胸は氷の刄を擬せられたやうに情なくなつた。

宿の帳場からは、一週間毎にする勘定の催促も來てゐる。渠も亦最初に郵送した短篇の方の原稿料を電報で催促しないわけに行かなかつた。

或日のゆふ方、空はみッしりと曇つて、目に見えない雨が降つてるかと思ふほど濕ッぽく鬱陶しい欄干にもたれて、お鳥はじいッと外を眺めてゐた。そして富士の姿が全く見えないやうに、自分の現在もどうなるのか分らなかつた。

自分の不愉快な心はこの重い空氣にも浮ぶ力がない。義雄の胸に全く浸れと云はれたのは嬉しいやうにも思はれたが、本統の戀でも愛でもないかの女には、ここの空氣と同樣、底の知れないおそろしさが先きに立つ。

田の中の牛小屋からは、相變らず厭な聲が『もう、もう』と下這ひに響いて來る。

『青い田が海なら』と、かの女は義雄の云つた譬を思ひ出して、『あの牛が水牛だろかい？』

『さうだ、ね』と、義雄は筆をとどめて、目を外に放つた。

立つてゐるものにはただいやで〳〵堪らないものと響く聲が、坐つてゐるもの——而も片々の耳が殆ど全く用を爲さないほど痛んでゐるもの——の心には、深い水門の底に沈んでゐる釣鐘のうなりが聽こえるやうだ。

蒸し暑く息詰つた空氣—沈鐘の響き—滿足しない戀の恨み—かうした考へを渠はその一身に引き纏めて、暫く目をつぶつて自分自身を反省して見た。

『もう〳〵』と云ふ、お鳥の所謂『水牛』の聲は、一匹や二匹のことでないから、朝も晝も、晩も夜中も、つゞけざまに聽こえた。

その牛小屋に遠くないところで、夜になると、必ず一つのあかりが付く。ランプの光りだらう。それがお鳥を離れた時の義雄の心に、一つの慰めを與へることもある。それが渠の寂しいやうな、薄暗いやうな、底の知れないやうな心に、たッた一つの味方となることもある。

濕つた夜氣にまたたいてゐるこのあかりは、ゐ据わつてるのだらうが、動くやうにも見える。見つめてゐると、また大きくなつたり、小さくなつたりするやうだ。

恰も消えない露—日輪の光を晝間から一身に吸ひ込み、

目くらの夜を澤市の妻となる氣だらう。

と、かう、義雄は自分の詩に歌ひ込んだ。

　然しその無言なのが一層寂しい。あれが若し優しい聲でも出して呉れたらと渠が思つた時、何か求めるやうな牛の聲がした。それを渠は今見詰めてゐた田の中のランプの出した濕ッぽい聲のやうに聽き爲して、にッこりした。

　ランプと聲、慰めと求めとが一つになつて、戀と不滿とが合體の氣分になつた時、渠はお鳥をそばに返り見て、自分の腹わたが煮えくり返るやうな熱情を取り押さへながら云つた、

『僕が若し全くつんぼにでもなつたら、鳥ちやんは僕の耳になつて呉れるだらう？』

『大丈夫だ、わ。』かの女は、義雄の書齋や家族などの寫眞が出てゐる雜誌をいじくりながら、ただ曖昧な返事をした。

歸りたいとばかりあせつてゐる。お鳥は、最初の短篇に對する金が電報爲替で來ると直ぐ、獨りで歸京させて貰つた。思ひやりのない女だと義雄は少しいや氣もさしてゐたからである
が、また若いもののことで、一圖に歸ると思ひ込むと、その方にばかり心が行つてしまうのだらうとも思ひ直した。で、自分は獨りで相變らず思索と筆硯とに親しんだが、氣になるので、跡から出來た短い原稿二つに對しても、どうか早く送金をして吳れるやうにとまた催促の電報を出した。

水々した稻の田の面を、汽車が往復して、その度每に白い煙を殘して行くのが、今更の如く目に付くやうになつた。ぼんやりと手摺に倚りかゝつたり、寢ころんだりして、その貨車や旅行客車の通るのは何十分置き每だらうと勘定して見る氣になつたこともあつた。然しその回

數を一イ、二ウ、三ッとまで數へないうちに、渠はモルヒネでも嗅がされてゐたやうにかの女の戀しさで氣が遠くなるやうな氣持になつた。

かの女のゐる時は左ほどでもなかつた田の中の散歩を、一緒に今一度やつて見たいやうな氣になつて――思ひ出すのは渠ののぼせた耳元へかの女の熱い息がかかつた時のことだ。お鳥は、或日暮に、畔道を歩いてゐて通りすがつた一人の田舍者を闇に挑發して見せるかのやうに、義雄の横顔へ熱心な接吻を與へたことがある。

『浮氣ッぽい女だから』と思ふと、渠はまた、ふと今まで氣が付かなかつた疑ひに包まれた。

『お鳥はあの足で下谷の職工がしらを尋ねて行きやアしなかつたか知らん？』

夏期休暇も殘り少になつた上、渠の教へる學校の入學試驗を手傳ふ約束の日がこの五日に迫つてゐる。然しそんなことは、もう、どちらで

もいいのだ——かの女が何をやつてゐるか分らない。たとへ自分は嫌はれてゐたとしても、あの白い肌が今では自分の物だと云ふ形になつてゐるからいいやうなものの、一度でも他の男の手に觸れたら——足に觸れたら——毀れた人形も同樣、最早自分の愛情をそれに傾注することが出來る望みは全くなくなるのである。

『ああ、かうしてはゐられない』と、渠はいら〳〵し出した。が、その失はれた心の落ち付きを迫めて無理にも取り返すつもりで、今書きかけてゐる議論——それは藝術と實行とは合致すべき物だと云ふ證明——の筆を轉じて、かの女を慰める手紙を書いた。

『九月二日、鹽山發。鳥ちやん白い鳥ちやん、また手紙を書きます。笑つては行けないよ。あなたのゐなくなつてからと云ふものは、ね、手紙でも書いてゐなければ、僕の急に寂しくなつた心が落ち付かないのです。前便に、もう蚊帳を奪はれたと云つたでしよう、それがまたきのふ

から僕等の室に障子まではまつたのです。甲州の氣候と云ふ失敬な變人が、何だか、もう僕にも早く歸れと云ふやうな取り扱ひをするではないか？歸れなど云はれなくても、僕は歸るに定まつてゐる。早く歸つて鳥ちやんの顏を見なければ、僕は心が落ち付かない。爲替が來次第、直ぐ歸るから待つてゐて下さいよ。その代り、僕を信じて僕の云つたことを守つてゐて下さい。他の浮氣女のやうに、獨りで性質の分らない男のところなどへ行くことは、決してなりません。分りましたか？『耽溺』出版の件に就いては、どうせ僕が歸京しなければ埒が明くまいが、なほ、鳥ちやんからも笛村君の方の樣子を聽いて見て貰ひたい。あなたの出發の時は宿の拂ひの爲めに土産を買つて行く餘裕もなく氣の毒であつたから、僕の時はうまい葡萄を持つて行つて、下の人々にも分けてやりたいと思ふ。先づそれまでは心と心―鳥ちやんの、白鳥の樣に白い鳥ちやんの笑つてる顏が見えるやうだ。可愛い人へ、義雄。』

渠にはなほ別な疑ひが絶へなかつた。それは紀州の男に就いてだ。お鳥がこちらから聽いた時は怒つて碌に答へをしなかつたことまでも、つい寢物語りの調子に乘つて語つてしまつたのだとすれば、あの別れた時の事情が本統であるかも知れない。が、あれは小說家のそばにゐて、かの女も亦自分の小說を作つてゐるのだと受け取れないでもない。

かの女を知つてからのことで考へても、誰れ某が自分にいやな目を使つたとか、あの人が自分を口說いたら承知したやうな風をして見ようかとか、そんな空想を畫がいて嬉しがつてゐる女であることは義雄にも分つてゐる。

ひよッとすると、さきの男と內約でもあつて、いづれ男も出京するから、それまで何とかして生活してゐろと云はれて來たのではないか？

『手紙が一度來たさ』とかの女も云つたのは、その手筈が出來かかつた知らせであつたのかも知れない。

男が時機を待ち切れなくッて、田邊を辭職してしまつたのではないか？お鳥があせつて歸つたのには、既に打合せが出來てゐたのではないか？兎に角、その男がもう出て來たやうなことであつたら、何うする？馬鹿を見るのは自分ばかりだ。

『さうだ、おれはどうしても早く歸らなければならない。歸つて、あの女の虛榮心が強いのに付け込んででも、暫くは、おれの手にかの女を取り入れて置かなければならない。』かうあせりながらも、ただ待たれるのは爲替だ。

例のやうな雨や神鳴りは稀になつて、この二三日來、田を渉つて來る風が急にひイやりして來た。降る雨も秋さめの調子を帶びたのは、渠の寂しく見棄てられたやうな氣持ちから、さう感じられるばかりでは

ない。盆にのぼる葡萄が、實際にうまくなつた。

『おれは、然し葡萄の熟するのを待つてゐるのではない。』渠はこんな警句見たやうな言葉を、不平の代りにこぼしても見た。

兼て聽いてゐた通りの氣候の急變―送金の待ち遠しさ―手放したお鳥に對する疑念―かう云ふことが渠のからだ中の神經のどの末端にも觸れて、手のあげ下しも心配なら、足を投げ出すことも不安になつた。

きのふまでは親しみのあつた室が、何だか丸で初對面のやうで、柱の姿見に映る自分の顏も、濕布の繃帶をしたまま、他人か何ぞのやうに痩せてゐる。

『お鳥が去つた跡へ、秋の景色が自分の心にまでも舞ひ込んで來たのだ。』かう云ふ氣持ちになつた渠には、もう障子がはまつて室内の闇に吊されてゐるランプが田の中の一つ火に見えて、牛の叫びまでが、渠自

身の腹わたから、

『本統に可愛いの』とお鳥が云ふやうに聞えて來る。

『この通りだ』と、胸に押し付けようとしても、渠の左右には何の手ごたへもない。また、愛する匂ひも、あツたかい氣はひもしない。

不必要になつた蚊帳は奪はれて、寢褥は廣々したにも拘らず、渠はその不安なからだの置きどころがなく、眠らうとしても眠られない自分を持てあました。

明るい目さきには、いまくしくも、よそくしいお鳥の姿がちらついて、かの女に對する自分の忿怒やら鬱念やらがかはるぐ飛び出して來る。うるさいから、火を吹き消すと、また自分は闇の床を拔け出て、軒から直下へ飛び降り、そこの流れに添ふて、思ひ出の多い田の中をまごついてゐる。

心の手を以て妄念を拂へば拂ふほど、目ざとい疲勞がますく目覺

めて來るばかりだ。

闇の中を見入つてゐると、末も分らない今も分らない一條の黒い道を、黒い影、喪服を着て通る影、無言(渠は半つんぼだ)沈默(渠は物を云ひたくない)、悲痛、苦悶、死などの靈がうつ向いたまま、しく／＼泣いて通つて行く。

義雄は考へた――よく／＼寂しいと云ふことを覺えたのであらう、誰も相手にするものがない。渠等とても、その前世では世の人々の爲に絶叫し、柘榴の明いた口の如くその意見も吐露し、最も武勇な戰士の如くその議論も戰はしたのだが、相手が物が分らないので根氣負をして、喪服を着けたのだらうと。この心持ちは、先輩もない、後輩もない、身一つの渠自身にはよく分つた。

それがまた一人減り、二人減り、三人四人減り、黒い道の黒い影は、草葉

の露が朝日に當つたやう、みんな無くなつてしまつた。

では、もとの通り目に見えない黒光かと云ふと、さうでもない。死と云ふものが渠等をすべて呑み下し、一度生れた兒をまた呑んでしまう鬼子母神の腹のやうに、秘んでゐた死の影が段々と大きく脹れて來て、渠の心の闇と合した。

『あ、その闇は僕自身だ』と渠が氣づくと、眞ッ暗な死は矢ッ張り戀だ。鳥ちやんの亡くなる時だと思はれて、それがあまいやうな味を渠のからだ中に傳へた。『僕はあれの死ぬまであれを愛してゐたいやうな氣がする。』

かう云ふ風で、夜は如何にアブサントを飲んでも却つて眠られず、晝間十二時までも一時、二時までも眠つた。宿のもの等は全く渠に對する信用を置かなくなつて、金が來ないので燒けを起してゐるのだと云ひ合つてゐた。

こちらからお鳥に對して長い手紙を三つも出してから、やうやくかの女から無事安着の通知が來た。が、ただそれだけを書いたハガキであつた。

『畜生！どうしても早く歸らなければならない。』かう、渠は力んで見ても、宿の爲めにおのづから人質になつてゐる姿であつた。然し渠の心には、女に會ひたい情ばかりが燃えてゐた。

渠の日記帳には、

何時また會はれよう——もう、二三日——
千萬年も隔つてゐるやうだ。

こんな詩句も出たし、また、

君がゐないと歌はいくらでも出來るが、
さて、僕はいつまでも君と離れてゐたくない。

かう云ふことも歌つて見た。お鳥やら、東京やら、著書の出版やら、待遠

しい原稿料やら、かの女に對する疑念やら、宿屋の冷遇やら、こんなことがすべてごッちやになつて、渠のあたまをかき亂す時は、實際、持ち前の執着癖を詩の世界にでも向ける外仕方がなかつた。

今迄晴れてゐた空が午後から曇つて
富士の方面から段々の大風雨
雨はちぎつて投げる樣—おほ神鳴りも聽える。
急がしい雨足は四方の山々を閉す
宿の女中共はまだ時でもないのに雨戸を締める。
晝間を殆ど眞ッ暗な闇
之を時々破るのは大稲妻の屈折—
ぴかり、ぴかり！
また、ぴかり、ぴかり！
その明滅の間にしか

萬物と僕等との生命はなかつた
然し戀の續く如くこの嵐も續いて
本統の夜になつた時は、まこと僕等の世界だ
嵐は二人の枕元に響いて
物凄い奈落の眠り(これが戀の心だ)を實現した
宇宙萬物を無にした妖女は鳥ちやんだ。
影も形もない肉のあッたか味、
之を抱擁する心には底がない。

『素ッぽかしても氣の毒だが』と、義雄が思つてゐた約束の試驗手傳ひ日も遂に過ぎてしまつた。『あの鹿爪らしい校長や校長派の感情をまた損じたに違ひない。』

然し、もう、學校の講師などはどうでもいい。自分は自分の思ふ通り

にやつて行つて、敎育界からは勿論、文學社會からも見棄てられたところで、その時はそれまでのことだ――

學校の校長などと云ふものは、ただその地位を大事がつて、兎角、事勿れ主義をやつてゐるものだ。生徒の實力啓發など云ふことは、その實、第二、第三の問題にしてゐる。そんな内實を知らないで、世間體をばかりつくろッてゐる創立者や常任理事は馬鹿な奴だ。あの學校の理事は圓滿主義を以て男爵になつた人だ。それも惡くはない。あの創立者は天秤棒の魚屋からわが國有數の御用商人になつた。それもえらいと云へば云へる。そして、わが國や朝鮮に自分の名を冠した學校を二つも三つも建てて、それで男爵を贏ち得ようとする。それも貰へれば結構だ――

　ところが、學校は男爵を貰ふ用意の看板だけで、敎育その物は殆ど全くどちらでもいいに至つては、あの拾五萬や三拾萬や五拾萬の金をた

だその土地や建築物が代表してゐるに過ぎない——

『いや、そんなことはどうでもいいのであつた。』かう義雄は思ひ返して、自分はただ自分の主義と主張と自己の存在とを確めさへすれば、と、机の前にしよんぼりと畏まつた。そして自分の一生懸命に努力した著作が斯く世間で持て餘されるのに憤慨した。

この最後の憤慨の爲めに、つい、お鳥のことなどは全く忘れてゐた日であつた、待ちに待つた論文の原稿料が揃つてやつて來た。

『旦那、二つも爲替がやつて來ましたぜ』と、宿の主人が嬉しさうにそれを持つて義雄の寢てゐるそばへ來た。

渠は數日來失つてゐた氣力を一時に回復して、直床を跳起きた。そしてまだ正午に少し前なのを見て、たッた十五分に迫つてゐる汽車で出發することにした。

『ぢやア、ね、早く車を一臺呼んで下さい。』

『へい、畏まりました。』

主人は急いで二階を降りて行つたが、義雄も手早く革鞄に手荷物を纒めた。押し入れには、アブサントの舶來瓶の明いたのが二本ころがつたばかりになつた。渠はそれを二本ともわざ〳〵横手の窓から下に投げたが、小川の縁の石垣に當つて、かちやんと毀れたのを見て、この甲州といふ冷淡な敵に復讐をしてやつたかのやうに氣持ちよく感じた。

恥辱の旅――孤獨の宿――富士の高い峰が雲霧の間に見え隱れして、萬人の靈までも呑み下す殘酷な大奧津城の如く臨見、壓迫する最も憂鬱な土地を、義雄はかう云ふ風にして逃げ出すことが出來た。

土産はただはち切れさうに熟した葡萄の一籠――この粒立つた葡萄の實にお鳥の張り詰めた血の若々しさを偲びつつ、渠は僅かに目ざした汽車に乘ることが出來た。

中央線のトンネルだらけは、夜汽車でやつて來た時も物凄くあつたが、義雄が今度鹽山の方から笹子トンネルを拔ける時、がッたんがッたんと狹く籠つた大きな音に、渠の賺して眠らせて來た死が果して怒り出して、追ッ驅けて來たかのやうな怖ろしい壓迫を、七八分間も受た。

八王子へ來て、武藏野の廣く開けた野面を見た時、渠は、もう、目的の女の微笑する顏が見えるやうに、初めて人間らしく生返つた。

十二

義雄の名義で二階を借りた家の主人――原口淸造と云ふ――は、義雄等の旅行中に鄕里の方から歸つて來て、留守居のものを非常に叱り付けた。
『おれに相談もしないで、何でまたそんなものを引受けたのだ？』
『でも』と、お政と云ふお鳥と同年輩の下女代りは意外さうに答へた、『借り手があつたら、貸せと聽いてたから。』
『そりやア、さう云つて置いたが、そんなものは行かん。』
『わたしもどうせうかと思つたから、潔さんと相談したのですが、かまうまいと云ふから――』
『潔も潔だ――もう、中學三年にもなつてゐながら、一般道德に反いた女など穢らはしいと思はないのか？』
『でも、田村さんは』と、父の顏を窺ひながら、『お父さんのお友達です

からよからうと――』
『田村は友達だから』と、一層勿體らしく、『おれがゐたら忠告して、そんなことをするのは止めさせる。』
『ぢやア』と、潔はわけもなく、『斷つたらいいでしよう。』
『無論だ。』
『折角』と、お政は思ひ切り惡さうに、『わたしの話し相手が出來たと思つたのに――』
『馬鹿！　お政は、人の妾などと話しをして氣持ちがいいのか？』
『そりやア、いいこともないけれど――』
『それに、おれが田村の細君に對して年甲斐もないと云はれるのが面白くない。』から云つて、清造は自分の或息子が仕樣のないことをしたかのやうな迷惑を感じた。
渠は義雄と同じ學校の漢學講師をしてゐたが、老朽の爲めにやめら

れた後、鄕里の田地を融通して、谷町に二三の借家を建てた。且、細君には逝かれ、若い家族は潔の外皆鄕里に行つてゐるので、親戚からお政を賴んで來て臺所をやつて貰つてゐる。

『おい、潔、田村を呼んで來い。』

『またお父さんは酒を飮みたいんでしよう。』

こんな風で義雄をいい話し相手にしてゐた渠には、義雄が女を連れ込んで來たのが、その實迷惑も迷惑だが、また老人としての寂しさを同情して吳れないと云ふ恨みにもなつた。

『田村も思ひやりのない男だ、なア、おれは女房もなくて困つてゐるのに、自分ばかりいいことを見せつけて』と、渠が言葉の調子を變へて語つた時、そばで困つたことをしてしまつたとびく〳〵してゐた若いもの等も聲を揚げて笑つた。

『然し、まア、いい、さ。出來たことは仕方がないとして、あいつ等が歸つ

て來たら、その女にも臺所の手傳ひをして貰へばいい。さうしたら、お政も助かるだらう？』

『そりや、さうして貰へば』と、お政も喜んだ。

かの女は田舍の或漢學者の娘で、もつと勉強させて貰ふつもりでここへやつて來たのだが、下女同樣の仕事ばかり急がしくて少しも本統の約束を實行させて貰へないのである。で、事情は違ふとしても、お鳥の有望なのを羨ましがつてゐる。

そこへ、お鳥が獨りで先づ歸つて來たのである。

清造はお鳥の歸つた日に、直、かの女の事情を女として不心得だと云ふ意味で說法して聽かせた末、それでもなほ田村がここへ置いて吳れろと云ふなら、うちのお政の手傳ひもして貰ひたいと、圓滑にだが、その希望を述べた。

『はアー――』と、お鳥はただ曖昧に答へて、心では、『誰れがそんな下女同前なことをしてやるものか』と云ふ反感を起した。

『あのおやぢ』と、お鳥は自分の部屋で清造のことを呼び棄にして、その夜、お政と二人でこそ〳〵話をした。お政からは清造に對する不平談が出たが、お鳥はかの女を羨ましがらせるやうに義雄と共にした旅行のことを話した。その癖、床に這入つてからは、田邊で別れて來た男のことが新しい事實のやうに思ひ浮べられた。

翌日は、笛村を訪問し、『耽溺』の出版がとても六ケしいと云ふ報告を聽かせられた上、朝起きた時から晩に至るまで、お政がかの女自身の水仕事までも自分に分たうとする樣子を不快で不快で溜らなく感じて、成るべく避けてゐた。

『こんな事情になつてるから、人が皆馬鹿にするのだろ』と、かの女は自分の現在が心細くなつた。

『お鳥さんは氣取つてるのだ。』かう、お政が失望して云ひ付けると、
『なァに、田村が歸つたら注意してやる』と、清造は慰めた。
お鳥は、家の人々の樣子が冷淡なのに接すると、清造が歸つて來たのが行けないのだと思はれ、早くどこかへ轉宿したくなつた。
それに付ても、待たれるのは義雄だ。第三夜の床では、もう、渠をばかり戀しくなつた。そして、旅行中のことが初めてしんみりと考へられるやうになつた。
熱が俄に出て晝間から床へ這入つた時、渠は書き物に忙しい中を溫泉附近の醫者を呼びに行つて呉れたり、氷を缺いて呉れたり、一晩中、よく介抱もして呉れた。そして、その熱が取れてからも、溫泉へ二三日目に這入る時、女湯の方へ來て、自分でこの弱つたからだ中を洗つて呉れた――
人は目を圓くして見たり、笑ひ合つたりしたが、それを心にもとめず、

親切に取扱つて、衣物まで着せて呉た――『實にありがたい人だ』と思ひ込むと、そばの空席からあツたかい匂ひが聽こえて來るやうで、ちゆツとそれに接吻の眞似をした。そして、あの耳の張れは直つたか知らんと云ふ心配が出た。

潔さんは、もう、學校へ行く支度が出來たと云つてるのだから、あの人の學校もやがて初まるだらう。後れないやうに早く歸つて來ればいゝのに――

ひよツとすると、跡の金が澤山來たので、獨りになつたのをいいしほに、浮氣でもしてゐるのではないか知らん？こちらを可愛がるのは、たゞ、ほんの、女好きであるからで――かう離れてゐれば、こちらのことなど全く忘れて、誰れかいい女のお客さんでも隣の室へ來たのを、自分の物のやうに引ツ張り歩いてゐないとも限らない――

『獨り殘して來たのが惡かつた』と思はれて、鹽山の神鳴りや牛の聲

には夢でうなされながらも、眠りから覺めた心は義雄をあちらへ迎へに行つた。
手紙で詳しく云つてやりたいにも、行き違ひになつては詰らないと躊躇しながら、毎朝〳〵、心の留守なかの女は、けふは歸つて來るだらうと思ふ男の戀しさを抱いて、床の中に遲くまで目を覺したまゝ這入つてゐた。
義雄が歸つて來て、下の八疊の座敷で土產物を開いた時、渠は直におとお政とに小酒宴の用意をさせた。
主人の清造は酒さへあれば肴は何でもかまはないので、あり合はせのするめに湯豆腐で澤山であつた。
『お父さんはお酒ばかりを頂戴おしなさいよ、わたし達はこれをやりますから。』

と潔が先に立て葡萄に手を出した。
　若いもの等が互ひに奪ひあつて、立派な粒から先きへうまさうに喰つてゐるのを見て、義雄は、
『それだけになるまでの間の、おれの創作的努力と苦心をも知らないで』と思つた。が、清造には、猪口を取りかはしながら、それをあり體に話した。すると、
「それはそれで結構だが」と、清造は意味ありげの口調で、『君は今回餘り洒落たことをやり出した、ね。』
『いや、そのことだけは』と、義雄はお鳥と顏を見合せたが、再び清造の方に決心のある目を向けて、「云つて貰ひたくないのです。惡いと云はれれば惡くないことはないのですが、止むを得ないと辯解すれば、また辯解出來ないこともないのです。」
「そりやア、君が細君を嫌つてゐるのは分つてゐるが、子供もあるのだ

から――』

『だから』と、手を持つて下に押さへ付ける眞似をして、『何も云つて貰ひたくないのです。』

『然し少しひどくはないか、ね？』

『ひどいもひどく無いも、僕の決心一つでやつてゐることですから――』

『さう云つてしまへば、僕も別にそれ以上の忠告を與へる餘地もないが――君の細君に知られたら、僕が面目ないわけだから。』

『いや』と、義雄は言葉に詰つた。淸造が自分等の宿をするのを斷る氣かと思つたのである。『そんな野暮なことは云はないで、續いて僕等を置いて貰ひたいですが――知らない家の間借りをするのも何だか不安心ですから、ねえ。』

『そりやア、君がたツてと云ふなら、僕もかまはないが、どうだ、お鳥さんにも女の道を充分仕込んでやつたら？』

『ふん』と、お鳥は鼻で返事をして横を向いた。臺所を手傳へと云ふのだらうと思つたからである。

『女の道と云ふと――』義雄には分らないので、例の道學根性から妾のやうなことなどよさせるやうにしろと云ふのかとも考へた。

『朝寢坊ばかりしてゐないで』と、清造は笑ひにまぎらせながら、『うちの用事も少し見習ふやうにしたら――』

『ほ、ほ』と、お政はお鳥の顏を見たが、お鳥がむッつりしてゐるので、目を清造の方に轉じた。

『それも惡いことではないでしやうが』と、義雄は既に何か小さい問着がお鳥とこの家との間にあつたのだと初めて感づいて、『これは然し別な目的の爲めに――たとへば、琴なり、またはほかの物なりに――專ら熱心にならせて見たいのです。』

『琴はあたい嫌ひよ』と、お鳥も清造の云はうとする言葉を邪魔する

つもりで、お政に口を出した。

『さう』と、お政は清造を憚つて、簡單に返事しただけだ。

潔は別に何も云はなかつたが、葡萄の殘りをみんな喰べてしまつて、自分の筒袖の端で口のあたりを拭いてゐた。

『君の考へがさう決つてをるなら、もう僕は云ふこともないが――』かう云つて、清造は話題を轉じた。お鳥が頻りに義雄を二階へ連れて行きたさうにするのを、

『まア、そんなに旦那さんばかり大切にしないでもいいぢやアないか』とからかひながら、義雄に猪口をさすのである。

お鳥は待ちかねて獨りで二階へあがつてしまつた。その跡を義雄に追はせるのを、清造は何だかいやな氣がして、義雄のもじ〳〵し出したのをも承知しながら、

『もッと飲み給へ、君の新しい夫婦のさいさきを祝ふのではないか』など云つた。

『然し、もう、お政さんがゐ眠りをし出したし、實際、夜も更けたのですから、あすまた飲み直しましよう』と云つてそこをはづした。

『まだ東京は暑いね』と云ひながら、二階へ行つて見ると、お鳥は獨りで床へ這入つてゐた。眠つてゐるのかと思つて、義雄は靜かにそのそばへ行き、顏の向いてゐる方のかけ蒲團の端に坐り、醉つて苦しい息を吐いた。

『酒臭い、臭い！』かう、突然叫んで、お鳥は反對の方に顏を向けた。そして自烈たさうに、『人が一週間も待つたのに、平氣であんなおやぢと酒ばかり飲んでゐて――』

『そんなに待ち遠しかつたのかい』と、義雄はかの女が急いで歸つた時の冷淡を思ひ出しながら、意外に感じた。

『さう、さ！』と、聲を全身から出したのが渠のからだにも傳はつた。

『ぢやア、おれの歸るまで一緒にゐて呉れたらよかつたのに。』

『…………』

『實際、寂しかつたよ――手紙もよこさないで、さ。』

『でも』と、こちらへ向き直り、『行き違ひになつたら詰らんぢやないか？』

『早く歸らうと思つたッて、金が來なかつたら仕方がない――おれの手紙は讀んだらう？』

『うん。』

『それで初めて己の心が分つたのか？』

『さうぢやない』と、恥かしさうに笑つて、肩をすくめた。

『本郷へは行きやアしまい、ね？』

『本郷ッて――』

『黒ん坊、さ。』

『まだそんなこと疑つてるの?』

『さうだらう、さ。』

『馬鹿』と、片手で起きあがつて、片手で義雄をつき飛ばし、自烈たさを顔のしがめ方に現はして『馬鹿、馬鹿、馬鹿』と、渠の崩れた膝を二三度抓つた。『そんなこと、誰れがした?』

『さう怒らなくてもいい、さ。』

『それより、自分こそ』と、かしらをまた枕に落とし、『何をしてたか分るもんか?』

『ちやア、おれが受け取つた金と使つた高とを見るがいい、さ。』かう云つて、義雄は紙入れから稿料の通知状やら宿屋の受け取りを出した。

お鳥が腹這ひになつて、それを調べ合はせてゐるのを見て、渠は女の信用を得るには、いつも、この手に限ると思つた。

義雄も床に這入つてから、お鳥はこの家を早く立ち退きたいことを語つた。そして、渠はそれもよからうが、どこへ行つても、他人とは何か知らん悶着の起るものだと云つて聽かせた。

『でも、こゝの奴等は皆氣に喰はん。』

『お政さんの手助けにしようと云ふだけのことさ。』

『それで自分の顔が立つか――あたいをここの下女にさせて置いて？』

『だから、おれもそれとなく斷つたぢやアないか？』

『人間らしいのはまだしも潔さんだけだ。』

『若い男なら、いいのだらう？』

『またそんなこと！』かう云つて、かの女は渠の胸を突いた。が、これまでにない優しさと熱心との加はつてゐるのを知つて、渠はかの女も餘ほど寂しい目に會つてゐたのが分つた。

多少長くなつた夜も直に明けてしまつたが、二人の起きたのはずッと遲かつた。

そして、かれこれと二人が私かにもつれ合つてゐるうちに、早ゆふ方となつたので、義雄は昨夜の約束通下の座敷でまた酒を初めさせた。酒で氣嫌を取つて置く氣なのである。淸造は多少醉ひがまわつて來てからも、もう、昨夜のやうな敎訓めいた、忠告めいたことは云はなかつた。その代り、渠は、義雄の困つたことには、例の待合へ附き合へと云ひ出した。

渠が、時々無聊を感ずると、獨りで行く待合が一つ新橋にある。別に藝者を呼んで騷ぐのでもなく、いつも、その帳場の長火鉢にくッ付いて、渠と殆ど同年輩の婆々アおかみを相手に、渠が盛んであつた時の昔話をしながら、ただするめ酒を飮むのがお決りだ。

義雄も一度連れて行かれて知つてるところだが、そこのおかみが一

度年甲斐もない化粧をして、細君が亡くなつた跡の清造の家へやつて來た。渠はただ昔の借金の催促かと思つたら、それは表面のてれ隱しに云ひ出しただけであつて、本意は自分が跡釜に坐つてもいいから、悲運つづきのその商買を一緒になつて盛返して呉れいと云ふのであつた。

『お前さんを女房にするまでまだ老いぼれてゐないよ』と、渠は憤慨してその婆アを追ひ歸してから、暫らく足を拔いてゐることも、義雄は渠から話されてよく知つてゐる。

そこへ附き合へと云ふのは、このおやぢ、今夜は餘ほど何うかしてゐると義雄は考へた。自分等の艶ッぽい事實を見せつけられて、渠も亦氣を若返らせたのだわいと考へられた。

で、義雄は迷惑さうな顏をして、

『お付き合してもいいのですが――』

『いやか』と、清造はさき廻りして、珍らしく不氣嫌さうに、『いやなら、僕獨りで行つて來る。』

『實は、これが』と、義雄はお鳥を鳥渡返り見て、『反對するに決つてますから。』

『君は君の樂みをし給へ、僕にはまた僕相應の話し相手があるから』と、苦笑しながら、椰子の實の煙草入れと太い銀煙管とを取りまとめて腰にさした。

『あんなお婆アさんとこなどおよしなさいよ』と、お政がそばからとめた。

『お婆アさんが目的ではない、もツと、うまく酒を飮んで來るのだ。』

『お酒なら』と、お政はお鳥と顏を見合はせて冷笑し合ひながら、『わたし達がお酌をします。』

『お前では氣が利かんし、お鳥さんには氣の毒だから、なア』と、當てこ

すりのやうな態度を以て立ちあがり、隣室で勉強してゐる息子に向ひ、
『潔、下調べが濟んだら、獨で寢てゐなよ。』
『はい』と、唐紙越しの返事がした。

『待合と云やァ結構なやうだが、婆アさん相手のするめ酒は、もう二度とは眞ッ平だ』と、義雄は清造をあざ笑つたが、渠も一度はあんな年輩と狀態とになる時もあると思ふと、同情の念を禁ずることが出來なかつた。

『ぢぢイでも、色氣があるんだ』と云ふお鳥をいましめながら、然しその夜もそこに寢てしまつた。

翌朝、少し早く起きて食事を濟ませ、義雄は旅革鞄を持つてそこを出た。毎日のやうに通つた谷町から簞笥町の通りや、簞笥町と今井町との間を市兵衛町にあがるだら／＼坂や、我善坊の細い通りも、何だか物

珍らしい。自分の家へ歸つて行く氣持はしないで、長らく無沙汰をしてゐる人の敷居へ近づくやうな氣がする。そして家へ這入つてからは、直ぐあがつたところのはしご段やつき當りの庭が見えると、確かに自分の家だと云ふ強みは出たが、今度はまた、誰れも迎へに出ないのが物足りないと同時に、留守に何か大事件が起つたのではないか知らんと云ふ心配が胸をどき付かせた。

椽がはで、おもちやの學校革鞄を肩にさげた知春と出會したが、この子はびッくり顫へあがつた樣子をして伏し目に下を向いた。そして、義雄が默つて行き過ぎるのを待つて、逃げるやうにばたばたと臺所の方に行つた。

『父ちやん、父ちやん』と云つてるのが聽こえた。

『さう――お歸んなさつたの』と云ひながら、千代子が急いでやつて來るやうだ。

『またあの顏を見なければならないのか』と、義雄がいやな物を避けるやうに目を据えて、元のままになつてゐる机の前に坐つたところへ、かの女は出て來た。

『お歸んなさい。』明いた障子のそとから少し腰しを曲げたからだを右の手で壁の柱にささえながら、『大相御ゆツくりでした、ね。』

渠がふり向きもせず、默つてにがり切つてゐる横顏をかの女はじツと見つめて、よく拔け〳〵と――きツと、あの女をつれて行つたに相違ないと云ふ憎しみを禁ずることが出來なかつた。

『今、お茶を持つて來ますから、ね。』千代子が去りげなく引ッ込んで行つた跡でも、義雄の心は落ち付けなかつた。

お鳥の肌が自分の衰弱した神經の微動にもまつわつてゐるやうで――まだ午前中であるこの可なり樹木の多い山下の空氣を吸ひながらも、呼吸が少し迫つて、机に肱を付いて見た手の指さきが顫つてゐる。

『奥さんがあるなら、暫く遠ざけてゐなければなりませんぞ』と、甲府の病院で云はれた忠告を思ひ出し、自分の左の耳は繃帶を取つては來たが、まだよく聽えないのに今更の如く氣が付いた。

右の耳を押さへて、庭の雀の啼き聲を幽かに聽いてゐると、いつの間にか、知春が二三の來狀とタムソンと書いた名刺とを机の上に置いて、

『父ちやん、おみ——あげ』と小さい手を重ねてゐる。

それを見た渠の心は、心から歔欷あげるほどの脆い情に打たれた。が、あの千代子が無邪氣な子を使嗾してゐるのだと思ふと、つい、また憎くもなつた。且、千代子が茶の用意をして出て來たので、優しい返事も出來なかつた。

『そんな物アない。』

『ないツて』と、子はつらさうに又恥しさうに母の坐つた肩へもたれかかつた。

『ひどいのです、ね、お土産一つないのですか？』かう云つて、千代子も失望して、急須に湯をつぎかけた鐵瓶を持つたまま義雄の顏を見た。

『それどころぢやアなかつたのだ。』渠は慳貪に答へて、自分の落ち度を忙しい執筆と病氣との理由に押し消さうとするのであつた。

『誰れか連れてッてたのでしようから、ね』と、かの女は笑ひながら渠の樣子を窺つた。

『何だ？』怒つたやうな、また、さうだと返事したやうな聲を出して、渠も口には笑みを漏らした。機先を制せられて、張り詰めてゐた反抗心は失つたが、再び慳貪に、『連れて行かうが、行くまいが、おれの勝手だ。』

『それはそれでも構ひませんが』と、かの女の出方も案外におだやかで、『子供はお父さんがいつ歸るだらうッて、樂みにして待つてゐたんです、わ。』

『土産が欲しけりやア、これで買へ』と、義雄は紙入れから五十錢銀貨を出してほうり投げた。

『これでも、氣は心ですから』と、千代子はそれを拾ひあげて、知春に向ひ、『ありがたうとお云ひ——坊やも段々利口になつて行かないと行けないよ。無理ばかり云つてちやア——』

『お歸んなさつたのですか』と、繼母も出て來て坐りかけたが、

『お土産が無いんですッて』と、千代子が訴へるやうに云つたので、

『さう?——わたしのところに少しお菓子の殘りがあつたッけ。』かう引き受けて、繼母はまた引ッ返して行つた。

『あなたのお留守に來た手紙はそのたんびに附け紙をして送つた筈ですが、きのふけふに來たのはそれだけです。それから、その名刺の西洋人が尋ねて來て、いつ頃になつたら歸ると聽いてました。』

『また飜譯でも頼みに來たの、さ。』

『歸つたら、直ぐハガキでも出すからと云つて置きましたから、あなたから知らせておやりなさいよ。』

『うん』と、むッつり答へたが、渠はどうしてもうち解ける氣になれない。

そこへ繼母が五つばかり最中の這入つた菓子皿を持つて來て、

『もう、これッぽつちだけれど、壺屋のは久し振でしよう——』

『菓子どころではなかつたのです』と、渠はつッかかるやうな口調だが、繼母には多少遠慮したつもりで語つた、その實、千代子に聽かせるつもりだ。『僅かの日限に二百枚以上の原稿を書いた爲め、耳を痛めて、今でも左の方の聽こえが遠いのです。これから直ぐ醫者に見せて來ようと思つてます。』

『さうださうですね、耳が。』

『誰れが話しました？』義雄は何でも、もう分つてゐるのかと思つた。

『誰が云ふにしろ』と、千代子が受け取つて、『何でもちやんと分つてますよ。耳のことも、それで却つて人並になれるだらうと、いつかの萬朝報に冷かしてありました。』

繼母は義雄の鋭い顏を見て笑ひながら、知春のせがむまゝに最中の一つを取つて渡してゐる。

『人並になつてしまへば』と、渠も半ほ笑みながら、而も今のわが國の文學界に對する自分の今回の努力は決して無駄にならないと云ふ確信を懷中手させて、『おれのやらうとする仕事が滿足出來るものか？』

十三

知り合の博士がやつてゐる耳科病院で診察と手術とを受け、當分は毎日通つて來いと云はれてから、義雄は先づ笛村を訪ふと、留守であつた。

で、その近處に住んでゐる詩人で、前者と共に『耽溺』を持つて歩いて呉れた友人に會ひ、それの出版は今のところ危險がられて、とても見込みないことを聽いた。雜誌にでもと思つて、笛村が現代小說社へ行つて見たが、そこではまた餘り長いからと云つて斷つたさうだ。『然し雜誌にならら出さないこともなからう』と、渠は自身で日本橋通りへ行き、現代小說の主筆に相談して見た。初は矢張りしぶつてゐたが、たッてと云ふなら、引き受けることにするが、稿料の半額だけを明日渡し、その跡のは雜誌に出た時、渡さうと云ふことに決つた。

先づ一安心したので、その足で村松を訪ひ、出發前に假りた金を返し、久し振の一杯を共にしてから、一緒に養精軒へ行つて玉突をやつた。勝負にさん〴〵負て、お鳥のもとへ歸つたのは九時過ぎであつた。かの女は、もう床に這入つてゐた。

『おい、あの原稿の方をつけて來たぞ』と、義雄は嬉しさうに云つた。

『さう』と、かの女は枕の上で鳥渡微笑したが、直それが苦笑に落ちて、不斷艶のいい顏が電燈の光に靑ざめてゐるやうに見えた。

『どうかしたのか？』

『痛いの。』

『どこが？』

『…………………』

『えッ？』渠はかの女の無言なのが萬事を語ると思つた。あれだけ、姙娠とこの病とに對しては、注意してかかつてゐたのに――

渠はかの女の枕もとに坐つたまま顏を反けて、暫く自分の三四ヶ月以前までの苦しみと不愉快とを考へた。そしてお鳥とも絕緣しなければならないことの餘りに早く初まつたのを後悔しないではゐられなかつた。

かの女の高まつた呼吸がひどい鼻息に聽こえる。でも、今夜から別々な眠りだと思ふと、元の他人だと云ふ氣もして、どう手をつけてやつていいのか分らなくなつた。

かの女は義雄の冷淡なのに激して、蒲團をはね飛ばして起き直つた。そして青い顏の青い目で義雄を睨みながら、

『どうして呉れる？』

『どうッて』と、冷やかにかの女ゝ方に向いて、『醫者に見て貰ふより仕方がない。』

『いやだ、いやだ』と、からだをゆすぶり、『醫者なんぞに見て貰ふもん

か？』

『ぢやァ、手療治の道もないことはない、さ。』

『そんなことで直るもんか？』

『全體、いつから痛い？』

『けさから、さ。』

『ひどくか？』

『さうでもないけれど――』

『兎に角、醫者に見せて、早く直す方がいいよ――おれの經驗で見ても、つらいものだから。』

『ふん』と、鼻聲で泣き出しさうな顏をして、お鳥はまた枕に就いた。

そして、これが直らなかつたら打ち殺すぞとか、おこられてもいいから北海道の兄を呼び寄せて强談するとか、頻りにいろ〳〵な恨言を云つてゐた。

義雄はかの女が寢ながら獨りでもがいてゐるのを知つてゐたが、きのふからの疲勞が出て、眠くッて、眠くッて仕やうがなかつた。

とろ〳〵と眠つたかと思ふと、渠はお鳥がにがり切つた顏をして、外出の衣物を着かへてゐるのが目に這入つた。

『どうするのだ？』渠は目がぱッちりしてしまつた。同時に、向ふがこッちを殺す氣ではないか知らんと云ふやうなことが浮んだ。次ぎに、寢床のまわりに刄物が出てはゐないかと見まわして見た。

『自分は醫者へ連れて行かうとしないちやないか？』

『醫者へ行くつもりかい？』

『行かなくッて、どうする？一時でも後れたら、それ丈あたいの損だ。』

『そりやア、損どころぢやアない――行くなら、己がついてッてやるよ。』

義雄も起きあがつて、衣物を着かへた。そして時計を見ると、もう、十

二時を大分過ぎてゐる。

二人は外出の用意が出來ても、互ひに目を反むけて暫く默ッて突ッ立つてゐた。下では皆よく寢てゐるやうで、外を通り過ぎる夜車の音が聽こえたばかりだ。

『どこへ行かう？』實は、義雄に當てがなかつた。

『どこまででも行く！』かうお鳥は片足で疊を踏み叩いて云つた。『醫者のあるところまで行く――醫者が無かつたら、警察へ行つて、お前の不埒を訴へてやる！』

『そりやア、それでもよからうよ。』

『…………………』

『でも、ね』と、わざとうち解けた口調で、『そんなことをしたら、誰がこれからの世話をするのだ？』

『世話するものなんぞ入らん！裁判所へ出てでも、お前から無理に治

療代を取つてやる！』

『そんなことはしなくッても、おれが直るやうにしてやる、さ。』

『分るもんか？』

『さう心配するな』と、渠はお鳥の脊中へ手をかけて、動悸の烈しくしてゐるのを衣物の上から擦つてやつた。

『ふん、つらい、つらい！』かの女は二三度からだをゆすつて、渠の顔を憎々しく見詰めたが、ぼろ〳〵涙がこぼれる目へ長い袖を燒けに持つて行つた。

かう心がいら立つて來たら、かの女が外で何を仕出かすも知れないと思つたので、分り切つてゐることだが、念の爲めに云つて聽かせた——餘り輕卒なことをすれば、渠自身の惡名が出るばかりでなく、同時にかの女も歌はれて、それこそ、かの女が常々最も心配する通り、その兄弟や友人に再び顏を合せることが出來なくなるかも知れないと。

かの女はたゞ聲をあげて泣いた。

『今頃見ッともないから泣くのだけおよし、ね。一緒に醫者は見付けて上るから。』かうなだめ賺して、渠はあす、また金が取れることを語つて、治療代には決して困らないことを示めした。

夜が更けると、街道を吹く風が、もう、本統の秋だ。寒けがすると云つて、お鳥がわざ〳〵袷せ羽織を出して着たのは、利口であつた。

宵なら隨分賑やかな通りではあるが、もう、皆戸が締つた各店頭の軒燈もぽつり、〳〵消え殘つて、眠たさうにまたたいてゐる。そして、二人の無言で投げる影が四ッにも五ッにも黑い地上に寫つた。

無言で歩きながらも、義雄は、二三歩跡から附いて來るお鳥が、突然飛びかゝつて來て、ナイフか何かの鋭利な刄物で自分の脊中をつき刺ゝはしないかと云ふ疑ひも起つた。

で、通りの暗い隅を行く時などは、向ふの後れを待つてやるやうな振りで、實はおづ〳〵ふり返つて見た。

ところが、ふり返つて見る度毎に、かの女の伏し目勝ちにしてゐる顏が、街燈のあかりのさし加減で、眞ッ青に見えたり、眞ッ黑に見えたりする。

眞ッ青でもいい。また、眞ッ黑でもいい。が、その度毎に、かの女の顏からふッくらした肉附きが殺げて行くやうだ。

家を出た時も既に筋肉の働きがとまつたやうなこわい顏であつたが、一歩一歩、闇を拔けるに從つて、筋肉のうちに藏してゐた刄物のやうな骨が現はれて來たのだらうかと思はれた。そして、もッと行くうちに、かの女の骨組が全く刄物その物になつて、こちらの身につき刺さるのではないかと云ふ心配まで起つた。

考へて見ると、かの女は鹽山にゐても、本統に愛されようとはしなか

つた。まして自分から愛しようとするなどとは恐らく夢にもなかつた。

『可愛いのよ』と、自分も口に出し、また實際全身にその意味の力を込めたと思はれるのは、この二日二晩のことだ。そしてそれが結局かの女には惡夢であつた。

『罰當り！　もう、どうせ、おれに愛せられようといふ氣も出まい――おれを愛しようといふ氣はなほ更出まい。今までは五歩も十歩も讓つてゐたおれだが、もう、なに、一歩なりとも假借しないぞ！』かう義雄も殘忍な性質をあらはして見ると、後から附いて來るお鳥が腐れ緣といふ鎖を引摺つた瘦犬であるやうに思はれた。

黑田邸の外壁にさしかかつた時、それに添ふて掘れてゐる大きな溝があつた。渠はこの中へこの附き物を突落として、暫く身を隱してしまはうかとも思つたが、そばの公番から巡査が出て來て、瓦斯燈の底光

を廣げたので、素直にそこを通り過ぎることが出來た。

『困つたものを引き受けなければならなくなつた』と思ふと、星だらけの夜ぞらを仰いでも、その暗い部分だけが目にも心にも殘つて、自分とかの女との見分けが附かなくなつた。

　黒田の筋違に、西洋建の藥局を持つてゐる大きな藥種屋がある。渠はそこで色んな注入液を買つて來て、私かに不愉快な手療治をやつて見たことを思ひ出して、

『この病氣に罹つた以上は、とても急になほりやアしない』と、ますます焼けな冷酷を、押し詰つた自分の呼吸に引き入れた。

　赤阪田町六丁目と福吉町とが挾んだ通りは、片かはが矢張り黒田邸につゞいた一條邸で、繁つた樹木の影などで暗かつた。お鳥はそこで足をとゞめた。ひやりとして、義雄はその方へふり返つた。

『どこへ行くのよ』と云ふ自烈たさうな聲が聽こえた。

『まア、附いてこい！』つい嶮しい返事をしたが、別に訂正もせずに、そのまゝ進んだ。實際、當はないのだが、この先きへ行くと、待合や藝者屋が多いから、そんな場所にはそんな醫者がゐないことはなからう位の考へはあつたのである。

田町三丁目のよく玉突に來た赤阪亭のあたりへ來てから、ふと思ひ出したのだが、赤阪見附のそばに黴毒、痳病、皮膚科專門といふ看板を出してあるところがあつた。

渠はそこを無理に叩き起した。

十四

原口の家から、毎日、義雄は本郷の耳科病院に、お鳥は赤阪見附の醫者に通つた。

お鳥は實際に顏色も惡くなり、肉體も瘦せて來たほど、自分の病氣を氣にばかりして、琴の稽古を初めないのみならず、裁縫學校のことも殆ど全く云はなくなつた。

『まア、氣長に氣を落ちつけて養生してゐないと、この病氣は直るものでないから。』かう云つて、義雄が時々氣狂ひのやうに泣きわめくお鳥をなだめることもあると、

『では、もう一度どこかえい溫泉につれて行け』と、かの女は云ひ張つた。

が、渠は鹽山で苦しい目に會ひ、而もつれて行つたかの女には殆ど冷

遇され通しであつたことを思ふと、再び湯治など洒落る氣にはなれなかつた。

且は、成るべく病人のぐずり泣きに接する機會を少くしようとして、耳科醫通ひと學校を敎へに行く時間の外でも、晝間は多く我善坊の家で勉強し、夜も遲くまで友人のところや玉突場で暮した。

それでも、必ず谷町へとまりに行つた。そして、その理由が近頃段々自覺されて來た。渠は愛も結局獸慾だと斷定してゐるが、その獸慾が滿たされない今日、妻とは今年の初めから絶緣してゐるそれと同じ狀態を、何の必要があつてまたお鳥の元へ引きつけられるのか？

『おれには、觸覺が特別に發達してゐるのだらう――大理石の彫像のきめが細かいのを愛するやうに、おれはかの女の羽二重の肌を賞翫してゐるのだ。』渠はかう考へ込んでゐるが、その白い手足の肌もこの頃は粟粒のくッ付いたやうに粒立つて來た。

或朝、千代子は義雄の歸宅するを待ちかまへて、
『あなた、淸水を原口さんのところへ置いてあるんですか？』
『置かうが、置くまいが、お前の知つたことかい！』渠はわざとそらぞらしく答へたが、もう、感付かれてゐるだらうとは、お鳥がその友達に見付けれらたと云つた時から覺悟してゐたのである。
『隱してゐても』と、睨むやうな目附きで、『ちやんと、人が知らせて呉れます、わ。』
『…………』
『そこの駄菓子屋の娘が丁度あいつが這入るところへ出會したさうです――藥瓶を提て、いやな顏をしてイたさうだから、きッとあなたのが、案の定、移つたんでしよう？』
『お前の身代りだと思やァ、恨みッこはない筈だ。』
『あの罰當りが』と、かの女は坐つた胸を少しそらして、さも氣持ちよ

さゝうに笑つた。『いい氣味だ！それでこッちの恨みが少しでも晴れたと云ふものだ。うちのものはどれだけ恨んでたことだか云へたもんぢやアなかつた。』

『馬鹿を云ふな』と、義雄はさう聽くとお鳥を辯護したくもなつて、『苟くも、暫くの間だッて、おれの物にした以上は、おれのからだも同樣なものだ。』

『あなたはあなた、さ。』かの女は横を向いたが、筋肉のぴく〳〵動く顏をまた向け直して、『それにしても、あの宿料を早く取て下さいよ。』

『宿料ッて――』

『あいつが喰ひつぶして行つた分です。』

『あゝ、あれか』と、義雄は今思ひ出したかのやうな風をした。

『そんなものア、もう、迚に取つてしまつた。』

『そんなら、こッちへ渡して下さいな。』
『何も、お前に渡す必要はない――おれが直使つてしまつた。』
『いい加減なことをおッしやい！』千代子は躍起になつて充血して來た目を飛び出しさうに浮ばせて、『きッと、そのままにしてやつたんでしよう？あの女のことだから、きッと、男の膝にでも寄ッかかつて、あたい、もう、拂はんでもいい、わ、ね、とか何とか云つたのを、あなたはあなたで、鼻の下を長くして、うん、さうとも／＼――』
『よせ、馬鹿！』
『よせません！――お前のことだもの、家の方にはどうとも胡麻化して置いてやるッ』と、かの女はまだ、義雄の云ひさうなことを、せりふか何かのやうに、顎に力を入れて、しやべりつづけた。
『よせといやアよせ！芝居に出る惡婆アの稽古でもあるめえし。』
『惡婆アでも、もとはお好きであつたのでしよう――』

『…………』義雄は横を向いた。相手にするのも嫌になつた程かの女を憎々しく思つた。然しかの女は餘ほどいい考へでも出たやうに聲の調子を高め、

『どうです、わたしを一つ役者にしたら？』

『…………』

『正直な役者になりますよ。』

『…………』

『正直な──忠實な──あなたの思ふ通りに働く──さう云ふのがあなたの前から欲しがつてる女優でしよう？受け出して貰つたら、直逃げて行く薄情者でもなければ、講習生の目見えに行つて、それッ切り歸らない代物でもありません、わ。』

義雄のあたまには、藝者吉彌の思ひ出やかの女優志願者周旋の失敗が、自分の威嚴が、あると思ふ歴史を恥しめるやうにひし／＼と刻込ま

れた。そして、渠はかの女がどんなに皮肉な顔をしてゐるのかと盗み見ると、きよと〳〵しい眞顔であつた。で、睨み付けて、

『氣狂ひ！』

『でも、あなたはまた清水をおしまひには女優にする氣でしよう？』

『そんなことが分るものか？』かう云つて除けたが、義雄にはその考へがないでもなかつた。が、まだ自分以外には、お鳥そのものにも云つてない。

『分りますとも――わたしには、ね、正直の神さまが附いてゐますから、どんなことでも、人が云つて呉れます。云つて呉れなけりやア、また、このわたしの心の目に見えます。』

『それが既に氣狂ひの證據だ。』

『何の證據でも、わたしはあなたのやうなお人よしぢやア御座いませんから、ね。』

『…………』義雄はぎッくりとして考へた、自分は是迄に人の約束を信じて馬鹿を見たこともある。なけなしの金を無理に借してやつて、其儘にせられてしまつたこともある。女にうち込んで、却つて向ふにもて遊ばれたやうなこともある。が、すべて身づからさう許して、別な覺悟の上に立つて來た。その覺悟は矢張りしッかりした自我主義で、この根本を侵されない以上は、毫も恥ることはなかつたと。そして自分を知らない妻の言葉を非常の侮蔑と見て、突ッかかるやうに怒鳴つた。『お人よしとア何だ?』

『お人よしぢやア御座いませんか?』千代子は態度の變つた所天から身を警戒しながら、早口に、『あなたは何でも自分でやつて來たと思つてるんでしようが、みんなわたしのお蔭ですよ。吉彌の時でも、わたしが國府津へ出かけて行かなけりやア、始末が付かなかつたんぢやア

ありませんか？そして、あなたがわたしに隱してしたことはみんな失敗です。――隱してゐても、知れるから不思議だ。――これはあなたに長年いじめられて來たお蔭かも知れませんが、あの女優志願の女でも、いい女はいい女だが、わたしが蔭でちよッと見て、こりやア駄目だ、な、と思つたら、果してその通りであつた。――今度のことでも、その初めから分つてゐたんで、もう、ちやんと呪つてあるから』と、矢張りきよと〱した眞顏だが、どこかにその呪ひの場所が實際あるぞと云ふやうな青白い微笑を浮べて、『どうせ、いいことはありッこ無し、さ。』

『…………』義雄はじッと妻の方を見た。そして、直にでも得意の平手打ちを喰らはせようと待ちかまへてゐた張り合ひがなくなつた。かの女の顏が馬鹿〱しいほど凄い――と云ふのは、こちらから手でも擧げれば、直飛びかからうと意地〱してゐる癖に、堅く横に引き結んだ口のびく〱動く口びるから、いやに勝ち誇つた樣子が漏れてゐる。

鬼女の笑ひ――執念深い呪ひの女――深夜、髮を亂したあたまに蠟燭を三本立て、口に髮剃りを喰はへ、片手に藁人形片手に金槌を持つた丑滿參りを想像して、義雄はぞッとした。このやうにヒステリの高ぶつて來た女なら、それくらゐのことは田舍なら仕兼ないと。

同時に、かの女が近頃頻りに自分には神さまが附いてゐるからと云ふのも、義雄は氣にならないではない。かの女はさう身づから信ずるやうになつてから、絕えず陰陽に關する書物を讀み出して――占ひ師になりたいも、餘ほど何うかしてゐるのではないかと、渠には思はれた。

が、若も離緣を受けた後の生活準備にとして、そんな下らない陰陽學などを大事さうに讀んでゐながら、なほ且、誰れからか聽いた今の法律を楯に離緣を承知しないかの女の心根を思ふと、義雄は如何にもそれが憎くて堪らないのである。

『陰陽師、身の上を知らずが、もう、今から始まつてるのだ――馬鹿！手前

のやうに執念深い鬼婆々アこそは、な、どうせ、碌なことアねいのだ。』

『どう致しまして。』と、喰ひ付きさうに口を開いたが、また堅く一文字に引いた口の兩端が、義雄にはかの女の耳までも屆いたやうな氣がした。

『その面を見ろ！』

『あなたこそ自分の顏を御覽なさい――今に、あの女は――』

『手前は、な、あの女、あの女とばかり云ふが、おれはお前の考へてるほど清水に夢中ぢやアないのだ。』

『なに、御遠慮なく夢中におなりなさいよ――今ぢやア、その方がいいんですから』と、かの女は横を向いて、變に笑ひながら、庭を歩いてゐる雀を見た。

『馬鹿！呪ひが早く利くとでも思ふのだらう。』

『さうですとも――あの女の運命がきまつてしまうんです！』

『ふん、同時にまた手前の死が來るのだぞ、そんな馬鹿な眞似をしちやア。』

『わたしには神さまが附いてゐて、守つて下さいます！』

『よし、それならそれでいいから、おれは意地にも清水をかばつて見せよう。呪ふなら、もッとしッかり呪へ！　丑滿時に隣の寺のあの大檜の木の天邊へでも登つて、ハイカラの藁人形を釘打ちにするがいい。さうしてその天邊からころがり落ちてくたばつて呉れりやア、あッちの女にもさぞ利き目が早からう。さうして二人とも同時に死んで呉れりやア、お前には離縁の手續きをしないで濟むし、清水からも手切れ金や療治代を取られないで方が付くし、おれにやア一擧兩得の策だ。』

『わたしにやアさうは行きませんよ！　子供を育てあげるまでは、却々死にません。あいつこそ死んでも構はない腐れ女だ――あなたは』と、

少し調子をおだやかにして、坐を乘り出し、『知らないんでしようがね、あいつは前にも女房子もある炭屋の主人をだまさうとしたり――』

『もう、何度も聽いた！』

『ぢやア、馨さんを引ッかけようとしたのを知つてますか――あなたの弟御さまですよ？』

『そんなことがあるものか？』

『それだから、あなたは駄目だと云ふんです――馨さんが現在さう云ふんですもの。』

『そんなことア、あつたとしても、どうでもいいんだ！』かう義雄はかの女を押さへ附けてしまつた。が、實は、最も甚しく自分の威嚴をぶち毀された氣がした。

さういはれて見ると、中途から忘れてゐた疑ひが再び思ひ出されないでもない。

徵兵檢査を二年延ばされた年頃ではあるが、おやぢに末ッ子として可愛がられてばかりゐて、獨りでは鐵道切符の買ひ方さへ知らない、あの卑怯な世間見ずの男に何が出來やう？田舍に行つてると云ふ、あの自分よりも年上の戀人だッて、本人が下宿屋の跡取りになれると思つたから、そのおかみさんを狙つて女の方から持ちかけたのに違ひない。と、かう義雄は今まで高をくくつてゐたのである。

お鳥がまだここにゐたうちは、かの女がよく馨の室へ行つて、夜おそく迄寢ころんで話し込んだことも知つてゐた。繼母が親類へ泊りに行つた時など、離れでは、若い男と女とが隣合つて、各々一間を占領した夜もあつて、義雄自身がそれを私かに妬ましく思つたことも覺えてゐる。が、その時、まさか事があつたとは信じてゐなかつた。

その後、お鳥が調子に乘つて、馨さんがこッそりやつて來たが、うまく云つて斷つたといふ話をしたときも、かの女の浮氣からの揑造だとばかり

かり思つた。

然し疑つて見れば、お鳥が馨の來たといふのは自分の行つたのを反對に語つたのかも知れない。また、馨がお鳥の來たことをしやべつたとすれば、それは自分の行つたのを反對にしやべつたとも考へられる。孰れにしても、關係があつたことは、たとへ實際にあつても、云へないに相違ない。

『若しあれが弟のお古であつたなら』と、義雄の胸には取り返しのつかない樣な恨みと怒りとの焰がごッちやに燃えた。

『兎に角、あのお金だけはわたしの方へ渡して下さいよ、あなたから預かつた家の會計が、そんなぢやアやり切れませんから』と云ひ置いて、いやな對照物なる千代子が立去つた跡でも、渠の焰は中々靜まらなかつた。そして、あのいやな千代子にだが、お人よしと云はれた自分をさまざまに考へて見ない譯に行かなかつた。

十五

耳科醫へ行つたついでに、義雄は小石川へまわり、秋夢のところで、お鳥との關係が詰らないことになつた不平を漏したり、この頃書いてゐる物の内容の一部を話したり、雜誌や新聞に出た問題を論じ合つたり、碁を打つたりして、晩餐を濟ませるまでゐた。

それから谷町へ歸つて見ると、意外にも迎に出たのは我善坊の繼母であつた。繼母ばかりなら、丁度都合がいいから、ゆツくりわけの分るやうに自分の心持ちを云つて聽かせられると思つた。

『まア、こちらへ入らツしやい』と、導かれて、直ぐ奥の八疊へ行つて見ると、清造が爐ばたに坐つてゐるこちらに、また意外にも、千代子が例の勝ち誇つたやうな面がまへをしてゐる。それと少し隔つて、お政のそばに下を向いてゐたお鳥が、苦い顔をして義雄を見上げた。

渠はむら〳〵と癇癪を起こしたので、突ッ立たまゝ、

『また、氣狂じみたおしやべりをしたのだらう』と、聲はなか〳〵慳貪であつた。

『いゝえ、なにも』と、千代子も調子のはづれた甲聲だが、ぶたれはしないかと云ふ心配があるので、爐の方に少しにじり避けて身を固めた。

『わたしは正當なことを云つて、今原口さんに聽いて貰つたんです。』

『それが氣狂ひだ——貴様のやうに軌道を外れた人間に、落ち付いて正當なことが云へるものか？』

『ぢやア』と、目の色を變へて、いざと云へば引かきむしつてやる手構へをして、『人の亭主を寢取つてもいいと云ふんですか？』

『何だ！』渠はいきなり右の手をあげて千代子の横面を投ぐらうとした。

『ぶつなら、おぶちなさい！』かう頓狂に叫んで、千代子は立ちあがりざ

ま、目をつぶつて義雄の兩手にしッかりしがみ付いた。そして、目を三角に明いて、涙をぽろ〳〵落としながら、『さア、ぶつなら、おぶちなさい！ぶつなら、おぶちなさい！』

『……』義雄は默つて千代子の手をふりもぎつて、また擲らうとした。

『およしなさい、そんなこと！』繼母はかう叱りつけて、渠をとめた。かの女はこんなことがありはしないかと心配してそばに立つてゐたのだが、兩人の仕事が餘り手早かつたので、僅かに間に合つた。

それで、立かけた清造も腰を据ゑたし義雄も多少氣が賺いたかして、第一にお鳥を無言でなだめるつもりで、そのそばへ行つて坐つた。そして渠は高まつた息を身づから靜めようとした。

『寢取つたのではない』と、お鳥は千代子の方に目をじッとあげて、然し皆に云ふつもりで云つた。これも怒つてはゐるが、聲は控へ目に出た。

『寢取つたんぢやァありませんか？』千代子は相變らず聲が高く、とがつてゐた。

『よせ、そんな卑俗な言葉は…』かう義雄は一喝してしまつたが、考へると、兎に角、自分の妻なる者がこんな亂らなことを云ふやうになつたのは自分の罪だ。自分自身の行動に對しては、たとへ社會が同情しないでも、また社會から輕侮されても、それは自分の覺悟の前だから、僞りの辯解などするつもりはない。が、自分の妻がまだ無垢なお政のやうな娘もゐる前でそんな、義雄自身でさへ云つたことのないほどの卑しい物の云ひ振をするのが、道學者的なここの主人の手前もあるから、如何にも不本意に思つた。で、

『どうせ、妻はこの頃少し氣が違つてゐるやうですから、今のやうな失禮は、どうぞ惡からず』と、渠は清造の方へ向いて、ここの主人と交際し出してから初めての詫ごとをした。

『どう致しまして』と、清造も初めてつぐんでゐた口を開き、一層眞面目腐つた顏になつた。

『わたくしも惡う御座いましたわ。』千代子も殆ど夢中にのぼせてゐた自分の勢ひをゆるめた。そしてきまりが惡さうに清造の顏を見ながら、『でも、わたくしが氣狂ひに見えるでしようか？』

『正氣で今のやうな失禮な言葉が人の前で云へるか？』かう、また義雄はかの女をなじつた。

『いや、それは』と、清造は無理に微笑を浮べながら、義雄に向ひ、『君もおこつたやうに、細君も亦腹が立つてをつたからで——惡いと云へば、そりやア、君も少しのぼせてゐるよ。』

『ほ、ほ』と、お政は笑つた。

『ねえ』と、繼母もおつき合ひにお政の顏を見て微笑した。それをお

鳥はまた何を云やァがると云ふ風に睨んだ。
『まあ、冗談は置いて――お鳥さんにも下りて來て貰つて、今まで二人の云ひ分を聽いてゐたのだが、ね、細君の話す筋道はよく立つてをる。何も、他の女を持つのが一概に行けないと云ふのではないし、細君が承諾の上で、家族の生活を困らない樣にしてから、やつて吳れと云ふのだ。』
『それも、この人が』と、千代子はお鳥の見向いたこわい顏を顎でそれとさして、
『ねだつてるらしい無理や贅澤を――』
『贅澤などしやせん』と、お鳥は憎々しさうにさへ切つた。が、千代子はそれに構はず、
『無理や贅澤を云ふんぢやァないんです。家族がやッと暮せるだけのことをして下さいと賴むんです、わ。』
『詰り』と、淸造が受けて、『承諾を經ないで、隱れ遊びをして吳れるな

と云ふんだから、これほどありがたいことは無い、さ。』

『なアに』と、義雄はあざ笑ひながら、『話したッて、承諾する筈はなかつたのです。』

『そりやア』と、千代子も負ない氣で、お鳥をまた顎であしらひ、『この人なら承諾しないかも知れませんさ。』

『よせ！』義雄は、横を向いて聽かないふりをしてゐるお鳥をかばふやうに、『今の問題は清水が元だ。』

『でも、こんな女には限らないでしよう。』

『まア、奥さんは待つて入らッしやい。』清造はかの女を制して、『清水さんも亦よく分つてゐます。かうなつた上はどうせ、病氣だけは直して貰ふが、直つたら奇麗に手を切りますと云つてをる。』

へい、人を出し拔いて、もう、そんなことを云つたのかと、義雄はお鳥に味方する心の張りが俄にゆるんでしまつた。

『僕にも僕の考へがあるのです。』から云つて、義雄はお鳥と顔を見合はせた時、直別れたらどうだと云つてやりたかつたが、冷やかに向き直つて、清造に、『然し別れる、別れないは、こちら二人の自由ですから、ね、何も家族がここまで出しやばつて來て、干渉がましいことをするのは好ましくないです。』

『わたしはこの清水さんの宿料を貰ひに來たんです。』

『まだそんな執念深いことをぬかすのか?』義雄の手はまたいら〳〵して來た。

『でも』と、千代子はそれを警戒しながら、『あれを貰はなけりやア、あなたから預かつた家の會計が成り立ちません。』

『馬鹿を云ふな。たッた二圓や二圓五十錢のことでぶッつぶれるやうな商賣は、預けてない筈だ。』

『それはさうでしやうけれど――』

『全體、お前とおれとは、な、お前の口調で云やア、同じ星のもとで生れてゐないのだ。迅くに離縁してゐた筈だが、ただ可哀さうだと思ひ〳〵して今までつゞいたのア、云つて見りやアおれのお慈悲だ。』

『いいえ、違ひます――わたしが附いてゐなけりやア、あなたのやうな向ふ見ずは立つて行かれなかつたんです！』

『お前はよく向ふ見ず、向ふ見ずと云ふが、ね、おれの向ふ見ずは、いつも云つて聽かせる通り、一般人のやうな無自覺ではない。』

『自覺したものが下らない女などに夢中になれますか？』

『だから、人のやうな夢中ぢやアないのだ――身づから許して自己の光輝ある力を暗黑界のどん底までも擴張するので――』

『いいえ、そんなことを云ふやうになつたのは、あなたはここ四五年前からですよ。わたしを茅ケ崎の海岸などへおッぽり出して置いて、さ、僅

十五圓や二十圓のお金で子供の二人や三人もの世話までさせ、御自分は鳴潮さんや大野さんと勝手な眞似をしてイたぢやァ有りませんか？わたしが歸つて來てからでも、獨歩や秋夢のやうな惡友と交際して、隱し女を持つて見たり、濱町遊びを覺えたりしたんです。』

『そりやァ、お前、觀察が足りないので――おれが『デカダン論』を書いた所以は、人間の光明界と暗黑界、云ひ換へれば、靈と肉とは自我實現に由つて合致されるものだと分つたのだ。さうしておれの行動と努力とが各方面に大膽勇猛になつて來ただけのことだ。』

『そんな六ケしいことァ分りませんが、待合へ行つたり、妾を持つたりしてイるものが――』

『めかけぢやない！』と、聽き咎めたのはお鳥だ。

『何です』と、今にも飛びかゝりさうにして、『めかけぢやァあり：せんか？』

『違ふ！』
『めかけです！』
『違ふ！女房が女房らしうせなんだから、人にまでこんな迷惑や病氣などをかけるやうになつたのだ！』お鳥の堪へてゐた怒りが一時にその目にまで燃えて出ようとした。そして、向ふが飛びかゝつて來れば覺悟があるぞと、かの女は親指を中に他の四本の指で握り固めた兩手を、いつでも自由に動かせるやうに構へた。
が、千代子はその手に乘るほど狂つてもゐなかつた。
『そりやアあなたの自業自得と云ふものです――めかけでなけりやア、圍ひ者が天道さまのお罰を受けたのでしよう』と、かの女はお鳥を睨み返してから、もとの言葉を義雄に續けた。『そんな者を持つて敎育家になつてゐられますか？』
『また敎訓はよして貰ふ！それに、おれは英語の技術は受け持つてゐる

が教育家のやうな安ッぽい』と云ひかけて、義雄は清造の聽いてゐるのを遠慮したが、そこまで云つてしまつたのだから思ひ切つて語を繼ぎ、『ものぢやアない。學校など眼中にないばかりでなく、廣い社會に對しても、おれ自身の發展擴張を抽象的な、從つて外形的な、淺薄な教訓の形を以てしたくないのだ。』

餘り懸命にしやべり出してゐたので、義雄は卷烟草の火が膝に落ちたのを知らなかつた。それをお鳥が氣附いて、千代子をじらせるつもりで自分の手を以て急いでふり拂つた。

『今、この場でさう云ふことはお互ひに云ひッこなしとしましよう』と云ひながら、清造はまたお政が獨りで眠さうにしてゐるのに呼びかけ、茶を改めるやうに命じた。

『兎に角、わたしは清水さんの宿料を貰つて行きます。』

『まだぬかすか』と、義雄は握り拳を固めて千代子をおどし付けた。

『でも、わたしの清水に對する氣が濟みませんから。』

『まア、そんなことアどうでもいいぢやアありませんか』と、繼母はそばから意地張つてる千代子に口を出した。

『しみッたれ！おれの使つたものア斷じて返さない！』

『ぢやア、今度取れた分から先月の補助を出して下さいますか？』

『やるべき時アやる！』

『それが當て外れになるから、毎月不足が嵩むんです。』

『何でもいいから、手前は畜生のやうに子供を可愛がつて、おとなしく下宿屋のかみさんでゐりやアいいんだ――もう、用はないから、歸れ！歸れ！』

『歸りますとも、あなたに云はれないでも、歸りますとも。』からゆッくり云つて、にやり〳〵笑ひながら、千代子は義雄を一層いら〳〵させる

考へで、わざと腰を落ち付けてゐる。
早く歸れと云はないばかりにお鳥は立ちあがつたが、實は長くきちんと坐つてゐて而も氣を獨りで窮屈にいら立たせた結果が、局部の痛みに堪えられなくなつたのである。
これは誰れのせいか――義雄だ。義雄にこんなことをさせたのは誰れか――千代子だ。この二人が如何にも憎い。あんな喧嘩はしてゐながらも、結局は一つ穴の狸だらうと思ふと、あまい義雄にも氣が許されない――
どいつも、こいつも、人の苦しみは知らないで――畜生！鐵砲でもあれば、あいつ等二人を並べて打殺してやるのに――『痛い――つらい』と云ふ心の顰めッ面をわれ知らずおもてに出した。自分がゐなくなつた跡で、またどんな惡口を云ひ合ふか知れないと思ひながらも、お鳥は苦いくゝ顏をして、何の挨拶もしないで義雄の後から繼母の後を通り、千

代子が飛びかかりでもしたらと警戒しながら、その室をはしご段の方へ出た。その後姿を千代子と繼母とが相對して同時に憎らしさうに見送つた。

それを見た義雄がふと氣付くと、さッき、千代子に引ッかかれたと見え、爪の跡が自分の右の手の甲に赤くみみず張れになつてゐる。渠はそれを二人に見られまいとして、その手を急いで裏返した。

『田村君も、まア、よく考へて、早く適當な結末をつける方がいいです、な』

と清造は改まつた。

『無論、その通りです。』

『どちらにもよくないから。』

『そりやア實際です。』

『家を困らせないでなら、まだしもよう御座んすが、ねえ』と、繼母も義雄の方を見て云つた。

こんな話をしてゐるうちも、千代子は二階の方にじッと氣を取られてゐた。そしてお鳥がはしご段をあがり切つた音を聽き澄ましてから、義雄の方を向き、血の氣の少い顏を初めてにッこりさせて、『苦しいッて』と、聲をひそめ、『毎日泣き續けてるさうぢやアありませんか？』

お鳥が痛みに堪えないで泣きつづけてゐるなど、そんなことを誰れが云つた？　清造にきまつてゐる。して見ると、渠の癖として、おほ袈裟に——このおほ袈裟と云ふことが義雄の最も嫌ひなことだのに——語つたに相違ないと思へた。で、義雄は渠に對してその法螺吹きの本性を暗に暴露してやる考へで、千代子に答へた。

『なアに、さうでもない、さ。』

『でも、泣いてるんだらう。』かう、かの女はぞんざいに問ひ返したが、だ

らうは他人もしくは亭主をまでも子供あつかひにした語調だといつも叱られてゐるのに氣が付き、直ぐ『でしよう』と云ひ換へた。
義雄は然しまたかと云はないばかりにかの女のぞんざいを怒つて、再び返事をしてやらなかつた。そして、お鳥が二階へ行つてきッと泣いてるのだらうと思ひ續けた。
『でも、可哀さうね』と、繼母が笑ひながら口を出し、『まだ若いのに、義雄さんも罪なことをしたのね。』
『あいつは自業自得だから、仕かたがない、さ――けれど、この人も、どうせ、碌な死にかたはしますまいよ――何度わたしに苦勞や心配をかけたか分らないんですもの。』
『お前さんが苦勞性に生れて來たのだから、仕方がないと諦めておいでなさいよ。また、何かの功德になることもありましようから、ね。』
『何も世の中です』と、淸造も二人の話に乘り、坊主くさい調子で、『さ

うく〳〵よしたものぢやァないです。田村君も云つて見りやァ狐につままれてゐるやうなもので、一旦迷ひが覺めりやァ、また元の根に返ります。』

『これが迷ひと云ものなら』と、義雄はいつも沈思冥想する時のやうに目を半眼に開き、『僕は迷ひから迷ひに渡つて行くのが生命です。』

『浮氣だからでしよう』と、千代子は遮つたが、それには頓着せず、

『僕は考へと實際とを人のやうに別て置くことが出來ないのです。この二つが僕といふ自我の氣分で合致してゐるのが僕の生活です。實は、迷ひもない、その代り悟りもない。』

『だから、君はいつもいら〳〵してをる。』

『ほ、ほ』と笑つて、千代子は自分の考へも清造と同じことだと思つた。

『然し氣分のいら〳〵するのは、たとへば、陽炎が春の野のおもてにちら〳〵のぼるのと同樣で――そのちら〳〵より外に陽炎の實質がない

やうに、このいら／＼を除いては、近代的な人間、即ち、宇宙の本體も現象もあつたものぢやァないのです。實質を攫み得ないものは空理に安んじてゐるのです。さうして空理は生命のない死物です。』

『君はただ佛教の所謂色即是空の理を大膽に實行してゐるに過ぎない。』

『いや、それだけのことぢやァまだ滿足な說明にはなりません。』

『なァに』と、千代子はまた確信ある口調で、『星が肝心ですよ。人間は何でも星を調べて見さへすりやァ分らないことはないんです。』

『そんな下らない迷信はやめろ！』

『それでも、當るから不思議でしよう？』

『詰らないことァよせ！』

『さァ、歸りましようよ、もう、こッちの用は濟んだのだから』と、繼母はもぢもぢして千代子を促した。

『まア、よろしいでしよう』と、清造は歸りかけようとした二人をとめて、義雄にさッきから持ち出したい、持ち出したいと思つてゐた事件を出した。

『君の哲學は哲學として置いて、――一つ賴みがあるのだが――いよ〳〵――引き移つて貰ひたいが、な――』

『ああ、さうですか？』義雄は不意に水をかぶせられたやうにひやりとした。そりやア、さう云はれないでも、どこかいいところがあれば引き移るつもりであつたが、既に度々立ち退きを命じてゐたかの如く、勿體振つて『いよ〳〵』など附け加へたのが氣に喰はないのみならず、餘り空々しく聞えたのである。

心がいら〳〵してゐるから、さう惡く取れたのではないかとも考へて見たが、どうもさうではない。かうなつては、千代子に對しても濟ま

ないから、どうか立退いて貰ひたいと出たのならまだしもしほらしい。が、こちらからさう云はせない爲めの振舞ひは毎晩のやうに喜んで受け、その酒に醉へばまた勝手な法螺を吹いてゐながら、千代子の前だからッて、こちらを下ずんだやうにそんな體裁のいいことを云ふのは許さない。餘り蟲がよ過ぎる！

と、かう、老友の表裏があり過ぎるのを含んだ樣子を義雄が見せてゐるのを知つてか、知らないでか、清造はなほ癪に障るほど落ち付いた風で、

『こんなことがあつては、僕が君の細君に濟まないからと云ふことは、これまでにも、度々君に話してゐた通りだが――』

『いや、分りました。そんなお話しはこれまでにまだなかつたとしても――』

かう云ひかけて、義雄はなじるやうに清造を見詰ると、清造は、まア、そ

んな野暮は云ふなと云ふ目附きをした。
『然しさうあるべき筈です、わ、原口さんとしても』と、千代子も亦義雄とは反對の意味で暗に清造に當つた。
かういやに皮肉な千代子のぶしつけを聽くと、義雄はまたここの主人を辯護してやりたくなつて、かの女に、
『ふん、どこへ行つたッて、貴樣などをあばれ込ませないのはおんなじことだぞ！』
『わたしはここへもあばれ込みはしませんよ、人聽きの惡い！』
『あばれ込んだも同前だ。』
『いいえ、違ひます！』
『まア、そんなことは』と、清造は少し面倒臭さうに、『どちらでもいいではありませんか、なア、御隱居さん？』
『さうですよ、もう、分つたものァ分つたのですから』と、繼母はまた跡

の方へすさつて、再びこの夫婦の喧嘩がぶり返さないうちに千代子をつれて出ようと、主人に歸る挨拶をした。それから、義雄に向ひ、『ちやア、歸りますから、ね、今夜の話はよく忘れないやうに、ね。』

『うん』と、義雄はいや／＼ながらうなづいたばかりだ。

千代子も清造に挨拶した後、所天の方を見て、あざ笑ひながら、

『ちやア、左樣なら――今月はきッとお金を間違ひないやうに、ね。』

『くどい！』

『どこへ隱れたッて、分りますよ。』

『ふん、分らないところへ隱れてやらア。』

『どこへだッて』と、立あがつて、『追ッ驅けて行きます、わ、例の神星で、ね。』

『今度來るなら』と、義雄は坐つたまま、『骨と皮になつて來い――直葬つてやらア。』

『そんなひどいことは云ひッこなしです』と、清造は立て、お政と共に二人を送つて出た。

十六

義雄が清造に別れて、二階へあがつて見ると、お鳥は電燈のもとに身を投げ出したまま、ぶッ倒れてゐた。

『馬鹿な眞似をするなよ、風を引くぢやアないか？』

『引いてもかまん』と、かの女は疊の音をさせて向ふ向きに半起きあがり、からだを支えた左の手の角立つた肩越しにこちらをふり向いた。泣いてたのかして、目に涙を一杯溜てゐる。その涙がひとり手にぽろ〳〵落て、たッぷりした目のうるほひが少し直り、義雄の自分を見詰めてゐる顔が分るやうになつた時、力の籠つた聲で、『畜生！馬鹿！』

『…………』

『野呂間！意久地なし！』

『…………』

『かかアの前ぢや、何とも云へんぢやないか？』
『あれでもかい？』
『さう、さ。――では、離縁の離の字でも云ふたか？』
『云つて、何の役に立つ？』
『役に立たんでかい？めかけ、めかけ云はれて、こッちは人聽きが惡いぢやないか？』
『惡くッたつて、仕やうがない、さ。』
『仕やうのないことがあるもんか？』
『仕やうがない。』
『ないことはない！』
『たとへあるとしても、ね』と、義雄はわざとおだやかに、『それが、もう、お前と何の關係もないよ。』
『どうして』と、お鳥は鳥渡氣を折られた。そして、投げ出してゐた兩

足を縮めて渠の方へ膝を向け直して坐つた。

『どうせ別れるのださうぢやアないか？』と、かう、渠はえぐつて見たかつたのである。

『さう、さ』と、かの女も意地になり、息を大きく呼吸し出して、張つた胸の兩乳のあたりまでも衣物の上へ動悸を打たせながら、『別れたけりや今からでも別れてやる――直病氣を直せ、直せ！』

『ふん、それにやア、藥を渡してある。醫者にも行かしてある。』

『それが少しも利かんぢやないか？』

『さうやき／＼するから、さ。』

『やき／＼せんでも、直りやせん――痛くて溜らないぢやないか？』と、自烈たさうにからだを振つた。

『それが惡いんだ。』

『あの醫者ッぽがよくないのだ！二週間で直るなどと嘘を云ふても、も

う二十日になつても、ちッともよくならん。旦那さんと相撲を取つたら行けません』と、醫者の口調を意地惡く眞似て、『人を馬鹿にしてる！そんなことしやせんぢやないか？』

『さう、さ――お前が病氣になつてからと云ふものは。』

『それに、何で直らん？――では、注入を日に二回に增て見ませうと云ふて、さうやつても、矢ッ張りもとの通りだ。も一度溫泉に行かんなら、もッとええ病院へやつて呉れ！』

『早く直つて、早く手を切りたいのか？』と、渠はなほ不平である。同じやうにいやな女だとは思ひながらも、千代子よりはずッと若くッて血があッたかいのがまだしもよかつた。

『手は切らんでも、早う直つた方がええぢやないか？』かの女は往生したやうに氣が落ちついて來た。

『それもさうだね』と答えたが、渠にはまだ早くよくなれと云ふ願ひ

もさう切實ではなかつた。もッといい女であつたらと云ふ希望に向つて行くと、心は段々現在からお留守になつて、こんな事情のもとにあるお鳥のからだなどは、暗い物置きのやうな小部屋にほうり込んで置けばいいやうな氣にもなつた。

『痛い、痛い』とばかり、かの女はあまへるやうな關西口調でその夜も頻りに泣き訴へてゐた。

十七

原口の家族にも知らせないで、義雄がお鳥を引ッ越させたのは、赤阪の仲の町の裏通りで、丁度、氷川神社の森の後に當つてゐた。

谷町から福吉町と今井町との間をあがり、氷川町を勝伯の邸前から神社前の阪下に出で、その通りを直左へ曲つて、二丁ほど行くと、一方は神社つゞきの森で、片側町になつてゐる。或琵琶彈の家のさき隣に小さい曖昧な料理屋があつて、そのさきが四五軒に渡つた二階建長屋だ。とッ付きが貸し蒲團、その次ぎが大工の手間取り、その次ぎが或護辯士のおやぢで、息子の家に使つた下女に孕ませて出來た子と其母と共に佗住まひをさせられてゐるもの。その次ぎは、職業の分らない夫婦だ。そのまた次ぎの角は辨當屋だが、そこだけは平家だ。

この四軒の二階の殆どすべては年中締め切られて、『明き間あり』

の張り札の懸つてゐないことはない。義雄も、父が亡くなるまで赤阪臺町にゐた時、そこを通るたんびに陰氣臭いところだと思はないことはなかつた。たまに珍らしくも戸がぽつりと明いたかと思つても、二三日してから通ると、もう、借り手はどこかへ行つたかして締つたまゝになつてゐる。

向ふ側が高い森で日光を遮るから、濕氣がちで行けないのだらうと、義雄は兼てさう思つてゐた。で、外を歩く時はいつも明き間を心がけてゐるに拘らず、そこだけは知つてゐてもお鳥に知らせなかつた。

ところが、かの女は醫者からの歸りに一ッ木から新町をさかのぼり、獨りでそこを見付け、大工の裏二階を月三圓で約束して來たのである。

たッた三疊の押し入れも何もない部屋だ。

『こんなところで辛抱する代り、大學病院か、どこか、もッとええ醫者に見て貰ふ。』からお鳥は引ッ越したてに云つた。

『さうするがいい、さ。』義雄も、かの女が遠慮勝ちになつて來たのを可哀さうだと思つて、つい、その氣になつた。が、どうせ自分との關係に碌な終りを告げる女ではなからうから、そのからだはどんなところにでもごろ付かせて置けばいいのだと云ふ下心があつた。

谷町で借りてゐた蒲團はそこを引き拂ふ時蒲團屋へ返したので、改めて隣から日に六錢の割で三枚一組のを借り、角の辨當屋から三度の食事を持つて來させて萬事を間に合はせた。

そしてお鳥は今回、毎日山王下まで歩いて行つて、そこから電車で牛込の逢阪下なる某婦人科病院へ通ふとになつた。この病氣には歩いたり、電車に乘つたりするのが行けないから、入院しろと云はれたと云つて、かの女はさうしたさうに諷じたが、義雄はそこまで贊成する氣にはなれなかつた。

それでなくとも、かの女の爲めに日に一圓足らずの金は、病院行きの

爲めに費えて行くのである。それを義雄は全く無駄な必要だと思ひながら、出した。

『自分がこんなけッたいな病氣を移しさへせんなら、立派な帶や衣物が買へるのに』と、お鳥もいつも惜しさうにしてその金を持つて行つた。

學校を敎へてしやべり勞れた日など、義雄は直その足でお鳥のところへころげ込むことがある。そして、また病院から歸つてゐないと、何だか置き去りをでも喰はされた氣がして、落ち付くことが出來ない。

『あたいが逃げたら、どうする？』

『へん、丁度仕合はせ、さ――面倒がなくなつて。』

こんなことを云ひ合つたのも、義雄の本心から云へば、冗談ではなく、寧ろさうなるか、それとも亦くたばつて呉れるか、と云ふ風な願ひを絕

えず持つてゐながら、向ふから自分を突ッ放すやうなことはされたくないやうな氣もする。
もう、歸つてゐなければならないのにと思ふと、何をぐづ〳〵してゐるのか、不埓だとまで心が荒立つて來る。
下へおりて、薄暗い部屋で大工のかみさんと何氣なく話しをする振りで、お鳥がけふどんな風をして出たかと云ふやうなことを聽いて見た。また、二階へあがつて、その室の壁ぎはに、行李がその儘に置いてあるのに氣が付き、かの女の身代はこれだけで、これさへあれば、どこへもつッ走つた心配はないと安心した。
が、また、かの女の金唐紙の手文庫を明けて、何か怪しい手紙でも來てゐはしないかと調べて見た。然し、『叔母さん』と呼かけて北海道からいつもよこす姪のハガキが一つふえただけで、それには、『うちのお父さんはどこへ行きましたのでしようか、東京で見當りませんか』と

書いてあつた。これは義雄には耳新しい事實で、紀州の兄、北海道の兄の外に、今一人行方の知れない兄があることが分つた。が、お鳥はそれを隱してゐるので、渠も亦そ知らぬ振りをして文庫の蓋を締めた。

そして、あのじッと沈んだ目附き、意地惡さうな目附きには、かの女自身の秘密ばかりでなく、いろんな事件が這入り込んでゐるのだらうと考へた。

疊んだ蒲團は、唐紙の後のあかり取りがない中座敷へ押し出してあるから、唐紙を締めて置けば見ないでも濟んでゐるが、この三疊だけは明るく開いて秋の西日を受けてゐるので、障子の切り張りや壁紙のはがれがよく目に付いて穢い。

そこへ持つて來て、行李のあると反對の壁ぎはに、古道具屋で買つた古い〳〵ちやぶ臺を机がはりに据えて、その上に義雄が持つて來た雜誌現代小說や趣味や中央公論などが載せてあつて、レッテルに桃の繪

を出した鑵詰の空鑵が筆立てになつてゐる。また、ふちの焦た箱火鉢に安ッぽい藤づるの大土瓶がかゝつてゐるのを見ても、

『よくこれで默つてるな。』義雄は獨り冷やかにほゝ笑んで、こちらからかの女を突ッ放してやる時機を考へて見た。

『然しどうしてるんだらう——遲い！』

かの女がゐればまだしもだが、かの女のゐない部屋は穢いばかりで、坐つてゐる氣になれない。

立つたり、しやがんだりして見たあげく、どうせ、お鳥が歸つて來たら、きッとまた

『早う直せ、直せ』の一天張りだらうと思はれて、その苦い顏を見たくなくなつた。

玉突きにでも行つてやれと、思ひ切つて立歸らうとすると、隣の屋敷から艶ッぽい女の聲が聽こえたので、ちよつと障子を明けて見た。

その屋敷の裏庭には、大きな柿の木があつて、枝々には澤山の實が赤く熟してゐて、その下にひよろ高いコスモスの花が白や薄紅に咲いてゐる。が、よく激烈な夫婦喧嘩をする金貸しの美しい細君の――聲であつたと確に思ふが――姿はその椽がはにも、どこにも見えなかつた。

無地の牡丹色メリンスの被布も、紀州にゐた時拵へたのだらう、田舎者じみてをかしいのだが、お鳥がいい氣になつて着澄してゐるのを幸ひ、義雄はそッとそのまゝにさせてあつた。

すると、かの女はその姿でいつの間にか三枚四十五錢の寫眞を取つて來て、却却氣嫌よく、

『よう寫つただろ』と、自慢さうに義雄に見せた。『あすこは安うて、上手だ。』

『案外苦い顔もしてゐねい、なア』と、渠は冷かし半分に答へた。

かの女の病氣は、何か少し事情の變るたんびに、その當座だけよくなる。毎日の小使を少しかためて前渡しした時がさうだ。赤阪見附で注入を日に二度にするやうになつた時がさうだ。牛込へかはつて、さう注入ばかりしたッて、利くと云ふ譯のものではないと云はれた時がさうだ。病院でどこかの若い細君と知り合ひになつた時がさうだ。義雄と一緒にうなぎ飯でも喰べに行つた時がさうだ。そして暫く立つと、また〳〵痛い〳〵と泣き出す。

義雄はそれを氣の加減だ、かの女の神經が獨りで病氣をよくもしたり、惡くもしたりしてゐるので、實際は決して直る方には向いてゐないのだと思つた。

『おれも經驗したから云ふのだが、痛みを忘れてゐるのが一番だよ。』

と、かう云ふことを云つて聽かせても、かの女は却〳〵承知しない。

『人のことだと思て、ちッとも思ひやりがないんだ――このちく〳〵す

るのが、眠つてをつたッて、忘れられるもんか？』

さうは云ふものの、お鳥が餘りいやな顏、苦い顏をするのを義雄の避けるやうな樣子が見えて來たので、かの女もそれと悟つて、渠が來た時は成るべく笑顏を見せてゐようと努めるやうになつた。

今、見棄てられては溜らない。

この傷あるからだを義雄の外誰れが世話して吳れよう？

何と云つても、今の場合、このざまをして兄弟のところへも歸れず、さりとて賴る友達もない。男がついてゐて吳るのでこそ、まだしも心丈夫なところがあるのである。

この切ない利害關係がまたおのづから男戀しい心持ちを產み出し、產み出しして、每晚のやうに義雄の來るのが待たれた。

義雄も亦我善坊で寢ることは滅多になかつた。晝間のうちは、けふは出ないでゐよう、時々はお鳥を獨りで寢かして、寂しい目をさせてや

るのも、男を一層熱心に思はせる藥だと考へてゐながらも、夜になると直習慣のやうに氣が變つて、ふら〳〵と出て行くのである。『御馳走を拵へて待つてたのに早う來ないから癪に障つてみな喰べてしもた。』こんな單純なお鳥の恨み言が却つてよく義雄の心を引いて、けふはまた何か出來てゐるか知らんと云ふやうな樂みを抱かせた。

それも、然し初めの間は成るべく宵から出かけるやうにして見たが、段々圖々しくかまへるやうになつた。しなびた茄子の鴫燒きや、丸切り大根のお汁に蜀黍粉をこね丸めて入れたのやで、冷たい辨當飯も珍らしくなくなつた。

義雄はこの頃時間が惜しくて溜らないのである。家への補助は學校から取る分を裂けばいいとしても、自分の書籍代や交際費や、お鳥の生活に病院費は、別に原稿を書いて儲けなければならない。

それに、原稿生活を眞劍にするだけの努力があれば、それを以て何か

一つ大儲けの出來る有形的な事業を眞面目にやつて見たいとも考へてゐる。

そんなことを考へると、勞力に報いるだけの報酬が取れないやうな原稿などは書くのもいやになることがあると同時に、お鳥のやうな女にかかり合つてゐるのも馬鹿〳〵しい氣がする。それやこれやで氣が荒立つて來ると、燒け半分に筆も何もほうり出し、千代子を投ぐりつけた時などと同じ心持ちで家を飛び出し、半夜を全く玉突き屋で過ごしてしまうことも度々だ。

それでも、矢ッ張り、結局は、中の町へ車を驅けらし、寝てゐる大工の家をたたき起して、お鳥の二階へ通つた。

お鳥は然し義雄が蝙蝠か何ぞのやうに夜――而も遲く――來て、朝は直歸つてしまうのを不平であつた。

『もッと早うお出よ、下は働き人で寢るのが早いから』と云つた。

『然し時間が惜しいのだ。』

『時間が惜しけりやア、ここで勉強したらええぢやないか？』

『議論なんかになると、參考書がなければ書けない。』

『では、それも持つて來たらどう？』

『一々持つて來られるものか、こんな狹いところへ？』かう、ぶし付に答へたが、義雄はかの女から妻子のゐるところだから離れたくないのだらうと云はれるのを先きまわりして、『我善坊には、ね、おれの讀破した書物が澤山あるのだ。その書物のあるところが、おれの家で、妻子など眼中にないのだから、これは豫め斷つて置くよ。』

『どうだか、へん、分るもんか？』

『それが分らないやうな女ぢやア、色男など持つ資格はない。』

『色男ぢやない。』

『さうか、ね？』

こんなことを云ひながらも、渠はお鳥のそばでは氣がゆるんで、仕事が手につかないのを身づから知つてゐる。が、さう明らさまにうち明けることは自分の弱みを見せてかの女を勝ち誇らせでもするやうに思ふから、したくなかつた。

この頃義雄の心を頻りに競爭的に刺戟するのは、畫家大野正則の努力と成功とである。大野はもとから非常な飲酒家で放蕩家だ。それが前の細君を虐待して、今の靜子を入れようとした時、義雄は隨分と意見もした。が、大野は少しも用ゐる樣子はなかつた。

丁度、靜子をモデルにして大きな油繪を書いたのが上野の展覽會で多少の評判になつた時のことだ。靜子も畫家だが、その畫風とお轉婆らしい氣質とは大野の大嫌ひであつたのを、義雄は無理に勸めて渠の適當なモデルにさせた。ところが、靜子の愛嬌が大野の心を占領して、

二人はついに戀と名聲との爲めに有頂天になつてしまつた。

その頃、義雄は妻子を茅ケ崎の海岸へやつてあつたので、毎日のやうに大野の家へ遊びに行つてゐた。それが、ありはしない厭な噂を二重に立てられることになつた。と云ふのは、田村が自分で關係してゐた靜子を大野に取られたので、その恨みに報いる爲めに大野の細君を自分の物にしてゐると云ふのであつた。

そんな詰らない噂で馬鹿を見るのもいやな上に、友人としての大野の餘り小ぽけな滿心と餘り締りのない放縱とを反省させる爲め、激烈な絕交狀を送つて、一年半ばかり交際を絕つてゐた。

『あの、君の檄文は大事に箱の中にしまつてあるが、時々思ひ出しては奮發してゐたのだよ』とは、再び行き來するやうになつてからの大野の白狀であつた。

靜子のモデル繪はそれッ切り世の中から忘れられたが、大野と靜子

との眞面目な共同仕事は、現今、新式の芝居の書割などに現はれて、着々渠の素養と技巧とを見せてゐる。

それに比べると、義雄の現在は大野の三四年前である。『忠告した者が今度は忠告せられなければならないぢやアないか』と義雄が云はれたのを、大野一個の友情から出たのだとは思はないで、却つてこの第二の忠告者の概括的な、世間並の、何も同情のない、ただの皮肉だと受け取つた。

そして義雄は自分を唇の取れた齒のやうに寒く觀じた。放縱だと人に云はれるのは、寧ろ自分の意氣込みの一部面を指摘せられたやうで氣持ちがいいのだが、友人までに――ただに大野ばかりでなく、自分の屬してゐる龍土會の諸氏からも――いやな皮肉や冷笑などを當てつけられるのが、この頃、非常に氣になつて來た。自分の精神的事業は、如何に親しいものにでも、見えないのだ。寧ろ

實業のやうな見える事業をやつて見せるに限る——それにしても、さきに詩を以てばかり立つてゐた頃の勢ひは、その半分もない樣に、義雄は自分ながら感づかれた。

それやア、『デカダン論』も出版したし、小說『耽溺』も書いた。また、一昨年から段々に發表した長短論文を集めて、現在、『新自然主義』と云ふ書を印刷に附させてゐる。が、詩界から散文界に移つたゆるみがまだ直らないで、新しい立ち場を社會的に樹立してゐないのが、如何にも義雄の苦痛だ。

そこへ持つて來て、生活費がずんずん高まつたので、もッと金を儲ける爲めにも、何等かの發展を講じなければならない。大野のところへ呼ばれて、贅澤な御馳走になる時など、義雄は却つて友人が憎くて、憎くて堪らなかつた。そして、

『おい、しッかりしろよ』と、脊中を一つ叩かれて來た日など、義雄は一

H家にふさぎ込んでゐた。

『これからまた夜學のお勤めですか』と、千代子がこわい顏で冷かすのを、いつも聽き捨てにして出る。が、若し跡をつけてでも來ると面倒だと思つて、わざと反對の方向へ足を運ぶ。それでも、なほ且後を見い見い、お鳥のゐる方へ足が向き出すと、結局同じ近道へ這入ることになる。

それは今井町から登つて、氷川神社の裏手を通る、晝でも薄暗い道で——神社の森には、昔、天狗が住んでゐたといはれてゐるが、今は、裏門のところに猿を三匹飼つてある。その高臺から眞下に、樹木の間から、お鳥のゐる長屋が見える。

その高臺から降りる曲りくねつた阪の中途に、大野がもと借りてゐた家がある。今は何者が住んでゐるか知らないが、そこを通り過ぎる

たんびに義雄は、大野の盛んな現狀に自分を引き比べて、氣のゆるんだやうな、失意のやうな嫉妬のやうな感じに打たれたり、また芝居の書割なんて金の取れるだけであつて、その仕事は何の價値もないと云ふやうな別な競爭心を起したりした。

それがいやで溜らないのだが、矢ッ張り、そのさきに引ッ張るものがあるので、毎夜のやうにこの近道を通つて行く。

……まだ父が健在の時だ、大野のもとの細君が今一人別な畫家の細君を連れて、三月の節句に、宵から、白酒を飲みに來た。……女だてらに、何ぼ何でも、四合瓶を明けてしまうとは驚くぢやアないかと、父は蔭で不興な顏をした。……二人とも強いのだから仕方がないと云ふと、亭主がみんな飲んだくれだから、いい氣になつてゐるのだ。注意しろ、と、また父は云つた。……義雄は然し共々に笑ひ興じて遲くまで二人を持て爲して、家から送つて出た。……

『わたし、醉つてふら〳〵するわ。』

『わたしもよ。』

『倒れちやアあぶないです。』

こんなことを笑ひ合ひながら、氷川の森に來たが、夜中の道が殆んど眞ッ暗なので、女どもは眞面目になつて、聲も碌に出せなかつた。

神社の裏門のところで、義雄が、

『そら、猿が――』と威かして見たら、二人は同時にきやッと叫んで渠にすがり付いた。……………

千代子などとは違つて、大野のもとのは優しい、いい細君であつたのに――然しまた今のもお鳥などとは違ひ、所天の片腕になつてゐる。

などと、友人の身の上を非常に妬ましく思ひながら、渠の近眼でそこの阪を闇に辿りながら下りた時は、もう、夜中の十二時に近かつた。

しんとして、――道に落ちた木の葉がゆるくさら〳〵と風にころがつ

てゐる音がするばかりだ。
俄にお鳥のあッたかい床が戀しくなつて、貸蒲團屋の今にも消えさうにまたたく瓦斯燈の隣に急いだ。
飛び付くやうに戸口を目ざして進み、晝間なら穢らしい變色の水が流れてゐるのが見える太い溝を、溝板をがた〳〵音させて渡つた。
戸には無論締つてると思ひながらも、鳥渡手をかけて見た。
果してさうであつたが、どうせ明けて貰ふのだから、ただ立て寄せて置いて呉れたらいゝのに――下のもの等がわざとさうするやうにも考へられた。
癪に障るやうな氣と氣の毒なやうな思ひとが一緒に湧き溢れて來て、渠は先づ輕く戸を叩いて見た。
『いッそのこと、これからどこかへ行つて、獨りで飮み明かさうか？も

う、二ヶ月足らずと云ふもの、完全な女のからだにも觸れたことがない。ー外に立つたまま、ふと思ひ浮べたのは、下の人々もまだ逞ましい男と女であることだ。而も既に丈夫な子が一人ある。

牡牝の獅子はどんなに暗い洞穴にでも一緒に住む、人間もさうだらう。こんなに周圍も穢い陰氣な濕ッぽい家にゐて、而もなほ子供を産んで行く。

かう考へると、この暗夜に、わざわざ渠等と同じ穴も同前な家に眠りに來る義雄自身も、人の形をした毛だ物で、たとへ獅子でないまでも、狼か山猫のやうだ。

隣の瓦斯燈の光も消えかかつてゐるだけ、夜と云ふ暗い獸的な氣分がみなぎつて、闇に覺める官能の力を誘出したのだらう——犬が鼻先で物を嗅いだやうに、ぷんと格子さきの溝のいやな臭が義雄の一方より利かない鼻に聽こえて來た。

『こりやア溜らない。』渠は思はずその溝を渡り返した。　が、折角來たのが惜しいやうでもあつて、立ち去り兼た。

香水――渠にはこの刺戟がなければ、強い性慾も起らないほど、疲れてゐた――のついたハンケチで鼻を押さへながら、また引ッ返して戸を叩いて見た。――返事もない。

小さい節穴や戸の透き間から覗いて見ると、中もひッそりして暗いやうだ。が、何だか、あの彌吉と云はれる子供が今にも目を覺まして、母獸の寢てゐる懷を四足で這ひ出し、わんとか、にやアとか啼きさうな氣がした。

思ひ切つて、どん／＼、どんと大きく叩いて見た。

『誰れだ』と、奥の方から怒鳴つたのは、毎朝鉋や手斧を持つて出て行く主人の大工だ。

義雄は直ぐ獅子の猛り狂ひの怖ろしさを想像した。　が、毎晩、來るも

のは決つてるのに、人を馬鹿にするも程があると思ひ返した。
『田村です。』少し強い角立つた返事をすると、
『さうですか』と云ふ前の權幕とはころりと違つた聲が聽こえた。
それも大工の聲であつたが、それツ切りで――人の出て來るけはひはない。
渠は全身が總毛立つほど威嚴のない、見すぼらしい恥辱を感じて、秋の夜風をしみ〴〵と心の底までも呼吸した。
あんな劣等な人間にまで馬鹿にされて、自分の社會に於ける立ち場は全く零になつたではないか。
一般社會には精神的なことは分らない。
大野は矢ッ張り利口だ――自己の生活を確める爲めに、同じ性質の仕事でも、成るべく世間に知られ易い芝居の書割のやうな物に向いて行つた。

文藝のやうな無形的な事業では、どうも滿足出來ない氣がする。何をしたッて、自己の發展なら、おのれの主義と主張とは通る筈だ――早く一つ書割などよりもずッと有形的な事業をして、名譽と金錢とを自分の內容的實力と共に兩得して見たい。

金錢さへどッさりぶち撒ければ、此麼叩き大工のやうな――浪漫的なおほ法螺で通つた耶蘇の前身のやうな――ものは、百人でも千人でもぺこ〳〵させてやる。

有形的にさしたる事業もしない恥辱――かう云ふことを義雄はただ一瞬間にさま〴〵と考へて見た。

そして冬の霜が人の皮膚を燒きつけるやうな冷たさを帶びながら、今一度思ひ切つて、

『明けて下さい』と、戸をどん〳〵させた。

『清水さん、早く明けて下さい』と、下の大工が叫んだ時、お鳥は火をつけたランプを持つて、もう、二階から下りかけてゐた。

明い光が戸の透間から義雄に漏れた。

障子を明けて土間へ下りるもののけはひがする。

重い黒鐵ででもあつたやうな戸が、やがておとなしく明いた。

義雄は默つて這入り、默つて自分で戸を締め、格子を締めた。

あがり段のあげ蓋の上に置いたランプの光に、お鳥がじッとこちらを見あげた不平さうな顔が、一寸は色白く見えた。

渠が手ぶらでさきに立つてはしご段をのぼる時、ちよッと下の夫婦の樣子に目を放つたが、もう、鳥渡見に炬燵が這入つてるらしく蒲團の中を高めて、子供と反對の方に並んで寢てゐた。

『どうだ、下のあッたかさうなことは』と、義雄は上にあがつてからお鳥に初めて私やかに聲をかけた。

『いつもあれ、さ。』かう、かの女は答へて冷笑した、『だから、明けて呉れんのだ——何で、もッと早う來ない？』

『仕事に興が乘つてゐたから——』

『こんなにいつも遲くなるんなら、いッそ來ん方がええ。けさも、下の人が迷惑だと怒つてゐた。』

『ぢやア、間貸しをしないがいい。』

『けれど、自分も惡いぢやないか』と小言らしく云ひながら、かの女はランプを置いた机の方と反對に蒲團をかぶつて木の枕に就た。

義雄が机の前に横向きに坐つたまま返り見ると、ランプの蓋にまた半紙の切れを垂れてあるのがかの女の顏に特別な蔭を投げて、その白い色を却つて透き通るほどの薄化粧に見せてゐる。

渠はそれに見惚れながら、

『でも、ね、借りた以上は、その部屋の主が遲く出ようが、歸らうが、明け閉た

てして呉れる義務がある。』
『清水さんが見に來て貸したんで、田村さんに貸したんぢやないツて、めんどくさがつてるぢやないか？』
『そんなら、立て寄せて置いて呉れりやアいい。』
『それも無用心だ云ふてる。』
『何も取られるやうなものもないぢやアないか？』
『箒一つでも惜しい、さ――それに、下のかみさんはあたいよりええ衣物を持つてる。こないだ、それを自慢さうに出して見せた。』
『美ましかつたのだらう？』
『そりやさう、さ――自分が買うて呉れんぢやないか？』
『まア、さう云ふな。おれも今考へてゐることがあるから、それが決つて一儲けすりやァ、何でも好きな物を買つてやらア、ね。』
『本統？』から云つて、にこ付きながら、かの女がちよッと首をもたげ

た時、光と蔭とがその顏の色をちら〳〵と刺戟して、幻燈に寫つた美人のやうに奥ゆかしかつた。

電燈使用の室で見ては氣が付かなかつたことが、ランプになつてから、その薄暗い蔭の中に包まれたお鳥の寢顏は、晝間むき出しの、押しつぶしたやうな、田舍くさい顏立ちとは丸で違つて、物凄いほど奇麗だ。

『妖女！閨中美人！』かう云ふ考へが義雄の心に浮んだ。と同時に、また、顏の輪廓にどことなく人並より締つてゐないところがあるのを、紀州には多いと云ふ穢多に生れた娘ではないかと思ひ付いた。さう思ふと、顏ばかりでなく、肉體の肌合がどこもすべて締りがないやうであつたのに氣が付いた。

前の男がおん坊であつたなどとは眞ッ赤な嘘で――おのれにこの弱みがあるのを假りに人にこつけて、氣休めにしてゐるのかも知れない。

それで尻も輕く、素性を隱せる東京へ出て來て、人並の出世を望むの

だらう。

かう考へると、義雄はかの女が迷はしの術中に全く落ちた初めての犠牲である氣がして、興ざめた目を鋭く見開き、眼鏡を通して、暫くじッとかの女の妖相を見詰てゐた。

十八

穢多だ、穢多に相違ないと云ふ考へが、どうしたものか、お鳥に對する義雄の心を占領するやうになつた。

かう考へ込むと、かの女がその親類や兄弟のことを成るべく云はないやうに避けるのも、意味があるやうだ。

おやぢは北海道へ行つて金貸しをしてゐたが、紀州へ歸つて死んだこと。紀州の兄は醫者であること。お鳥自身は北海道にゐた時柔術を習つたこと、東京へ來て矢板裁縫に學んだこと、國へ歸つて裁縫の代用教員になつたこと。こんなことは、かの女の言葉や義雄の繼母の二三年前實見した記憶で分つてゐるが、現に、叔母さんと云つてよこす實の姪が父の行くへを尋ねて來たそのハガキを、義雄に見られてゐないがら、あれは兄のことではないと隱してしまう。

では、姉の亭主かと聽くと、女兄弟はないと云ふ。きッと、その兄も素性の惡いのを看破せられたので、妻子を棄ててまでも、妹と同樣、もッと世間の廣いところへ飛び出したのだらう。

今、北海道にゐると云ふ方の兄のことでも、何を職業にしてゐるか、いやがつて、うち明さない。

これも、屹度、皮剝ぎか何かであらう。

かう考へ込みながらも、却つてますますお鳥の幻燈のやうな顏へ心が向つた。

或朝、そこから直學校へ出勤して、二階の敎員室にあがると、義雄に最も多く同情を持つて吳れてゐる專任敎諭が、

『田村君、鳥渡』と、渠をさし招いて、外の廊下に出た。

そこから、廣い運動場を隔てて、同校の設立者兼校主の高い立派な邸宅がよく見える。義雄はそれを望む度每に、なアに、おれのやつて來た

事業は無形のものだが、若し有形的に見つもれば、決してあれには優るとも劣らないと云ふ奮發心が起るのである。

御用商人の校主は早くから望んでゐる男爵をまだ貰へない。然し若おれであつたら、もう、迅くになつてゐた筈だらう。見識が違ふ。素養が違ふ。品位が違ふ。眞劍の程度が違ふ。と、かう云ふ品定めをすることもある。

この邸宅に向ひながら、渠は專任敎諭から豫期してゐたことを申し渡された。

『君のこの學校に於ける運命もいよいよ定つたやうだ。敎授もうまく、生徒にも人望があるからと、どう辯護して見ても駄目であつた――君は校長並に學監の男爵閣下に受が惡い。』

『そりやア承知の上だが――すると、僕から辭表を出さうか？』

『まア、それは待ち給へ、僕が時機を見て、また君に注意するから。默つ

てそッとして置きやア、來年の二三月頃まではいいだらう。』

『僕は、もう、どッちでもいいよ――今度また新しい論文集を出すから、前のと同じやうに惡く注意されるに決つてるから。』

『それも君の主義から來るのだから、まア、いい、さ――兎に角何か別な口を見付けて置き給へ、僕も心がけては置くが――』

『今度ア、もう、僕、敎師なら大學程度のでなけりやアいやだ――うるさいから。私立のでもいいから、あつたら賴む――が、僕は、それに、全く別な事業をやるかも知れないので――然しこれも商業學校などを敎へてゐたおかげだとも思つてゐるのだ。』

『何をだ』と、敎諭は好奇心を起したが、丁度その時、敎授開始の時間が過ぎてゐたので、生徒の一人が義雄を呼びに來た。

渠は英語の敎科書をより分けてから、引き締つた熱心の顏で、勢ひよく受け持ちの敎室に這入ると、まだ物も云はないうちに、滿場の拍手喝

采が起つた。

十九

義雄はこの頃新出版書の校正やら、新事業の調査計畫やら、お鳥のまた痛みを訴へ出した面倒やら、いろんな惡口を云はれてゐるのを知つてるやらで、殆んど全く友人を訪問しない。

私夢のところへも、笛村のところへも、大野や村松のところへも珍らしいほど丸で無沙汰だ。

向ふからも亦滅多に來ない。と云ふのは、女のもとにばかり入り浸りになつて家には殆んどゐないだらうと云ふ間違つた推察をすべての友人が持つてゐるからである。

度々やつて來るのは、たゞ加集泰助と云ふ國の小學校時代からの友人で――いろんな社會へ首を突ッ込んで、口錢取りをしてゐる。殆ど全く英語が讀めないのに、ハガキなどへよく自分の姓名を羅馬字の頭字

だけで書いてよこすので、多少英語のやれる千代子などは馬鹿にして、『加集さん』と、おもてには尊敬しながら、かげでは『あのTK』と呼び棄てにするのを常とした。

義雄はこの男を新事業の相談相手にした。口さきばかり上手な男だと思つてるから、無論、さう深いことは打ち明けない。が、いろんなことを實地に就いて調べて來て呉れるのが調法だし、また、第二流、三流の實業家なら大抵の人を知つてるから、いざと云ふ場合の橋渡しにはなりさうだ。

義雄の計畫とは、先づ、蘭貢米の輸入である。この計畫は渠が數年前既に或老友の手下になつてやりかけたことだ。七八ヶ月もかゝつて、向ふと手紙の往復を數回したり、向かふの事情やこちらでの賣り捌き方を研究したあげく、大船一船の注文を電報するいざと云ふ場合になつて、資本家の某は保證金を入れるのも自分だから、注文も自分一手で

やると云ひ出した。

『何のことはない、膳立をして、御馳走にあづからなかつたも同前だ、なア』と、老友もがッかりした。

それを今度は義雄自身が主になつてやつて見たいのである。今一つは、九州の或炭鑛の無煙炭を、茨木無煙よりもずッと安く、東京並にその附近までも持つて來られることが分つてゐるので、その賣り込方を競爭して見ることだ。

そのどちらかに手を付けようとするのだが、義雄はまだどちらとも決心することが出來ない。

『そりやア、どんな大きな計畫でも、計畫だけは立ちます、さ。けれど、その資本はどうするんです？』

から、千代子は加集もゐる義雄の室に這入つて來て、ぶしつけに云つた。二人は物好きに買つて見た馬肉鍋を突ッつき合ひながら、晩酌を

やつてゐた。

『まア、奥さん、一杯』と、加集は千代子に盃をさしてから、『資本と云ふのは、その、今、僕が資本家を見付て來ます。』

『うまくそんな人が見付かればいゝですが、ね。』かの女は一向に信じない樣子だ。そして、義雄の氣振りが此家を賣つて資本を拵へようとしてゐるらしいのを感づいてゐたので、『この家を賣るやうなことはわたしが不贊成ですから、ね、これだけは前以て斷つて置きます――亡くなつたお父さんから、跡はしッかりお前に頼む、義雄のやうに浮々してゐても困るからと、わたしが重々頼まれたんですから。』

『生意氣なことはいふな――あッちへ行け！』

義雄はかう千代子を叱りつけて、加集に猪口を返した。

渠の胸には、實際、家を賣つてもと云ふ考へがあつた。それを知つて、また加集は渠につき纏つてゐるのである。

新出版物の校正のことで、築地の或印刷所の主任と云ひ合ひをした歸りだ。義雄は喧嘩の跡で意志が通じたと云ふ氣持ちがよく、電車を芝公園の御成門で下りると、向ふから海軍水路部の前を、弟の馨がいそ〳〵とやつて來た。不斷のやうなぼんやりッ子でない樣子も變だと思はれた。田舍の村長じみた洋服のおやぢが一緒に附いてゐる。

『どこへ行く？』

『一週間ばかり前橋へ行つて來ます。』

『さうか』と答へた切り、行き違つたが、あれが上州にゐると云ふお君のおやぢで、飮んだくれの警部だ、な、と分つた。

お君と云ふ女は今も小學校の敎員ださうだが、我善坊に住んでゐた時、お鳥と共にお轉婆の仲間であつたのを繼母が知つてゐるので、馨との結婚に不贊成を唱へてゐる。然しそれは、一方に、繼母が自分の姉の

娘を入れようとしてゐるからなので――その目的は丁度、かの女が四十歳でこの家へ來立てに、義雄の千代子と出來た仲を裂いて、おのれの貰ひ娘を入れようとしたと同じた。

『さう繼母の都合いいやうには行かない』と、義雄は明らさまに云つて、その代り、安心して隱居で澄まし込んでゐればいい。父がゐないからッて、父の後添ひを虐待するやうなことは、兄弟ともしないからと語つたこともある。

然し繼母に取りてはすべての目論見が外れてしまつた。貰ひ娘は、かの女がここへ這入る前に、自家へ下宿人を一人置いたその人と一緒になつてしまつた。お君のある爲めに、姪を入れることも出來なくなつた。比較的に子飼ひから育てた馨に跡を繼がせようとしたのも、矢ッ張り、義雄が取つてしまつた。その上、つれ添ひには死なれた。

今の戸主なる義雄には、かの女が腹を洗へば合はせる顏がない。渠

はこれをよく察してゐるから、成るべくそッとして置くのであるが、どちらかと云へば、腹を痛めさせない母によりも、骨肉のつながる馨の方に加擔する力が重い。

馨が前橋へ出かけて行くのは、繼母に取りて、優しい庭鳥の羽含み孵した鶩の子が水の中へ逃げて行くやうな痛ましさがあるとは察しながらも、義雄はなほ弟の出來た戀には少しも反對が無かつた。

が、ただ一つ義雄があはれに思つたのは、自分も既に經驗して分つてゐる通り、その戀人が年上の女だから、やがては、きッと、飽きが來ると同時に、そのいづれ、兄の承認を經て形成する家庭も、第二の田村家たる悲慘を現出するだらうと云ふことだ。

が、また考へると、自分と違ひ、弟は最も卑恐だ。臆病だ。そして素直だ。年上の女をでも、神經質に叩き落してしまうやうな思ひ切はないかも知れない。

『あれでお鳥とも關係したものとすれば、どッちがさきへ手を出したらう?』この問題は、もう、さして義雄の氣にかからなくなつた。人摺れのしたお鳥が手を出しかけたかも知れないが、正直に一人を思つてゐるらしい馨は、きッと應じなかつたに相違ない。

こッちはお鳥に對する熱心が段々冷て來たのに反し、お君に向ふ馨のあの嬉しさうなざまを見ろ。――丁度、十六七年前、千代子とおれが出來た時の年輩でもあるから。

かう思つて、義雄は振り返つて見た。木綿着だが小ざッ張りした姿の馨が、一心にかかへて行く布呂敷包みは、その一週間に必要な自分の着更へか、寢卷らしい。

『何だ、馬鹿々々しい、その日通ひの妾ちやァあるめいし!』

馨が巴町の小學校へ移るまで行つてゐた代用小學が、海路部の前か

ら愛宕山と芝公園との間を登つて西の久保廣町に下りたところにあつた。

また、渠が餓鬼大將の手下どもであつた蠟燭屋や、葉茶屋や、或はまた藥屋の息子連の店が神谷町、八幡町などにある。

かう云ふ道を通りながら、義雄はその弟と弟の溺愛者であつた父とのことを考へつゞけた。

そして家に行きつくと、玄關の廊下から裏椽へ出たところで、池を隔てた離れの繼母から聲をかけられた。

『馨が、ねえ』と、かの女は人よりも早く出した綿入れを着て、向ふの椽がはへ出て來て、寒さうに二つの袖を胸で合はせながら、『一週間ばかり、前橋へ行つて來るから、兄さんによろしく云つといて呉れいッて云ひ置いて行きましたよ。』

『ああ、今、そこで會ひました。』

『さう――兄さんがおこりやアしないかッて、心配してイましたよ。』

『ふん』と、椽がはの端を足で無意味にこすりながら、『あれがおやぢなのか――田舍の村長臭い？』

『ええ、さうです。あの人が來いッて、つれてッたの。』

『嬉しさうに、いそ〳〵して、さ、丸で男めかけがお約束にでも出かけるやうなざまであつた。』

『ほ、ほ、可哀さうに――着たッ切りでも困るだらうと思つたから、寢卷きと不斷着を持たせてやつたのです、わ。』

『男めかけとは、さすが、あなたの思ひ付です、ね。』千代子も、突然かう云つて、をかしさうに鼻に皺を寄せながら、勝手につづいた子供室から椽がはに出て來た。

その頓狂な聲に驚いたのだらう、脊の高い丸太を立てた上に載つた手洗鉢の脇の枯竹に、一羽とまつてゐた雀が、ちゆッと啼いて飛んだ。

その拍子に赤い南天の實が一つ、二つ落ちた。

義雄はそれを見て、いやな物が自分のそばに近づいたと思つたやうに右の方へ少し避けた。そして、千代子には頓着しないと云ふ風で、目を伏して池を見詰めながら、

『もう、やがてこの金魚にも蓙か何か被せてやらなけりやア――』

『うちでは、それどころぢやアありません、わ』と、かの女は別な意味に突ッ込んだ。これも少し袷せを寒さうな風だ。それでも義理の弟の噂に立ちまじる考へで、『でも、わたしはあの子が一番好き、さ――素直で、正直で、また兄弟思ひで。』

『素直ぢやア御坐んせんよ』と笑ひながらも、繼母は向ふに獨りで考へ込んだ。『隨分薄情になつて來ました、わ。』

『そりやア、段々と大人じみて來たのだ。』がう義雄は云つて、繼母にそれとなくあきらめさせるやうに、『親がいつまでも、いつまでも、子を思

ふまに出來ると思ふのは間違ひだ。子は一人前になればなるだけ、その一人前の考へなり、精神なりが出て來る。それを、親と云ふものは自分を疎んじて來たと思ひ違へ易い、世間の舅や姑が嫁いぢめをするのも、みんな、わが子に對してそんな間違つた考へを持つてるからのことだ。』

『さうでしよう、ね』と繼母はお愛相に云つたが、矢ッ張り、もう、この家にゐられないといふ決心を轉ずることは出來なかつた。そして、千代子が何氣なく、『馨さんも、もう、元の五厘男ぢやアありませんね』と洒落たのを、繼母は自分に對する冷笑かと受取つた。

『五厘男』とは、馨が元五厘づつねだつて、通りの駄菓子屋へ行つたのを繼母が名づけた綽名で――その頃は意地が惡いかの女が無邪氣な渠を抱込んで、義雄と千代子とに最も強く當つてゐたのである。

執念深くついて來た千代子を見向きもせず、義雄は自分の書齋の座に就くと、『火を持つて來い』とはわざと云はないで、ただ空火鉢の灰を火ばしでかきまはした。そして、まだ耳がよくならないのに、またむづがゆい痔の起る時節が來たのを考へた。

渠は殆ど年中病氣の絶えたことがない。比較的に腦力と消化機能とは丈夫だと思つてるが、敎師として滋賀縣へ行つたのは、肺病の保養を兼てゐた。それは然し米國の哲人エマソンの場合に倣らつて、藥に由らず、自己の意志で直したと信じてゐる。然し、その後も毎年仕事が續き、徹夜などが度重なると、神經の疲勞に乘じていやな咳と肺尖加答兒が起るので、學校の長い休暇〳〵には、必ず海のしよッぱい空氣を吸ひに茅ケ崎の借家へ出かけた。それが遠のくと、また心臟だ――息切れだ。夜横丁の荷車にぶつかつた生傷だ。痔だ。鼻だ。痳病だ。人力車で引落とされた腕の痛みだ。電車に飛び乘りかけて失敗た足の傷だ。

またこの耳だ。近眼と齒痛と淺い呼吸器病と心臟の人並でない皷動とは殆ど常のことだ。それでも每日、思索か、執筆か、勉强か、遊戲か、談話か、徹夜を絕やしたことはない。

『デカダン論』の如きは、ひどい痔で床の中にぶッ倒れながら書き終へた。商業學校でやつた有名な語學演說などは、どもりながらも、大聲で二時間半もしやべつたが爲め、他人の聲か何ぞのやうにしやがれてしまつた。

『然しそれでこそ人生は活きる價値があるのだ』と、意地にも渠は自分を古英雄の雄壯な形式に近代的な內容を加へたものに譬へ、自己の發展、渠の所謂獨存自我の發揮はこの努力一つにあると信じてゐる。今回、計畫中の有形的事業と云ふのも、つまり、この努力に過ぎない。

ところで、追ひ〳〵寒さに向ふので、ふと氣が付いたのは、日本の極北、樺太で、鑵詰技師をしてゐる從兄弟のことである。あれを使つて、外國

貿易、殊に米國へ輸出貿易品中の一要素なる蟹の鑵詰をやらう。

『あ、蟹の鑵詰！』渠は思はず膝を打つて喜んだ。この事業のことは、從兄弟が去年歸つてゐた時も、義雄が父に勸めて資本を出したらどうだと云つた。が、父はそんな危險なことに手を出す必要はないとはね付けた。

それだ、それだ、多年わが國を最も子供扱ひにして來たあの傲慢無禮な米國に對し、商賣的にわが利益の鬱憤を晴らすのも、それだと、渠は即坐に決めてしまつた。そして厚い氷の張つた北極の氷野や氷山を探檢しに出かけるよりも以上の壯烈と愉快とを感じた。

『何を獨り笑ひしてイるのです、また清水のことでも考へたんでしよう？』

『下らないことアよせ――そんなことよりやア、もう、あの重吉が歸つて來さうなものだ、ね、樺太から。』

『あんなものァ歸つて來たッて、職工も同前ぢやァ御座いませんか――事業の資本なんか持つてませんよ。』

『知れ切ッてらァ。』

『あの子だッて、お父さんがゐなさつたからこそ尋ねても來たんでしようが、あなた丈では親類にも人望がありません。人に笑はれるやうな行ひをしたり、出來さうもない事業なんか計畫して見たり、さ。』

『手前の知つたことぢやァない！』

『でも、ね、お母さんも亦越後の娘の方へ行くと云つてますよ。』

『行きたけりやァ、勝手に行くがいい、さ。』斯う、ぶッきら棒に云つたが、義雄はひやりとして、母こそ薄情だ。父の四十五日をしほらしく蠟燭に線香を立てゝゐたのも、ほんの、うはッ面の所業で、內心はその時から逃げ腰であつたかも知れない。いやに莞爾しながら、この頃のわさ〳〵してゐたことはどうだ？行くなら行け！かう思つて、『何物でも、この

自分を遠ざかるものは、もう、無關係だ――死だ。父と同樣、宇宙の存在を失ふのだ』と心に叫んだ。

と、同時に、曾ては自分の妻にならうとまでしたあの女が、やがては雪も降らうと云ふ長岡へ、老いて痩せた母を呼び寄せ、下女同樣にこき使つて、安軍吏との仲に出來た多くの子の子守をさせやうとするのだらうと考へた。そして、あはれな母が今弱い立場にあるに乘じて、それをこちらから奪つて行かれるやうな氣がした。

『お母さんが出て行くと云ふのも、そりやア、元はと云やア』と、千代子は執念く義雄に忠告するつもりで、いやに落ち付かせたきよと〳〵顏を突き出し、

『あなたを信じないからです。僅かの間でも馨さんが出て行くし、お母さんも近々ゐなくなるし、友人だツて、あなたを喰ひ物にしようとす

るTK(ティケイ)の外(ほか)は、この頃(ごろ)ぢやア誰(だ)れも來(き)やアしないぢやア御座(ござ)いませんか?』

『來(こ)ないものア來(こ)ないでいい』とは反抗(はんこう)したが、義雄(よしを)はこの頃(ごろ)よく感(かん)じもし、主張(しゆちやう)もしてゐる自我(じが)の絶對孤獨(ぜつたいこどく)と云(い)ふことが、つくぐ自分(じぶん)の身(み)に染(し)み込(こ)んで來(き)た。そしてそれが心(こゝろ)のどん底(ぞこ)に水晶(すゐしやう)の氷(こほり)のやうな冷(つめ)たい火(ひ)を點(てん)じたかと思(おも)ふと、然(しか)し段段(だんだん)燃(も)え出(だ)して來(き)て、先(ま)づ健全(けんぜん)な腸(ちやう)に移(うつ)つた。腸(ちやう)から、また酒(さけ)やアブサントや待合(まちあひ)の料理(れうり)や西洋料理(せいやうれうり)を受(う)けた胃袋(いぶくろ)に移(うつ)つた。胃袋(いぶくろ)からまた、或時(あるとき)、健康狀態(けんかうじやうたい)で脈搏(みやくはく)を二百以上(いじやう)も打(う)つて醫者(いしや)を驚(おどろ)かした心臟(しんぞう)に移(うつ)つた。それから、また肺臟(はいぞう)に移(うつ)つた。肺(はい)から、また横ツ廣(よこッぴろ)がりではなく、體(たい)の前後(ぜんご)にゆとりを持(も)つた胸膈(きやうかく)に移(うつ)つた。父(ちゝ)のを遺傳(ゐでん)したと思(おも)ふ痔(じ)の箇所(かしよ)に移(うつ)つた。咽喉笛(のどぶえ)の飛(と)び出(で)た頸(くび)、骨(ほね)ッぽい手足(てあし)や毛臑(けやね)にも移(うつ)つた。

それがまた一時(とき)にぱッと燃(も)えあがると、おほ空(ぞら)一面(めん)、火(ひ)の海(うみ)のやうに

くれなゐの火焔となつた。

義雄はいつの間にか全身が熱鐵のやうに燒けて、生命だけは取り止めやうとする悲痛の籠つた眼をじツと千代子に向けた。そしてかの女は渠の低い、重い、强い、且深い調子の言葉を、見るも恐ろしい渠の目の聲と聽かせられた。

『友人は來ない。』馨は行つた。母も出て行く。これで淸水が自殺でもし、貴樣が姦通なり頓死なりして、餓鬼どもが揃つて燒け死んで吳れたら、おれの行動は最も自由だ。直この家を賣り飛ばして、おれが資本その物となつて、樺太へ行つてやる。』

『そんな馬鹿なことが出來ますか』と、千代子も意地に釣り込まれて、『お父さんの家です――先祖代々がこゝに、まア、云つて見りやア、結晶した家です。決してあなた一個の自由にはなりません。』

『先祖がおやぢになつたのだ――おやぢが乃ちおれだ！死んだものや

死んで行くものに何等の權威も實力もない！』

『でも、わたしが活きてる間は』と、堅い決心のある色を見せて、『決して許しません！』

『だから、早くくたばッてしまへ！』

『ひどいの、ね』と、かの女はあきれてしまつた。少し調子をゆるめて、

『あなたはよく死ぬことをおッしやいますが、ね、二人の子供が死んだのを豫言――まア、豫言でしよう――したのは、全體、どう云ふところからですの？』

『産れた時の泣き聲を聽いてだ。』

『どう違ひます？』

『活きる奴のは悲痛だ――死ぬ奴のは惚けてる。』

『でも、富美子と諭鶴のは當らないぢやアありませんか？それに、里にやつてあつた赤ん坊だッて、取り返してからも丈夫に太つてますもの。』

『然しどうせ死ぬさ。』と義雄は斷定して、思ひ出したことは、繼母が生れ立ての子にあんな神經病らしい千代子の乳を飮ませるのはよくないからと勸めて、東京近在の里ッ子にやつたのを、この頃、千代子が取り返して毛だ物の乳で育ててゐることだ。

『そりやア、人間は誰れでもおしまひにやアどうせ死にます、わ。』

『惚けて來りやア死ぬ、悲痛な間は活きる。』

『わたしはまた別な風に考へて見ました、わ、それが例の星ですの。』

『よせ、下らない。』

『では』と、冷かしの態度に變じて、『淸水のゐるところを當てて見ましようか？――何でも、斯う』と、うッとりして、目を內部に向け、『森のある近所ですの。』

『…………』義雄はぎよッとした。

『芝公園でなけりやア、山王さんの森かと思つて、探してゐるが、どうも、

それ以上はまだ心に感じて來ませんの。』

『もッと、呪へ、呪へ』と、輕蔑したつもりであつたが、義雄はかの女のヒステリ的に精神に異狀があると信じてゐるだけ、そこに又鳥渡一種の不思議な感じがして、自分が去年からわざ〳〵覺めるやうに努めて來た夢ばかりのやうな神秘の世界を再び思ひ浮べずにはゐられなかつた。そして、事業の樺太も、千代子のとは別種だが、性質は同じやうな熱心と專念とに浮んだ自己その物の示現だらうと考へて、かの女には內證で、今年はまだあちらにゐるのだらうと思ふ從兄弟の重吉に、直歸れといふ電報を出した。

二十

『おい、あの婆アさんが靈感を得て來たやうだぜ。』
『れいかんッて――？』
『云つて見りやア、まア、神さまのお告げを感づく力さ。』
『そんな阿呆らしいことッて、ない。』
『けれど、さうでも云はなけりやア、お前達のやうな者にやア分らない。――どうせ、神なんて、あるものぢやアない。從つて、神のお告げなどもないのだから、さう云つたところで、人間がその奥深い處に持つてる一種の不思議な力だ。』
『そんなものがあるものか？』
『ないとも限らない――ぢやア、ね、お前は原口の家族にでもここにゐることをしやべつたのか？』

『あたい、しやべりやせん――云ふてもええ思たけれど、自分の家へ知れたら困ると思て。』

『でも、あいつは、もう、知つてるぞ、森のある近所と云ふだけのことは。』

『森なら、どこにでもある。』

『さうだ、ねえ』と受けて、義雄はそれ以上の心配は語らなかつた。無論、千代子が或形式を以て實際にお鳥を呪ひ殺さうとしてゐるらしいことも、こちらには知らしてない。たださへ神經家であるのに、その上神經を惱ましめると、面倒が増えるばかりだと思つてゐるからだ。

が、お鳥も段々薄氣味が惡くなつたと見え、日の經つに從つて、義雄の話を忘れるどころか、あり〳〵と思ひ出すやうになり、つひにまた引ッ越しをしようと云ひ出した。もし知られると、今までにでも云はないでいい人にまで妾だとか、恩知らずだとか、呪ひ殺してやるだとか云つてるあいつのことだから、わざと近所隣へいろんな面倒臭いことをし

やべり立てるだらうからと云ふのである。

然し、この頃、お鳥はおもい風邪を引いて床に這入つてゐた。近所の醫者を呼んで毎日見て貰ふと、非常に神經の強い婦人だから、並以上の熱も持ち、それがまた並以上に引き去らないのだと義雄に説明した。その上、牛込の病院に行けないので、一方の痛みも亦大變ぶり返して來た。

かの女は氣が氣でなく、獨りでもがいて、『何て因果な身になつたんだらう。』と、三疊の部屋で寢込みながら、忍び泣きに泣いた。おもての方の廣い、然し向ふ側の森から投げる蔭を被つた室―六疊―には、憲兵が三人で自炊する樣になつてゐた。

義雄は同じ家にゐる憲兵等に物も云ひかはさなかつたが、毎日、晝間からお鳥の看護に努めた。同時に、自分もひどい痔に惱んだ。

重吉からの返電は來ず、東京に殘つてゐる女房に問ひ合はせると、北

海道の方をまはつてゐると云ふので、まだ罐詰事業の手初めも出來ないのが、無聊の感に堪へなかつた。
丁度、その時、我善坊の方へいいハガキが屆いた。
『龍土會例會――一、時日――一、場所――一、會費――右御出席の有無○○區○○○町○○番地○○○○方へ御一報を乞ふ――年月日――幹事――』と、印刷摺にしてある中へ、それぐ\必要な文字を入れたハガキであつた。
龍土會と云ふのは、おもに自然主義派と云はれる文學者連を中心としての會合で、大抵毎月一回晩餐の例會を開くことになつてゐる。幹事は二名宛のまはり持ちで、この月のは田島秋夢と今一名渠と同じ新聞社にゐる人の名が出てゐた。
義雄はこの會の最も忠實な常連の一人でもあるし、友人どもの顏も暫く見ないし、印刷を終つた自著『新自然主義』がいよ〳〵世間に出た當座の意氣込みもあつたことだし、喜んで出席することにした。そ

してお鳥が、その日になつても、義雄の痔が惡くなるに決つてるから止めて呉れろと頼むだのも承知しなかつた。

中の町から檜町の高臺にあがると、麻布の龍土町である。その第一聯隊と第三聯隊との間に龍土軒と云ふ佛蘭西料理屋がある。そこが龍土會の會場であつた。

義雄はそこに一番近いので、午後六時にはかッきり行つた。が、まだ誰れも來てゐない。

ボーイを相手に玉を突いてゐる内に、人がぽつり／＼集まつて來た。そのうちの一人が玉場に飛込んで來て、

『どうだ、久し振で負かさうか？』かう云つて直棒を取つた。例の歌詠みから株屋の番頭に轉じた男だ。『然し、ねえ』と、永夢軒に於ける義雄の失敗を持出して來て、『又電球をぶち毀すのは眞ッ平だぜ。』

『あれはどこの玉屋へ行つてもおほ評判ですぜ』と、そばにゐたそこの主人が少しおほ袈裟に笑つた。

「もう、大丈夫だよ』と眞面目腐つて答へながら、義雄も臺に向つたが、いろんなことが氣にかかつて、もろく勝負に負けた。

『よせく』と呼びに來たものもあつて、義雄も二階にあがつた。

渠を見るのは近頃珍らしいので、皆が話をしかけた。

「君の著書をありがたう』と挨拶するものもある。

「あんな短い紹介だが、取敢ず新刊紹介欄に載せて置いたよ』と云ふものもある。

『耽溺はどうなるのだらう』と、現代小說にやつた作のことを云ふものもある。

『君の女はどうした』と、ぶしつけに聽くものもある。

『顏の色が惡いが、過ぎるのだらう』と、穿つたつもりでからかふもの

もある。

『また痔が惡くッてね、閉口してゐるのだ』と、義雄が答へると、

『ぢやア、酒はやれまい』と、慰め顏に質問するものもある。が、渠は左の方から云はれた言葉を度々聽き返したり、聽き落としたりした。

やがて椅子が定まつて、日本酒の徳利がまわつた。

秋夢は幹事だから末席にゐる。渠は鋭い皮肉な短篇小說で名を出した人だが、外に、『破戒』を書いた藤庵がゐる。『生』を書いた花村がゐる。劇場のマネジャーを以て任ずる內山がゐる。また外國新作物の愛讀者で、司法省の參事官をしてゐる西がゐる。その西が紹介した農商務省の山本といふ法學士がゐる。株屋の番頭がゐる。工學士の中里がゐる。麴町の詩人がゐる。琴の師匠の笛村がゐる。漫畫で知られる樣になつた杉田がゐる。或出版店の顧問、雜誌の編者等もゐる。かう云ふ人々の中にあつていつも渠等の談話を賑せるのは田邊獨

歩であつたが、今年の六月に肺病で死んでしまつた。餘り出席はしなかつたが、矢張り會員であつた眉山は、獨歩の死ぬ少し前に自殺した。

眉山の自殺してから間もなく、茅ケ崎海岸の獨歩の病室で、『この龍土會の會員の中で、誰れが眉山の次に死ぬだらう』と云ふ話しが出た。

『無論、田村の狂死さ』と、毒舌家の病人は笑つて、『あいつが生てるうちに、おれは死にたくない。』

さう言はれるほど、義雄も隨分毒舌の方であるし、それを跡で聽いた渠は曾て獨歩の思想をまだ舊式だと批評したことがあるのを思ひ出したりしたが、今夜は甚だ勢ひがない。酒は平氣で人並に飲んでゐたが、持病のむづがゆく且痛むのを頻りにこらへてゐた。

花村は『鳥の腹』と云ふのを文藝倶樂部に出した男を捕へて、あの小說は描寫でない、下手な說明だ。きはどいところがあるのは構はな

いが、說明的だから、それを人に强るやうになつてゐる。挑發的だと云つて、發賣禁止になつたのも止むを得まい、などといぢめてゐた。藤庵は、或新聞記者に向つて、謙遜らしく、人生の形式的方面をどう處分してゐればいいのだらうと云ふやうなことを質問してゐた。西は內山や中里と共に頻りにイプセンやメタリンクやストリンドベルヒの脚本を批評し合つてゐた。

かう云ふ別々な話がいつまでも別々になつてゐないで、互ひに相交はり、長い食卓のあちらからも、こちらからも、機の梭が行き交ふ樣になつた時、義雄はその意味を取り違へたり、ただやかましい燥音が聽こへたりする瞬間もあつた。それが如何にも殘念で、この耳だけに關して云つても、もう、これ等の人々と自由に話し合ふ資格がなくなつたのかとまで思つた。

『田村が乙に澄ましてゐやアがるので、今夜は少し賑やかでない、なア』

と株屋の番頭の云ふのが聽こえた。『色女を持つと、ああ大人しくなるものか、なア？』

『けふは、何と云はれても、しやべる氣になれないのだ。』かう云つて、義雄は笑つたが、渠のいつも特別に注意を引くから〱笑ひも、それと好一對になつてゐる麴町の詩人の羅漢笑ひに壓倒された。

そして、花村の耳も鼻も目も內臟も、どこもかも健全で而も巖丈な體格が何よりも羨ましくなつたと同時に、獨歩の死んだ時、茅ヶ崎へ集まつた席で、義雄は自分が花村に向つて、君は僕等すべての死んだ跡始末をして、誰れよりも跡で死ぬ人だと云つたことを思ひ出した。

次の忘年會大會の幹事を引き受けた龍土會の歸りには、おも立つた人々よりも一時代跡の若手連が二三名、麴町の詩人と共に義雄に付いて來た。が、中の町の隱れ家へは連れ込むことをしたくなかつた。と

云ふのは、自分の痔が果して酒の爲めに非常に不氣分になつた上に、お鳥がうん〳〵呻つて寢てゐるのを思つたからで、而もそれがたッた三疊の穢い部屋だもの——自分等の辨當を運ぶ辨當屋のある角で、渠等と無理に右と左りにわかれた。

例の溝を渡つて、戸を明ると、今夜は斷つてあつたので締りはしてなかつたが、醉つてゐるのと早く横になりたいとの爲めの荒力で、自分の引き明けた戸はがらりと大きな音がした。

『お歸りですか』と、下のかみさんが、炬燵——この頃は、もう、實際の——をしてある奥の方から聲をかけた。

『あ、只今』と答へて、渠は自分で戸締りをしてから、あがり段をあがつた。

あたまの上には、無學、無趣味、無作法、卑俗で、話と云へば、賤業婦の噂ばかりの憲兵連がゐるのを思ひ出した。

上にも下にも、こんな毛だ物同様の野蠻人種が籠つてゐる洞穴より外に、義雄は自分の眠るところもない今の狀態を考へて見た。

『吾人の頭腦は銀河に浴し、吾人の兩足は地獄の床を踏む』と云ふエマソンの警句が浮んだ。が、若しこのおほ袈裟な口調で自分の考へを發表すれば、地獄の床をも踏み破つて、而も天上に須佐之男の暴威の雄たけびをやつて見たいほど絶望的だ。

『こんな腐つたからだ、こんな死獸の體を借りたやうなからだ、こんな多くの惡病氣の問屋をしてゐるやうなからだ、ひよッとすると、耳や鼻や痔は何物かの梅毒から來てゐはしないかと疑はれるからだ！ ええッ！ こんなからだはどうでもなれ』と、義雄は二階へあがつてから、自分で自分を投げ出した。

『どうしたの』と、お鳥は重い首を枕からもたげた。『お酒が惡かつたのだろ――だから、あんなに行くなと云ふたのに。』

渠は默つて返事もしなかつたが、ほッこりと迫つて來る女のにほひを嗅いだ。渠には、鼻も亦右の方しか役に立つてゐないのだが、一方で僅かに嗅ぎ分けるこのにほひが、今のところ、たッた一つの慰めだ。この頃は、外の溝の惡臭も氣にならなくなつた。この部屋へあがつて來るまでの陰氣臭いことも、さう神經を惱ませなくなつた。その代り、お鳥のこの臭が、どう嗅ぎ直して見ても、義雄には穢多臭くなつた。

それでも、なほ、千代子の瘦せて冷たさうなところよりも、夜は、梅が香を包んでゐるやうに、此あッたかい臭のするところがいいのである。渠はこの臭がしないと、却つて寂しい、寂しい氣持ちになつた。

お鳥が又別に風邪の醫者を呼んでゐるのに、義雄がまた耳に通ふ外に他の醫院を訪ふのは、自分で我慢してゐた。そして、隔日に行く學校へは缺勤屆を出した。が、堪へ切れなくなつて、或る肛門病院へ行つた。そして注射をして貰つたのが、藥の利目でか、一層不氣分を增した。

『あたいにこんな二重の苦しみをさせるから、その罰で自分も上下二重の病氣になつたのだ。』

『そりやア、さうかも知れない――許して呉れ』と云つて、義雄はそれをお鳥の氣休めに供し、その實、自分が苦しいのにかの女の看護までをしてやらなければならない面倒を、少しでも避けるやうにした。

二十一

『お母さん！お母さん！』

義雄はぎよッとしてあたまを持ちあげた。お鳥が死んだ母親を呼んでゐるのである。

病人を見ると、仰向いて、目をつぶつたまゝ、久し振の優しい微笑を浮べてゐる。

炬燵の火も消えた眞夜中、しんとして、鼠一匹騒がない。消し忘れた置きランプの光に、時計のちくたくばかりが明かに響く。

その時計のこまかい確かな刻──それが渠の痛みを全身に傳へる血脈にめぐつて、刻一刻、快樂と思へた夢が羽ばたきをして過ぎ行くのがあり〳〵と見える。

ふと、その過ぎ行く快樂の夢を米國の浪漫的詩人アランポーが歌つ

た『大鴉』の姿にして見た。レノアと云ふ世に亡き乙女を戀して、

『あはれ、冴やかに吾れは覺ゆ寒き師走の夜中なり、
炭の燃えさし離れ離れ床にその影落としてき。
吾は頻りに朝を待ちつ、無駄に求めてわが書より
借らんとせしは憂さの晴らし』であつたところへ、『何を瘦せ魂、鄙び魂の不吉怖鳥、古鳥』の鳥類か惡魔か分らないやうな眞ッ黑な大鴉が闇の外から飛んで來て、書齋に備へつけられたパラス彫像の肩にとまつた。そして愛婦の今と同樣ノーモーア、『またもなし』と語つた。

それは失戀と云ふ物を地上に引き据ゑて見たのだが、英國の畫家詩人ロセチの『昇天聖女』に、

『昇天聖女の身を傾けて
恁りしは黃金の天津橫木。
眼は深みて、一しほ、海の

平に靜めるそれに勝り。
その手に持ちしは小百合を三個、
髮なるきら星數は七つ。』

とあるのも、つまり、これは失戀を天上に祭りあげたに過ぎない。

ワルツホイトマンにも同じ系統の『搖り籠から』があり、義雄自身にも長い詩篇『三界獨白』中の『常盤の泉』があつて、矢ッ張り、若々くしい戀の失敗を地上なり、天上なりに引き据ゑ、祭りあげてゐたのが思ひ出された。

然し現在の狀態はどうだ？

空想のでも、天女や戀人なら、まだしも――架空のでも、大鴉やアラバマから來たと云ふ鳥なら、まだしも――義雄は身づから穢多だと思ふ女を抱いてゐるのである。

無論、世に神聖な戀愛などない――あつても、ただの空想で、現世に活動

する人間の糧にはならない。が、曾ては聖愛などぞ——その時から、肉的に見てだが——歌つたことがある渠は、今更のやうに今昔の感無しにはゐられなくなつた。

穢多の熱病人に殆んどあらゆる病氣の問屋！　渠は、かう思つて、ますます絶望的な蠻勇氣を出した。

『死にたくはない——今、一度、この女を完全なからだに返して、その全身の愛を本統に自分に捧げさせて見ないぢやア置かないぞ。それからなら、自分が死んでもいい、また、破れ草履を棄てるやうに、この女をすッぱりおッぽり出してもいい。』

かう考へて、渠は片手で自分の痛みの個所を押し堪へながら、熱に疲れてよく眠つてゐるかの女の二つの病氣の、直つた上の樂みを想像した。

しんとして、外には何物かが窺つてゐるやうだ。渠はこッそり罪惡でも犯してゐるやうにまたぎよッとした。

『お母さん！』と、輪廓のぼやけた一聲に、この僅か三ケ月間に瘦せの見えて來た顏の微笑がまだ浮んでゐる。

─また、夢を見てゐるのらしい─この飽くまでも見飽きぬ妖態！

試みに、そのあッたかい胸から、渠は自分の一方の腕をのせてゐたのをやはらかに外すと、かの女は逃げるものを追ふやうに、兩の手を空しくさし延べた。が、直ぐそれを引ッ込めたかと思ふと、やがて、

『あア、ア、ア──』賴りなげに又苦しさうにもがいたあげく、半身をがばりともたげた。が、あたりをじろ〳〵見渡して、『畜生！殺すぞ』と云ひながら、再び枕に就いた。

ひどい熱に惱んだ跡の疲れで、眠りはまだこの恨みの深い人を纏つてゐると見えた。直ぐ鼾をかき出した。そして、そのぐう〳〵云ふ響

きが、おもて座敷の憲兵共のと何の遠慮もなく競爭を初めた。

みじめな人生の裏家住ひ――かう云ふことが義雄のあたまに浮んだ。こちらの鼾家は、然し、相變らずうなされてゐると同時に、からだの筋肉が痙攣を引き起す前のやうにぴく〳〵動いてゐる。

『鳥ちやん――鳥ちやん！』

靜かに呼んで見たが覺めやうともしない。仰向けに吐く白い息と横向きに吐く白い息とが相交交した。渠は考へた、呼び起して覺めた自分と同じやうに苦痛を感じさせるよりも、いッそのこと、死ぬまでかうしてゐさせる方がまだしも功德かも知れない。且、自分に對しても、躍起〳〵面倒を訴へないでいゝと。

若し渠が昔のやうに十五六歲で結婚をしてゐたら、これくらゐの總領娘があつたかも知れない。無病息災であつたきのふは、駄々も揑ねたし、泣いて無理も云つた。が、その可愛さは、もう、なくなつた。

過ぎ去つた快樂は現在の渠を滿足させるに足りないのに、矢ッ張り、こんなところにこびり付いてゐるのは、宿無し犬が掃き溜の汚物に飢をつなぐと同樣、ここに自分の苦痛の必然な餌じきを求めてゐるのだ。から思ふと、渠には女の方も亦さうではないかと云ふ考へが起つた。この頃、かの女は非常に愛着を增た。少しでも男を自分のそばから離れさせまいとする。が、それは男を先づ外に見えない心臟や肺のあたりからがつ〳〵と嚙つて、つひにはその全身をかの女の病熱と衰弱との喰物にしてしまうのではなからうか？

自分の戀も純潔でなければ、お鳥のも亦利害を混濁してゐると見乍ら、ランプの光に獸性が目覺めて、二つの肉その物の腐爛して行く姿を見詰めてゐる。男の手足に女の存在を知らせるのは、渠がかの女に相分つた毒血のあッたかみである。

このまゝ死んで、腐つて、骨になつたら――

『二つのしやりかうべ！』恨みもない、執着もない、全く關係のないあかの他人だと渠は考へた、そして、また他人の寢言は却つてはツきり聽こえるものだと誰れかが云つたことを。

寢てゐる病人はまたうなされ出したが、今度は何かの怨靈が盤石の重りを以て息の根を押し止めようとしてゐるのを、四苦八苦のもがきで逃げようとするやうなありさまがあり〳〵と見えた。兩腕を空に開いて、

『あアー、あアーアーア、ア、ア』と叫んだ時は、怨敵の姿も見えたかのやうに、義雄は三たびぎよツとした。かの女は目をきよろりと明けて渠の驚いた顏に出會した。

『何か云ふた？』と、ほゝ笑んだ。

『うなされてゐたよ。』

『さう――夢を見て、苦しかつた。』

『…………』義雄はたゞかの女の顔を冷やかに窺き込んで、此寒い深夜のどこか外を想像して見た、千代子が神社か大木の蔭で藁人形の釘を打つてゐたのではないか知らんと。

二十二

『熱の方は大分ええやうになつた依つて、あすからでも、また牛込の病院へ行こか？』

『無理をしても惡いが、なア─おれも然し痔の方は少し辛抱出來るやうになつたから、また耳の療治にせッせと通はうかと思つてるのだ。』

『こんな二人までも苦しい目に會ふのはをかしい─あたいの寫眞が一つ我善坊に置いてあるから、自分の寫眞と一つにして、あいつがそれを五寸釘でも打つてやせんだろか？』

『まさか、ねえ─よしんば、そんなことをしたところで、お前とあいつとの間に無線電信でもかかつてゐなけりやア、通じる筈がない、さ。』

『でも、さうして人を呪ひ殺した奴が田邊に一人あつた。』

『そりやア、自分を呪つてると云ふことを傳へ聽きでもしたから、神經

に負て、われとわが身を殺したの、さ。』
『でも、自分はあいつに靈感が出て來たと云ふたぢやないか？』
『それは鳥渡さう思つただけで——きッとそれだとは思つてゐない。』
『では、若し感づいて、ここへやつて來たらどうする？』
『今まで來なけりやア、もう、大丈夫分りッこはないの、さ。』

かう云ふ話があつた時は、義雄とお鳥とが大工の家を體よく斷られて、假りにその隣の辯護士のおやぢとその妾とがその間に出來た一人の子と共にゐる二階へ移つてゐた。同じ間取りの、同じ裏二階の三疊敷だ。

そこの細君が矢ッ張り女房のある人と一緒になつてゐると云ふ事實は、同じやうな事情にあるお鳥をして少しその神經を休めさせた。
『隣の人が云ふてたが、もとはあのおやぢさんの息子の家で下女をしてをつて、おやぢさんの子を孕んだのだらうや——見ッともない女だろ

が？』
『見ッともないとしても、からだは無病息災だ。』
『自分が惡いのぢやないか？』と、お鳥は義雄を睨み付けた。
そこのおやぢと云ふのは、自分の息子が辯護士の若手として羽振がいいのを自慢した後、義雄と同國だと分つた嬉しさに、
『わたしも、同じやうな事情で、息子と同居してをる婆アさんがやかましいのに困つてをりますので、あなたのことも兼て人ごとには思ふてをりませんでした』と云つた。
『なアに、あり勝ちのことですから』と、渠は笑つて輕く受けたが、こんな死にそくないのおやぢなんかの同情は少しもありがたくないと思つた。
義雄の耳は一向にはかゞしくないのもまどろッこしくて溜らないのだが、痔の方がよくなつて來たので、學校の冬期試驗をやりにも行

くし、段々氣力も恢復した。

すると、自分の身に纏ひ付いたすべての面倒を早く振り切つて、早く樺太の事業に對する計劃に直進したくなつた。

自分の耳も面倒だ。從兄弟の重吉がまだ便りのないのも面倒だ。病人のお鳥も面倒だ。然し最も面倒なのは、夫婦に關する法律の規定と父の遺言とを楯に取り、我善坊の家にがん張つてゐるヒステリ女である。

『人を呪へば穴二つだ――早くあの千代子がくたばつて來れりやア』と云ふ願ひが、義雄の胸を絶えず往來してゐた。ところが、意外にも、死んで呉れたのは千代子でなく、かの女が里にやつてあつたのを取り返した赤ん坊だ。

龍土會の忘年會が、義雄と長谷天香といふ批評家との幹事で、午後五

時から烏森の湖月であると云ふ日の晝過であつた。渠が本郷の耳科醫院へ行つた歸りに、中の町の中通を耳ばかり氣にして通り過ぎてしまひ、裏通の隅にある例の辨當屋と反對になつた角から出ると、今その辨當屋から出た千代子の姿が目に這入つた。

目は落ち込んで、頰はずッと憔け、顏全體に血の色とては少しも見えず、五六間を隔てて見たところでは全く憂ひと呪ひのおも影であつた。たッた僅かの間見ないうちに、身體までが實際にあんなに影の薄い怨靈になつてしまつたのかと思はれた。

羽織や着物は不斷着のままで、こちらには氣が付かず、下向き勝ちに歩いて、その角をお鳥のゐる方へ曲つた。

『とう〳〵嗅ぎ付きやアがつた』と思ひながら、直義雄はインバネスの袖で頰をこする風をして、向ふの横町へ逃込んだ。

その時、千代子は子の急病を報じに來たのであつた。

義雄は千代子を避けたのを誰にも知られたくなかつた。その足で辻車に乘り、龍土軒の玉突場へ行つた。

が、氣になつて、玉が當らないので、二階へ移つて洋食を二皿ばかりやりながら、曾てここへお鳥を連れて來たことを思ひ出した。

『洋食などいやぢや。』かう云つて、お鳥がわざとらしく兩手を袖の中にしまつてゐるのを見て、義雄は喰ひ方を知らないのだと推察した。そして、そばに來てゐたおかみさんの手前もあることだから、こんな田舍者をいい氣に可愛がつてゐると思はれないやうに、

『まア、いやでも喰べさせてやるぞ』と、向ふの皿の肉を自分のナイフで切つてやりながら、『こいつは好き嫌ひが多くツて困るのですよ』

と云つた。

何ぼくど〳〵しい千代子でも、もう、歸つてしまつただらうと思ふ頃、義雄はそこを出て、中の町へ向つた。然しまだ闇に野犬のしツぽを踏

みはしないかと云ふやうな氣持で、おそる〳〵假寓の溝を跨いだ。

すると、直下の女が出て來て、鬼の首を取つた手から話をでもして聽かせるやうな待ち受けた樣子で、

『今しがた、奥さんが見えましたよ。』

『さうですか』と、わざと平氣ではしご段をあがらうとした。

『何だか、お子さんがヂフテリヤで危篤だから――』

『えッ！』渠ははしごの第一段に片足をかけたまま踏みとまつた。

下の女は言葉を續けて、

『芝の慈惠病院の隣の東京病院へ直來て下さいとおッしやつて、お歸りになりました。』

『さうですか、ありがたう』と答へて、渠はお鳥の藥臭い寢床へ行つた。

『來たよ』と、かの女は半身を枕からもたげて、義雄を恨めしさうに見

た。

『何が？』

『あいつが、さ。』

『さうか？』枕もとに坐つて、そ知らぬ風はして見たが、心の中はかき亂されたやうだ。第一、どうしてここを嗅ぎ付けただらう？　靈感などと云つても當てになつたものぢやアない。さきに、森のある近所などと惚けたのも、誰れかに聽いて知つてゐたのかも知れない。或は、また、先月の龍土會の歸りに麹町の詩人がそばまで來たから、あの男から大體の見當を聽いて來たのだらう。また、あんなに影が薄かつたのは、病兒の看護に疲れたのに相違ない。それにしても、自分自身で出て來たのを見ると、子供はたとへ危篤だとしても、こちらが全く可愛がつてもゐないので、向ふも燒けを起してゐるのだらう。

かう考へると、千代子の身の周圍に纒ひ付いてゐた義雄の不思議な

幻影や、おそろしく想像した呪ひの力や、罵倒しながらも子煩惱を取り柄として子供のことは委せ切りにしてあつたこと、などは全く消えて行つたやうだ。が、きッと、お鳥と千代子とはまた云ひ合つてゐたのだと思つたので――それでわざと三時間ほどもよそへまわつてゐたのだが――その面倒くさい報告を聽かされるのがいやであつた。

『また喧嘩したのだらう？』

『喧嘩などしやせん。』

『ぢやア、あがらなかつたのか？』

『さう、さ。』

それぢやア、まだしもよかつたと、義雄は多少氣を落ち付けた。

『でも』と、かの女は言葉は續け、『隣近所へ入らないことまでしやべつて行つた。見ッともなくて、もう、ここにをられせんぢやないか？』

『どんなことを云つたのだ？』

『どんなことツて――』お鳥がふくれッ面をして語つたのに據ると、千代子は先づ辨當屋に當りを付けて這入り込み、そこでこちらのゐ所を確め、ここを出てからお鳥のもとゐた大工に行き、またその隣の蒲團屋にまでも行つて、お鳥に關することを洗ひ浚ひしやべり立てたのである。お鳥は、また、下の女から、それを聽かされ、氣になつて溜らないので、寢床から飛び起きて、千代子のまわつたさきを自分も一々まわり歩いて、自分の辯護をすると同時に、向ふの惡口も吹き立てたさうだ。

『どいつも、こいつも仕やうのない女どもだ、なア。』

『でも、皆がをかしな人だ、目ばかりきよと〳〵させて、聽きたくもないことをわざ〳〵しやべりに來て、と云てゐた。』

『お前も行つたのぢやアないか？』

『あたいのは跡のことだ――然し』と、お鳥は餘ほど讓歩してやると云ふ態度で、『子供が病氣なのは可哀さうだから、行つておやり。』

『そりやア、行くが、ね――』考へて見ると、第一子(女であつた)もヂフテリヤの苦しみに枕もとの小ランプを攫まうとしながら死んだ。第三子(男であつた)も同じ病氣であつたが、母に抱かれながら、なせこんな苦しい目に會はせるのかと云ふやうな目附きを殘して死んだ。第一子の時は初めての子ではあるし、二年二ケ月も生た記念があるので、殘念に思つたが、第三子は二度目の死でもあるし、たッた九ケ月をさう抱きもしなかつたから、惜しくはなかつた。今回の赤ん坊に至つては、見たことさへ少い上に、どうせ死ぬのだらうと思ふと、全く愛着が起らない。

それでも、子が死んだら、またその死骸の處分はしなければならないし、龍土會もあることだし、お鳥が成るべく早く歸つて來て呉れろと賴むにも拘らず、

『今夜はどうか分らない』と云つて、義雄は二階を下りた。そして下

でそれとなく聽いて見ると、千代子は大變な權幕で、意張つて上り込まうとしたのだが、お鳥の病氣で寢てゐると云ふのをかこ付けに、下の人が氣を利かせてあがらせなかつたので、

『わたしも、そんな病人なんか相手にしても詰りませんから、では、歸ります』と、千代子は飽くまでも負け惜しみを云つたさうだ。

それに、入院したのは赤ん坊一人と思つてゐたら、さうでなく、四人の子供がたつた一人を除いてすべて、その病院の厄介になつてゐるのだと分つた。

車を驅けらした時は、もう、四時過ぎで、どこでもあかりをつけてゐた。東京病院の受け附けに驅けつけて聽くと、赤ん坊は既に息を引取つたと告げられた。そして、富美子は普通の病室に、知春は隔離室に這入つてゐるのが分つた。

義雄は、弟の馨に桐ヶ谷の火葬場へ行くつもりで、直支度をして來い

と云ふ使ひを出してから、先づ知春の室に行つた。すると、千代子が一人附き添つてゐて、所天を責めるに最もいい口實を得たと云ふやうな權幕だ。自分の混亂した忿激と愁傷とを眼蓋の落ち窪んだ目に漲ぎらせ、而も自分は亡兒の魂に從つて既に地獄か墓の底までも檢閱して來たやうな強い暗い光を顏中に現はし、

『あなたのお庇で、わたしも兒の死に目に逢へなかつたぢやアありませんか？』

『そりやア、知れ切つてらア、ね。』義雄はかの女に毒々しく見えたほど惡度胸をきめ込み、睨み付けながら、『おれの隣近處へまでも、わざ〳〵入らざらんおしやべりをしてゐやアがつたからだ。』

『おしやべりをしないで、どうします？あんな女のことは、一切合切しやべり立てて、隣近處へ顏向けの出來ないまでにしてやるんだ。』その聲で、眠つてゐた兒が目を覺した。そして、父が一方の枕もとにゐるの

を見て、びッくりしたやうに身をのり出し、他の一方にゐる母の膝にしがみ付いた。

『それもよからう、さ――また引ッ越させるだけのことだ。』

『どこへ逃げたッて』と、兒にそのまま蒲團をかけてやりながら、『このわたしの前ぢやア隱れをうせませんよ。』

『現在、けふ、あの辨當屋から貴樣が出たのをおれは見たのだ。面倒だから外してしまつたのだ。』

『さう――』千代子は意外だと云つたやうにぽかんとした。が、負てゐないで、また語を繼ぎ、『然し、清水の居所は當たつたぢやアありませんか？』

『原口かどこかで云つて貰やア、當るのは當り前だ。』

『いえ、そんなことア――あすこへは云つてなかつたぢやアありませんか？』

『ぢやア、麹町で聽いたのだらうよ。』
『あの方だッて、知りやアしません。』
『貴樣が口どめされてるの、さ。』
『あんなこと！　あなたは餘ッぽど疑ぐりッぽいの、ねえ。』
『そんなことアどうでもいい』と、義雄は千代子の強情を押し付けたつもりになつた。が、今の應對で以て見ると、かの女は中の町であんなおしやべりをして歩いたやうに、どこへでも、渠の知り合ひでかの女も會つたことがある人のところへは、この狂態を以て吹聽しに行くらしい。原口へ度々行くのは勿論のこと、もう、麹町の詩人へも行つた樣子だ。

　思ひ出すと、かの麹町の詩人が我善坊の家へ遊びに來た時、千代子は義雄のゐる前で渠の不行狀を詩人に訴へた。然し、

『そりやア、然し、男子のことだから』と、かう答へたので、
『あなたまでがそんなことを』と叫んで、かの女は詩人を我知らず突き飛ばした。すると、同じやうに神經質の詩人は非常に氣を惡くして歸つた。

それを見ても、誰れも千代子を眞面目には相手にしまいが、意地惡くでも出て、こんな狂人じみた女のおほ袈裟な言葉を釣り出し、それを根據にまた義雄自身の平生を人が世間に廣告しては、甚だ以て大迷惑だ。
『實に困つた女だ――その歩いた跡をお鳥がまた云ひ消して廻つたのも尤もだ』と、渠は考へて見た。
『わたしは、どうしても』と、千代子はなほ其言葉をさし控へようとはしない。
『どうしても、この神さまの力で、あなたの不身持ちが直るまでは、あなたと清水との隱れ場所を追窮しないぢやア置きません。あなた方に

隱れをうせる氣があるなら、わたしにも追ひ窮める力があります。』

『さうなら、さうとして置け——だが、今回も葬式に宗教上の儀式は使はせないぞ。』

『そんなことア御勝手におしなさい——また、さう云ふだらうと思つてたんですから。』

義雄は元耶蘇敎信者であつた。そして、その敎へを脱する頃になつて、千代子の方が信者になつた。が、かの女も今では變挺な陰陽學に凝つてしまつた。今年の父の葬式は父の信仰に從ひ佛式でやつたし、一昔以上前の第一子の時は、千代子の望みにまかせて耶蘇敎式であつたが、第三子の時は滋賀縣の大津で無式で濟ませた。その次が今回のだが、渠は死んだものは既に無も同前だから、ただそのまま土から土、闇から闇へ葬つてしまうつもりだ。

『死んだものなんか、掃き溜へほうり投て置いてもいい位のものだ。』

『どうせ、あなたが死ぬ、死ぬと云つてたから、あの子もその通り死んだのでしようし、うちには誰れも人情に敦い人がゐないのだから――あなたは色女のところばかりへ入り浸りになつてるし。馨さんは馨さんで、人の頼んだこともして呉れないで、勉強もしずに、どこかほつき歩いてばかりゐるし。お母さんはお母さんで、まだお父さんの一周忌も來ないうちに、娘の方へ逃げて行つた癖に、五尺も雪が降るところで寒いから、また歸りたい！もないものだ。』

こんな繰言を千代子が云ふのを、義雄は聽くやうな、聽かないやうな振りで、自分の心には、どうせ死ぬなら、何も分らない空體の時に死ぬ方がいい。人生の味はひが分つて、悲痛に悲痛を重ねて來ると、却つて未練が多くなるものだ。と云ふやうなことを考へてゐると、にこにこした看護婦が病院の命令を受けてやつて來て、早く死體を引きとつて貰ひたいと云つた。

『今に人が來ますから、それまで待つて下さい』と、義雄は素直に答へたが、さツきから病院の人々の死者並にその家族に冷淡なのを怒つてゐたところだから、『どうせ傳染病は家へ引き取ることが出來ないのでしよう』と、からかつて見た。そして、その看護婦に頼んで、湖月へ少し遲くなるからと云ふ理由の電話をかけて貰つた。

『まア、兎も角、死んだ兒の顏でも見納めに見ておいでなさいよ。』から千代子が勸めたのにも意地を張つて、義雄は何か反抗の意味を云ひ返さないではゐられなかつた。

『血の氣のなくなつた顏などア、手前のを見てゐりやア充分だ――手前・マイナス氣狂ひイクオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなものも、もう、何度も見飽きてらア。』

千代子の妹がきのふまで來てゐたが、家の方の世話が忙しいので、代りに專門の看護婦を雇つて附き切らせてあると云ふ富美子の病室へは、義雄は行く必要がないと思つた。

富美子のは其祖父の死因と等しく腎臓が惡いのであつて、チフテリヤではなかつた。が、知春はまだ小さいだけに死んだ子のが殆んど同時に移つたのである。義雄は、若し梅毒氣味があるとすればその痔に於て父のを遺傳したと思つてゐるし、富美子は又その祖父の腎臓を受けたし、知春は又その兄弟の病氣に傳染したのだ。然しこの知春のは手後れでなかつたから、注射が利いて、まだ熱は去らないが、咽喉のひゆう〳〵云ふのは直つてゐた。

『もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつも今のうちに死んだ方がましだのに』と考へながら、義雄は其室で、千代子が死んだお父さんからして後妻の姉に手を出しかけた程だから、その惡い

報いが子や孫にまでも來たのだと云ふやうな繰言を云ふのを聽き流してゐた。かの女は病兒の無理をなだめて眠らせるやうにしながら、切りもなくいろんな不平を漏らしてゐた。

やがて馨がやつて來たので、死骸に付き添つて桐ケ谷へ行き、今夜はそこの火葬場の茶屋へとめて貰ひ、あすの朝、骨拾ひをして歸るやうに命じた。

『とめて呉れるか知らん』と、馨はいやさうな顏をしたが、

『おれが前に經驗があるから、云ふのだ』と兄に叱られたので、

『では』と、しぶ〳〵承知した。義雄は渠に火葬の手續き證の出來てゐたのなどを渡した。

人夫の代りに呼んだ車夫も來たと云ふので、知春の室には鳥渡看護婦を頼み、千代子もしほ〳〵として、義雄等と共に出て行つた。

死人の置き場が別に隔離室の建物の外れに建つてゐて、田村の赤ん

坊の外に今一つの棺があつた。いづれにも別々に蠟燭がともしてある。線香の立つてゐる粗雜な土皿もある。

二名の看護婦が何か艶ッぽい聲をあげてきやッ〳〵と笑つてゐたが、義雄等の這入つて來たのを見て、急にしほらしい態度に改め、火をつけたまゝ手に持つてゐた線香を棺の前の香皿にさし、

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と不慣れな聲で合唱した。

『とう〳〵死んでしまつて』と、千代子は棺を見詰めながら、『あんなに親が骨を折つて介抱したのに――憎らしい！』

『そんなことを云つたッて、死人にやア聽こえやアしない。』から云つた義雄の額の廣い、目の銳く眼鏡の中に光つた、頰のこけた、濃い顎髯の三分ばかり延びた、如何にも嚴格な眞面目な顏を、二名の看護婦はおそろしさうにふり返つて見た。

『車屋』と、渠は怒鳴り付けるやうな聲で、『これを乘せるのだ。』

『へい。』車夫はおづ〳〵棺に手をかけたが、輕いので、造作もなくその肩で運んだ。

先づ馨が乘り、それから蹴込みへ白い布をかけた箱を乘せたのを見て、通りかかつた醫員が立ちどまり、

『何ですか、それは？』

『棺です』と、義雄はきつい、尖つた聲で答へた、分り切つてるぢやアないかと云はないばかりに。

『御注意までに申しますが、ね、知れると車は警察でやかましいのです。』

『ぢやア、これで包んでおやりなさい』と、千代子は所天に自分の卷いてゐた絹の肩掛けを渡した。醫員はそれを見て默つて本館の方へ行つてしまつた。

一番長く――と云つても、きのふの夕方から――看護した若い婦人が一人、義雄等と共に裏門まで車に附いて來た。

殘念だ、ねえ、もう、これッ切りかと思ふと――』

『お氣の毒でしたわ、ね。』

『桐ケ谷だよ。』義雄が念を押すと、『へい』と、車は驅け出した。

歳の暮に近い寒風がその跡にひゆうひゆう起つた。

千代子はすゝり泣きをして、袖を目に當てた。義雄も胸が一杯になつたが顏を反むけて、愁ひの色を隱した。そして、氣を無理に持ち直して考へた、死に行くものは自分に關係がない――亡父でも、自分に殘して呉れたのは、ただ梅毒もしくは痔と僅かな財産だけだ――千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

『さうだ。どうしても、わが國の極北へ行かなければならない――でないと、あいつ、意志が弱いのだ、爲る〳〵と吹聽ばかりして何も着手しない、と云ふ友人間のそしりを脫する事が出來ない。』

千代子の言葉に據れば、一昨日、重吉も樺太から歸つて來て義雄に會ひたいと云つてるさうだ。

渠には、この事業により、やがて、自分のこれまでの失敗と不評判とを取り返して、自分の社會的發展をも實現することが出來ると云ふ希望が輝いた。

『今晩は歸つて來なさるでしよう、ね。』かう千代子が聽いたのを振り向きもせず、自分が幹事の忘年會が湖月で多くの藝者などを交へて賑やかに飮んでゐるのを想像しながら、

『どうか分らない』と、お鳥に告げて來たと同じ言葉を繰返して、電車の乘り場に急いだ。

渠はそれほど、萬事を投げ出してまでも、友人、の仲間に孤立の自分の意氣込みを發表したかつたのである。

發展　終

泡鳴著作目錄

魂迷月中刄（悲劇）
明治二十七年十二月、女學雜誌社發行

嘉播の親（物語詩）
明治三十二年、雜誌學窓餘談連載

露じも（詩集）
明治三十四年七月、自費出版

夕潮（詩集）
明治三十七年十二月、日高有倫堂發行

悲戀悲歌（詩集）
明治三十八年六月、日高有倫堂發行

海堡技師（詩劇）
明治三十八年十月、金尾文淵堂發行

神秘的半獸主義（論　文）
明治三十九年六月、佐久良書房發行

泡鳴詩集（夕潮、悲戀悲歌合本）
明治三十九年十一月、前川文榮閣發行

新體詩の作法（詩　論）
明治四十年十二月、修文館發行

闇の盃盤（詩　集）
明治四十一年四月、日高有倫堂發行

新自然主義（論　文）
明治四十一年十月、日高有倫堂發行

耽　溺（小　說）
明治四十三年五月、易風社發行

放　浪（小　說）
明治四十三年七月、東雲堂發行

發　展（小　說）
明治四十五年六月、實業之世界社發行

明治四十五年六月廿八日印刷
明治四十五年七月一日發行

不許複製

定價金一圓

著者　岩野泡鳴
發行者　野依秀一
東京市芝區露月町二番地
印刷者　荻原勝次郎
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　實業之世界社
東京市芝區露月町二番地
振替貯金口座三四三參番
電話芝五八四番

若宮卯之助君著

《参版》

豈に辯を好まんや

△定價 六十錢
△郵税 八錢

◉大阪毎日新聞本書を評して曰く！

著者は在米十三年其間華盛頓の圖書館に滿三年通つて一日も缺さず勉強したりとて大に米人を驚した篤學者で本書は其蘊蓄の一端を開いて平凡化せる我が學界、政界、外交界並に社會等に對して痛快剴切なる批評を下せる論文數十篇を蒐めたるものである識見時流に超越して鋭利なる觀察と勁鋭なる文章とを以て時弊を指摘し殊に曲學阿世の學徒に對して深刻なる警策を下せる所などは實に溜飲が一時にズット下がるやうな書振である時世に反抗して自己の主張を獅子吼する著者の意氣には仲々愛すべき所がある讀む者著者の痛罵を快とするに止まらず更に進んで其精神のある所を察しなば反省の材として敎へらるゝ點が少なくない。

發行所 東京芝露月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三三

野依秀一著

……大好評！忽ち八版！……

無學の聲

△定價金壹圓廿錢 △郵税八錢 △四六判七百六十八頁

著者は無學の一青年にして、而かも天下國家を論じて誤らず、人間處世の道を論じて誤らず、時事問題を論じて誤らず、人物を評して誤らず、時代の思想を論じて誤らず、哲學の眞核に觸れて誤らず、學者先輩を論じて誤らず、先輩大家と對談して氣焰萬丈、一種獨特の識見と人格を有し、一度決すれば利益を問はず起つて事を爲す一個熱誠の快男兒也。又た難に逢つて屈せざる男也。內容の如何に凡を拔けるかは多言を要せず、是の青年にして是の著あり、天下の無學者は彼に學び、天下の有學者は彼に研究せよ。

發行所 東京芝露月町 ◎實業之世界社◎ 振替貯金口座三三三四

天下の四小快著

實業之世界社々長　野依秀一著

▲快氣焰

▲四版發賣
△定價廿錢
△郵税貳錢

▲短刀直入錄

▲參版發賣
△定價廿五錢
△郵税貳錢

▲野依式處世法

▲參版發賣
△定價卅錢
△郵税四錢

▲傍若無人論

▲五版發賣
△定價廿錢
△郵税貳錢

發行所
東京市芝區露月町
振替貯金口座三四三三
電話芝五八四
實業之世界社

(再版)

三宅博士序 伯爵大木遠吉著

我が抱負

定價金七十錢
郵稅金八錢

大木伯は我が華冑界唯一の快男兒である。伯が其の熾烈なる正義の觀念を以て我が政治界の禍根たる閥族官僚に對して奮鬪し來れるは世人の目睹する所である。伯の如きは啻に現代華冑界に於てのみならず、實に我國稀に見るの熱血男兒である。本書は即ち伯の國家論、社會觀、政治論、人生觀、及び其他の時事問題に對する正論を收めたるもの、名づけて『我が抱負』といふ、眞に之れ貫くに仁義の道を以てせる侃諤の言議、一讀何人も盡忠至誠の人となるに違ひない。本書の如きは實に昏迷腐敗せる今の人心に對する大なる燈明臺であり刺戟劑たることを疑はぬのである。

發行所 東京芝露月町 ◎實業之世界社◎ 振替貯金口座三三四參

大好評八版

三宅博士序――福澤桃介君著

桃介式

定價金五十錢
郵稅金四錢

本書を一度讀めば、就職難、金儲、立身出世、修養煩悶等の諸問題忽ちにして解決せらるべし。

全國の大新聞筆を揃へて曰く、言奇矯なるが如くにして而かも一種の哲理を含みたる大教訓也と。

發行所 東京芝露月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三参

農家の福音

萬代虎藏君著

(新版)

農家の金儲

▲定價金四十錢
▲郵稅金四錢

我國の農民が經濟的に困つて居るのは事實である。それには例の苛稅誅求のお蔭も大にあるに違ひないが然し農民は尚ほ爲すべき餘地のある事を忘れて居る。それは即ち副業である。此の副業を盛んにすれば農民の經濟的地位は遙かに樂に幸福になるに違ひない。それがやがて國家社會の爲にもなるのである。著者茲に見る所あり、二十年來の研究實驗に依つて本書を成した。題して『農家の金儲』といふ、著者の意蓋し我國現今の農家に對して最も適切なる副業の種類、方法及び其の販賣法等に就ての懇切なる相談相手たるに外ならぬ。故に本書を讀んで實行すれば、農民諸君は其の本業の傍ら確實にそれだけの利益が得られるのである。金を儲けたいと思ひ、國を富ましたいと思ふ農民諸君の是非一本を備へられんことをすゝむ。

▲發行所
東京市芝區露月町二番地
振替貯金口座三四三參番
實業之世界社

大浦子爵題辭
澁澤男爵序文　伊藤直矢君著

金儲の瓜哇（ジャワ）

定價金五十錢
郵稅金六錢

忽ち再版

日本人が容易に渡航し得らるゝ海外發展地は唯一の南洋あるのみ、而かも南洋中最も有利有望なるは即ち瓜哇（ジャワ）を以て其隨一となす。著者は彼地に六年間獨立奮闘せる一青年にして、記する所悉く實驗より來れる金儲談也。

實業之世界社編著

三浦將軍縱横談

▲是れ天下一品

の觀樹三浦將軍が天下何人も知らざる種々の問題に對する大膽不敵なる奇警の言論集也

發行所　東京芝區愛宕町　◎實業之世界社◎　振替貯金口座三三三四

農家の大福音

天理農法發明者
小柳津勝五郎翁著

▲定價金九十錢
▲郵稅金八錢
▲菊判クロース
▲百九十八頁

二倍收穫 天理農法

(十五版)

此の本を讀んで此の本に書いてある事を實行すれば米でも麥でも粟でも何んでもかでも農作物はすべて今迄の二倍取れる事請合なり、うそでもなんでもない現に實行して實効を收めて居る所が隨分ある。

發行所 東京芝露月町 ◎實業之世界社◎ 振替貯金口座三三四三三

男爵後藤新平閣下序文

實業之世界記者　不屈生編著

名士の偉人觀

定價金七十五錢
郵稅金六錢
四六版箱入

本書は大隈伯、板垣伯、林伯、石黑男、澁澤男、後藤男、加藤男、三宅博士、森村翁を初め現代數十名士が、自己の接近し、私淑したる西鄕南洲、岩倉右大臣、勝海舟伯、伊藤公、福澤先生、後藤象二郎、陸奥宗光伯、井上毅子、森有禮子、品川彌二郎子、矢野二郎先生、江藤新平、兒玉大將、星亨、中上川彥次郞外數十の偉人傑士より得たる感想や敎訓や逸話等を記したるものにして、頗る興味深く、一讀多大の敎訓を得らるゝこと請合也

人の世に處するに最も心得置くべきは實に人物の事也。然るに本書を一讀すれば、明治年間の偉人傑士の大半を知り得て、頗る處世上に裨益する所なるべし。

發行所　東京芝露月町　◎　實業之世界社　◎　振替貯金口座三三四參

笑ひながら利益を得

實業之世界記者一寸法師編著

(參版)

破顔一笑

▲定價卅錢
▲郵税貳錢
▲小形美本

▲是れ名士の奇聞素破拔集也

笑ひは人生の花である。而かも無意味に笑ふは餘り感心せぬ。本書を讀めば笑ひながらにして人物を知り、機智頓智を學び得らるゝのである。

發行所 東京芝區月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三參

實業之世界記者無花生編著（好評再版）

三怪物の自白

△定價金五十錢
△郵稅金六錢
△四六判美本

題して三怪物の自白といふ三怪物とは誰ぞ曰く相場界古今未曾有の大策士今天一坊の稱ある松谷元三郎。曰く東西の兩洋を股にかけて世界的活動をなす博覽會王櫛引弓人曰く日露戰後の株式界に成金の親玉と謳はれたる鈴木久五郎の三人である。即ち本書は此三怪物の僞らざる大膽なる自白である、彼等は正に怪物である。世人が悉く彼等の眞似をしようと思つて出來るものでなければ又悉く眞似て善い事ばかりではない。兎に角善かれ惡かれ、彼等が斯の如く大なる事を成し遂げた半面には、幾多の天才と幾多の膽力と、幾多の智識とが含まれてゐるから、波瀾曲折に富める彼等の自由は、恰も冒險的立身小說を讀むが如し、而かも世の學者、宗敎家、敎育家などに依つて得られざる眞理と敎訓を看取し得るのである。

發行所　實業之世界社

東京市芝區露月町二番地
振替貯金口座三四三參番
電話芝五百八十四番

苦學者の福音

實業之世界記者不屈生編著

三版

苦學の實驗

▲定價金貳拾五錢▲郵税金貳錢▲小形二百頁

本書は現に都下の大學、高等學校、中學校等に苦學しつゝある幾多の學生中より拔ける優秀なるものゝ實驗談に成るものにして、其言ふ所悉く實行せらるゝ事のみ。故に苦學を以て身を起し志を達せんとする青年は先づ本書を讀みて後決心する所なかるべからず。又世の所謂樂學生は本書を讀みて自重する所あれ。

發行所　東京市芝區露月町二番地　振替貯金口座三四三參番　實業之世界社

本書は如何にして成されたるか

三田商業研究會編纂（第六版）

福翁訓話

定價金五十錢
郵税金六錢

一、貴下が慶應在學中福澤先生より受けられたる忘れ難き訓戒

二、貴下は慶應を出で初めて社會に入らるゝ時福澤先生より如何なる教訓を受けられしか

三、貴下の眼に映じたる福澤先生の最も學ぶべき點

四、今若し福澤先生在世ならば如何なる言行をせらるべきか

福澤諭吉先生は明治の大偉人にして、世界の大教育家也。威武に屈せず、權勢に媚びず、超然三田の丘上に長嘯して國民の薫陶に從事する事多年、現代社會に於ける最も健全なる分子は皆先生門下の秀才によりて形成せらるゝもの也といふも敢て過言に非ず。本書は本社が社會の各方面に撒布されたる先生門下の秀才に對して上に掲げたる質問を發して得たる答辯を蒐集編纂したるものにして、先生が各個人に就て爲されたる教育の大義は正に此一編に盡くされたり。

發行所　東京市芝區露月町二番地　振替貯金口座三四三參番　實業之世界社

▲小柳津、池田兩翁及十文字氏序　實業之世界社編纂

成功失敗 天理農法實驗談

近刊

天理農法發明者小柳津勝五郎翁著『二倍收穫天理農法』一度世に出づるや非常なる好評を以て迎へられたのは、物價昂騰、米價騰貴、農民疲弊の聲高き今日に於てはさもあるべき筈である。所で此の『天理農法』の一小冊子に依りて最初より一回の失敗もなく、直ちに其の効果の顯はるゝを望むのは餘りに蟲のいゝ話である。由來、天理農法の本旨とする所は空理空論に非ずして實行である。よく之を實行して初めて其の効果を擧げ得べきものである。故にこれまで、天理農法の實驗者にして二倍或はそれ以上の收穫を得るに至るまでの經驗談を集め、如何にして實績を擧げたるか、或は最初に何故に失敗せしか、其の失敗を排除して遂に偉大なる天理農法の眞理を實現するに至りしかを極めて明細に詳述する事にした。世の天理農法燻炭栽培に志すもの、是非とも『二倍收穫天理農法』と共に併せ讀まざるべからざる珍本である。

發行所 東京芝露月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三三

伯爵大木遠吉閣下序――伊藤銀月先生跋

樋口麗陽君著

(新版)

破青年訓

▲定價金五十錢

▲郵税金 六 錢

所謂先輩の青年訓は山の如くあれども青年の 先輩訓なるもの未だ之なきを慨して今大隈伯、後藤男、新渡戸博士、其他先輩數氏の青年訓を駁し即ち青年の爲め萬丈の氣焔を吐く世の青年諸君は須らく一讀せざる可らず 先輩も亦他山の石とするを要す

發行所 東京市芝區露月町二番地 振替貯金口座三四三參番 實業之世界社

二快著豫告

活天狗!! 岩谷松平君著

天狗物語

定價未定

是れ明治の怪物岩谷松平氏が過去六十餘年間の波瀾曲折を極めたる奮闘の僞らざる自白と將來の希望とを談りたるもの蓋し近來の快著!!

福澤桃介君著

無遠慮に申上候

定價未定

是れ觀察の奇警と鋭敏とを以て其名高き福澤氏が無遠慮に大膽に卒直に言ひ放てる言議を集めたる唯一の快著也

發行所 東京芝露月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三参

日本一の實業雜誌

實業之世界

直言直筆は本誌の特色也

▲天下に卒先して東京電燈會社に對し電燈料の三割減を提唱したるは本誌也

▲日糖事件の導火線となりたるは本誌也

▲天下に卒先して『二倍收穫天理農法』を熱心に唱道したるは本誌也

▲實業界の善悪の眞相を語るは本誌也

▲青年處世の神髓を語るは本誌也

▲金儲の眞相を得るは本誌也

▲趣味實益の記事を以て全ページを充たすは本誌也

元氣横溢は本誌の特色也

發行所 東京芝露月町 ◎ 實業之世界社 ◎ 振替貯金口座三四三叁